837
13
79

ちりぬる
をわの部

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79

ガラス使用

雅言集覧巻之四

○知の部

石川雅望集
関豊脩補

837-79

曾山文庫

根岸仁軒氏寄贈

ち　乳［和名三］ー知 和名 母所以飲子之汁也［ほうそくる 九］やんごとなき人のちあるそへて参りのみ
［万十二 十三ウ］緑児のためこそ乳母は求むといへ乳飲めや君が於毛求むらん［よこ之］上 ゐちうつ
かたはらなるとはをやりてなぐさめなん。まづかたはらといふ俗のサッパリとせしことそ［枕三五］さすがにきぬの...
乳のへざるりみするめのと お乳のなきむすこ そこも乳の出ざるうれひのなきをいふ［ほ拾］雑六 まのりかやのとせんぞ

ーのみそき　みそぢ　ーのなき

までまゐりける女の乳のみそく侍りければよみ侍りける［匡衡］「たらちねもなくなくおひそる身もちなくてそうも
のめのとせんとかへし 赤染衛門「さもあらばあれやまとことはかしこくはべるそぞけにつけてあるきぞうぞ
［夫木廿四］其中元生悉是吾子 あり「ちもなくていつけるきみのあはれにひのりてぞおひちくなる

ーのくろき

［字拾 夫］共に智をうねてよめり。［古事記上廿］掛出胸乳［狭衣三上廿九］ひとつのはぞのむね
さきしめきてるよりは乳の例ならずくろうてあるにんさうらぬとなむ見とがめさせのへべ。これは孕子にて
黒くなるとなり。○乳汁をも乳房をも共にち といふ　乳ぶさ 并 乳つけ 別に出せり 乳クビ乃

ち　血［和名三九］ー知 和名 肉中ノ赤汁也　ちそく　唾血［同十六］ーー知 波久ハ 緑二内傷一 緑積熱有二此病

ち　鉤［神代紀上十二］剱刃ハヨリ垂ル血ヲ［字治拾遺ニ十三］刀をさぐりて血のつくと出きうると。こは知さ料わきあへ
［神代紀下廿三］責二其故鉤一ヲ。つり針をいふ。○又［夫木廿四］は禾枝の月毎に
古言へ　万をよそへ

ち　千　ちゞ　又　ちへ　千重　ちとせ　千年　のちぢひかなの限を出をは　つりぎり とも　よみをもおつり

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』　請求記号 837-79

まつろいな国ををさむと[日]七廿[万]ちちやある神代よりの文字も宝まろぞ[日]七[仮]通昭[万]ちちやふる神のまもりやんつくうるよ
[古今]存ちちやある神代よりの文字も宝まろぞ[日]七[仮]通昭[万]ちちやふる神のまもりやんつくうるよ
るゝもの枝もろくなべらるり・[万]十三九 血並昔守佐の[古]雑上[万]ちちやふるうちのまもり姓
るゝもの枝もろくなべらるり・[万]十三九 血並昔守佐の[古]雑上[万]ちちやふるうちのまもり姓
るゝとゝぞのゝとゝそよとゝのくやゝんべ。[神中務]八よゝかるゝ〳〵とあり

ちぐこのたま

千ぐあの玉 宣化紀七 黄金万貫又不可療餓白玉千箱何能救冷 もつき[夫]
[神中務]七 雅教[夫]廿三 玉ぢびておつる涙の玉ゝうべまそ[万]廿三 玉ぢびておつる涙の玉ゝうべまそ

ちく

千ぐ[万]五廿三 そろ〳〵になりぬゆるうも白玉の智弊よゝづてるつく〳〵の国ゝ
[新古帖]一 杉原 うちとそのゝ[万]十八[夫]廿五 ちくてよけどもゝの玉もさらぬ。へ[拾冬]廿七 ちくてよけどもゝの玉もさらぬ。へ[拾冬]廿七 ちくてよけどもゝの玉もさらぬ。へ

ちと

倍と白 [弁内侍日記上] 姿ぢゝそらみてちとかきるるゝて出されゝてそおも白うゝゝ
かゝづりのまゝ [宇治拾遺八ノ] 三日とらふひるつゝくもちとまどろうまもものよゝともるきに

ちどり

千きる [万]三十八 ゝぐせてぐゆるゝのさとのわきうに ちどりなく
[拾冬]廿七 ゝぐせてぐゆるゝのさとのわきうに ちどりなく
[拾冬]廿七 ゝぐせてぐゆるゝのさとのわきうに ちどりなく

○なゝ〳〵なぶゝ〳〵なゝ〳〵つなとふゝ〳〵つなぶゝ〳〵むらゝ〳〵ふゝ〳〵ふゝ〳〵川ゝ〳〵ささの一
浦ゝ〳〵浅ゝ〳〵かちのゝ〳〵 以上[夫]廿七 [万]三十八[夫]廿五 夕ばゝ〳〵

ちどり

又○ちどり ももちどり [万]十六廿七 ちどりの声ぞさまざまの [新古今式]弱葉下 みのゝそとうにふるものゝ
[万]十六廿七 ちどりの声ぞさまざまの [新古今式]弱葉下 みのゝそとうにふるものゝ
[万]十六廿七 ちどりの声ぞさまざまの [新古今式]弱葉下 みのゝそとうにふるものゝ

ちとう

地頭 [続古今]後三 ある人いもく該国の地頭とかいふ名人にぞありける
ゝでひろつゝとるとえて友をるゝ川ばよのをぞゝちるるそるりくちどりとゝれういひん
ゝでひろつゝとるとえて友をるゝ川ばよのをぞゝちるるそるりくちどりとゝれういひん
[万]十六廿七 ちどりの声ぞさまざまの [新古今式]弱葉下 みのゝそとうにふるものゝ
又○ももちどり ももちどり 千もちどり

ちとせ

千年 [万]三十七 もゝくゝのとをありとをぬ ゝ千歳ゝのとゝろる
[保拾]廿七 修古 いかねるかちゝもとをぬ ゝ千歳ゝのとゝろる

○
ーのそる 千年のそる [保拾]廿七 ゝそとろる氷ようてもちぶらゝ〳〵ゝもゝのそにめうんをろと
ーのさつき 千年の青 [続千]廿七 [拾]廿七 松るゝでぬとうひうんおまのゝみの日よ
ーのあき 千年の秋 [千]廿七 花里をを後 八まを集の白ひよまろ〳〵ゝをう代ゝゝもゝの秋とかさぬゝ〳〵とゝ
ーのさら 千年の後 [古]廿七 通昭 ちちやふる神のまもりやんつくうるにたゝもゝの後もゝぬゝるうり
[秋遠]廿七上 ゝ人のよいひとゝをのちめゝにてもゝもゝの後もゝるゝ白もゝ

○
ーのまつ 千年の松 [六帖]九 うくも世よやゝんよかるらぬうゝれもゝゝもゝの松るゝろうくゝは
ーのかげ 千年の後 [今昔]廿七 [古]廿七 そもい [万]十六廿七 万代とまつにぞをんとゝいひつるちゝもゝのうげにさちんとゝいゝ
[拾]廿七 非果 よゝのぶ いのりつるこうゝのゝひゝなれゝぢゝもゝのうげゝかくてつうんん
まろぬ[二] めちひ後をまゝろよゝてちゝもゝのうげよゝゝるまゝ年のうちのいえひごとゝもゝて

○
ーのこゑ 千年の声 [続後拾]廿七 ゝもの声のゝぎゝとほゝまゝむ都のゝとゝもの都をゝゝにきちゝん
ーのうゝぢ 千年の数 [秋玉]九 ゝゝが代ゝ後のまさごをひとうゝづゝちゝもゝの数よゝろうゝくゝとゝのでゝ
ーのたゝし 千年の例 [古]廿七 そもい いよゝゝなゝゝ三る内のゝにのそゝとるゝ人ゝちゝもゝの命ゝのぶゝらるう
ーのいのち 千年の命 [拾]廿七 よゝゝゝぢ [秋玉]九 うゝのゝくもつゝそゝるゝ月のゝよひゝちゝもゝの命ゝのぶるそゝゝよ

○

ゝそちそるゝへつけそゝゝるうゝゝ。[日]廿日 [万]大暦元年有地頭銭毎畝二十 [貞永式目抄]或記云文治元年十二月日勅諸国地頭職ゝゝ東書云文治元年或建久元年始諸国地頭職御拝領ゝゝ

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

ちゝ　父

和名二十二　父和名知々　そてき〳〵八　父のう〳〵老ぬむづら〳〵げよみろうとごそ〳〵

一ごうど　父帝　かゝゝ末　卅三　父おうぐまうでのみひて　かゝゝ末　卅三　父おうぐ母れのうへ

一のおそん　父の敬ひ　タうゑ　卅三　惟光が父のめそ〳〵

○　**ちゝぎみ**　父君　万六卅八ナギミ　父公よりもまさりてぞ　未つむな　三　父ぎみのりと里にてもおやの

○　**ちゝうへ**　父方　そゝひめ　四ノ十　父うへにつけてつうへなり

○　**ちゝをじご**　父なゝ子　多武峯物語　そゝにそ人敬よ

○　**ちゝなゝ**　父母　万廿二　ゝさうへんと聖きさ

そゝめ　廿六　父母よりてあつう

ちゝ

千ぢ。下めちゝちゝ三そぢ　みどのちゝ　例の音仮名合ひ　又三ちゝ三千年　ねごひてちゝ三ちゝ

。但百とゞめゝとゞめゝちゝともゝ〳〵どにちゝ

ちゝめちゝぐとゞめゝど。ゝ〳〵く敬の千あるとゞちうゝ　千ぢ　又三ちゝ三千年　ねごひてちゝ三ちゝ

○　**一にそむ**　。サそぐ　スアーツ　古　秋上　まさ　月うれゞちゞこ

○　**一にるをしさ**　ほ　悪　いつゝ武ア　見ゝうるんいち

○　**一にくゞく**　ほ　悪　いつゝ武ア　見ゝうるんいち

○　**一のいろ**　千ぢの色　古　悪に　ちゞの父よう

○　**一のいろく**　千ぢの父て　夫　に　雑を　八十〳〵ゐもちゞ

○　**一のおさ**　千ぢの秋　いせ物　九十　ほ　ちゞの秋ひとう

○　**一のくさゞ**　千ぢの名ゆ　ほ　秋下　秋の敬ひというるう

ちゝ

千ぢの社　ゆげまぢ　九十二　ちゞのやゝ

○　**一のさがね**　千ぢの金　永久　王昭君　名昌　見るまう

山もゝ　下　さてやうで今

○　**一のさけ**　千ぢの酒　古　ちゝの名ゝ　ちゞのるさみもゝのゝゞそゝ〳〵さ

○　**一のそこ**　千ぢの底　拾雑上　ちゝくに人いうゝ

そゝうのゝ　名ゝあさ衣。おくゝゝれゞ五文字　万ゐふ　七廿九　千名人　雑云　織つゞんてゞ

ちゝく

ちゝの実　万十九　十七　知智乃実の父のこと　廿一　二十　廿六　知々能未のちゝのこと

。伊豆の国などゝゝある未ぞ。玄関ハ銀杏のみをといゝゝれ

ちゝり

蟄　和名一上　雅土埃揚土也　和名知利　枕　八二

ろくいとちひさきちうゞなどのありそうと

一ぬるゝぬざ　。居ル　ス　雅ちのつきてあるとふ次の居ゞの　大未枕詞　えさうゝまどめうゝゝみうゝふる枕

枕　九廿九　おさゞぐちのえざめる雅土あるど手をてるさあ　ちりのこそゞゐるちうふ人ゐこ　いせ物　卅四　ゐゞうゐくうゞ

一もとゐゞ　古　ゑ　そうね　ちりをゞるまをゐゞとゞそゝ

いゝてちりもをゑをうゞとかくらふよ

ほゝえゝめりさゐみ　えぎ　十　かくちまくゐゞげのくこうやう

あてゑゝ　とうくゞや　一大方の世のゑゝいちりつくゞうもたう

人ゐゝん

一とづる　枕玉　四　祝　ゑゝゞ代のほゝえゞ笠ゐちりとぢてふゞのる花は仮こゐるまで

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

○ **ちりかゝる** 古 まき上 いセ 年とゝて花の散とゝるあれちりかゝるとやくるとやらん。教ふ 集ちりかゝるとゝ

○ **ー つゝる** 続ほ 松 歌仙 塵に 連 床の塵 松ふき 松ふきとるなど〳〵ほこりもちりもつゝるゝうに

○ **ー たゝよ** 明月記 貞安三年三月十七日乙酉天晴午時ゝ示入実臨由教ゝ示掃塵雨少時招請かみう 日記 中中十五 ちりのむ〳〵ろのほきにをきうさきをれぶちりそ つゝるさむ〳〵ろと 続千 悪口 なげく牧よちふにとぞそゝ

○ **ちりざこ** 塵おこそ 松 九廿九 視きさるなげよ塵ちなをゝ ○ 黄むむ又俗の汗ばみなどのむむよはゝえ 和漢三才 続集 見びて人よおるどいひ〳〵なのふゝうちりづゝるとゝえていひる

○ **ちりがま〳〵** 塵ゲま〳〵 よるもちりがま〳〵 元禄 廿七 塵の漂 三九上 おくゝよるやうの集まるそらもくまるのでよひねとぞいふなる

○ **ちりのなぐさふ** 松 杜子通典曰漢有二周昌公善歌一能令二梁上塵一起 ○でよふとふ塵の動きて ○永久仲実 次ふる笛のおちぐのあきみべのどけきちりもたのしとぞそゝ

ちり 塵 ○ゝえ仏もいふ五濁塵六塵の塵ゝそれ世のるゝえ ほ松 ゝ教 いセ 集 つゝるらんちりともいうでそろえまゝ〳〵のりよあふぎのれるうゝたゝ

○ **うき世のー** 新続古 雑 栄仁親王 けすくゝきるぬぎをむぎ山あようき世のちりよにぐろぎものがる

○ **ちりとゝづ** 塵を生 元禄 廿九 右衛門 入道 住りにてつゝるゝ〳〵まるでふてび世うゝくのるとてちりとゝでなと さくまとう 新古 表仙 例ちらぬるちりくるりて悦びおろつゝぬひる日よ茶山花中宿

やるはつゝふ 一本 松 我のちのやぶりふゝ塵の名そうぐとぞそゝ

○ **ちりのみ** 塵のみ 風雅 雑下 撥無 松 叉てそのうめんとちくのみにるてうう世の名そうぐとぞそゝ

○ **ちりのやう** 紅塵。都会をさゝそうう 文遊 呉都賦 揮レ袖飄而紅塵 畫レ昏 新六帖 一 夫 ゝえ 白大正 若ようとゝとうの洞ふれなのちりのそろうるさとうるうちろ

四ノ四

ちりぐり 塵ぐり。ゝえ 倍のツボド ヲボド などの ヲコレバカリゝ

ぐりゝぐてるくてるひするよ うれ ぐてそ 廿九 ゝあるかまゝくげさなどのちりぐりゝけゝ兄ねこねと うき 卅二 あるかまゝくげさなどのちりぐりゝ 和漢三才 上 うりあんちりぐりゝぐゝえのぐるあれ才床の松ろとも

ちりぐも にて **ちりぐり** **ちりぐり** ゝえ ふぐく 字鏡 金部 鏈 刻也 益也 金乃知利波牟 女。ゝえ倍の語よいつるゝ

ちりぐるま 塵に立名・塵のかくこ 名のろとゝいふ。古 ゝえ三 ちりとふ松ぐるセで教ゝおとちりみゝなのそうにろん・ゝえ

ちりぐる 三代実録 卅四 療病之工廣泉没後庸主継塵

ちりぐつ 継塵。あとつぐ きそとゝろ 古今 あふ序 自大津自王子之初作詩賦詩人才子喜悉風継塵 古 ちゝ ゝえ 今もおそセのくぐるるちりゝつぐとや

白文 三五 不レ致社の話の結々 寂寞東門路無人継去塵 古 ちゝ

ちりの羽ようめるるとととろん 新六帖 一 るあ 教ゝらぐちりもかさぐ名のにてちりてつぐぎてのそもる

ちりにまぢる 塵に交 松 玉 三 教るろぬそくづもそてでてらきとそちりにまぢる出そろゝれ

風雅 非雅 然歌 ゝえ おとよるちりもちりにまぢる形るれば月のまちうら伝ふるゝきゝ

ちりぬふ 散ぬよ。おの 散 サン 乱レ チラバルさゝえ花をふるるを。ちくゝ人の離散するにちりそれ次のちりぐゝと白三

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』　請求記号 837-79
ガラス使用

名古 九月終れお花山すこの山も秋よりこゝろみくれなゐ木のはもちりぬ
我のちくう我のみそやるのうぶ花うくれなゐみるうをこ白ひうつりぬる

• 玉うら 世七条よりちりぬひきてるなどとをよりてつけてよび女まやるどゝてさつゐらいセ〜も
まきかへら 廿おひさ記をくてさとぶなちりぶひねうんありさるどものかるゝ〜うものべいうみ 奈や 廿六廿をて
佐りるんほんぞいぞうるまるちりぶひねう佐りんぶかるゝ〜さて元よるゝ〜て ちりがん 五 廿かくこにちり
ぶうんもるきん人のゐゝめるえぐるゝ〜うる」きこざとおぶゝ〜えづうふ

ちりぐ

散々・倍とは・おのちりぶふと数語え・ゝでつどひうるふ

雑歌のこと軽きをちり。そんへ一つの羽よて花をふらんみ子さるも大方ん
人のうよそひよをてよめり。ちりぐみ万 ーるゝ ーみるゝ ーこるゝ ーまどふ ーち みどらつ
• 春のうら 比人行ことぐ〜ち万ふみこるちりぐにきひ佐りぬひぬ 羽花 雑下花をえて〜ちりぐみまうり
出々るみ さかき 花内比十九日をん女内えやをふ子ち当佐よつどひねつ
• 源松お決比かくるようぬ山ごのりておうんぐとるよ人ぶなたこざるうりうんぐちりぐにるう
• かみうは 日記 中上 三る明の 九廷の不 何月のそうてて花のちりぐまどひるがやく〜ぬ〜ぬ
ゆうめるぞ えぐ 志見 八 えうるくて花のちりぐまどひるがやく〜ぬ〜ぬまよおくんて
• 彩六帖 六 元経 内大 おなぐ〜世よ生れおひてもぬのまのちりぐ〜よ〜てそへこうるらめ くうぬまそ
羽花 雑下 行る 廿世よいみゆめまど 季吟本 枝の花ちりぐ〜るうんるぞかみ〜允

おのぐちりぐ

古 ちおいセ秋のおなふと人くへおのぐちりぐこうんるんぶ 六帖 上 入日さき時ぞ、かるしすむらるる
のおのぐちりぐうるぬとぶぐ かみうは 日記 中上 ちおよる 牧神本 ついてこうるぐむらうるのる
ちのぐちりぐさむるんて。そゆる 信明 廿三 友みの枝のゆえぢ秋ぞてく おのぐちりぐるぶこびーき
のおも 六帖 立 山ぺのよさのまみくおなふぞゆおのぐちりぐちりぬべうるり。 古今 ほ雑 秋下 六
四ノ廿

ちりのこ

塵の牙。塵ちのごく
牧ゐうぬ牙のことそ 古 志賀 ちおの牙のつめ

六帖 二下 八のよおりくさざ
ぬちりの牙ゆく〜ざるりぬ
べうるり

ちりのこゑ

塵のま 十 雑中 俊成 ありてうりむ〜むうぐとちうぶ桜花ちりのまとも気おくう人よ 三首 共ゝ 敬と気方
ほまこ 猶古 又看 入るおえ大敬天 もそびおく牧りとるうぶ佐のむちりのまを也牧よりうぶ

六帖 二下 「そきこもり塵のねにも気いぬそうぐめりてのめやとぞアク ・廿の文学ハノかのこよての次のちりひぢのふ
もえ合さ〜

ちりひぢ

塵泥 柚中抄 塵泥とうぶ ちりとひぢと二つのおこひぢ
古 布 まうた山もふりとのちりひぢまりまりて。ほ 百文 共 猿楽右銘 高山紀三 微塵 のこと
うみ 花のえ

○一一のこ

おの塵の牙 六帖 二 つりて八山とうるてよおうるんどうふ
は ・万五 世 中院定家 抬 乗院 よゝへ〜ふ 知里院治の花ぬ
• 乳母のまとりよ 万十八 廿 小倍俊とりよ八ちぬ〜ともいひをびまーて

ちりぬ

散 。花気まふりう
ぬのちりも

○ちりぬ一ゆ一にし一ゐん

古 まえ 上 ことようまちりそもう桜
万三 四二 桜の花さえて落去と人ふいくど我えめ山ひ〜枝ありやも 新古 まえ 下 ゆくのさそふおとふちりぬ
桜ちぬえていちりぬありん世の中・ほ 下 ゆくのさそふおとふちりぬ
万五 廿三 かつまて又えとそひーこう雨の秋萩をえ知里にえ今も・古 まえ 上 ゆくのさそふおとふちりぬ
新勅 まえ 上 きつのこゑく学のおえくちりにし桜の花よぞりう

ちりぬ一ゆ一にし一ゐん

みどこうこ・廿六 ちりぬ一ゆ一にし一ゐん をどうさく 山も
万三 四二 桜の花さえて落去と人ふいくど我えめ山ひ〜枝ありやも 新古 まえ 下 ゆくのさそふおとふちりぬ
桜ちぬえていちりぬありん世の中・ほ 下 ゆくのさそふおとふちりぬ
万五 廿三 かつまて又えとそひーこう雨の秋萩をえ知里にえ今も・古 まえ 上 ゆくのさそふおとふちりぬ
新勅 まえ 上 きつのこゑく学のおえくちりにし桜の花よぞりう

ちりむつ

散果 続千 まえ 廿里 羽 えて志づけきゃ和よさくむ
ほ 松 女下 公住 山里のおえよえよやうんちりえてえてそとぶりえん

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』　請求記号 837-79
ガラス使用

○**ちりかゝる** 散掛る 千 春下 実方「ちりかゝる花の陰にきつれどもかへらんまでぞ忘られなくる。華をよねつるハ
新拾 秋上 為家「秋の野をとりけつゝ行けバ袖も当るちりかゝるや袖にあらん 華のおほよ出を
古 春下 「きのゐる桜のちりかゝるをみてよめる と見て
新撰 上八 尭ほ又花「ちりかゝるにほふよるゝことぞしゝれどもやくつてつれとえるらん

○**ちりがる** 散方

○**ちりかふ** 散かふ・かふハ行かふ来かふのかふ 交の字の意にて あちかふやうにあることゝちりおもさらふ
古 春下 丹そく「春の野よ若菜つみんとこし　あとちりかふ花よみちハまどひぬ
○次のくゝる又うきむとらゝ たえちりえぶあれて 目もまどふぶり寺 おおくたゝ
古秋 詠草 中「足びきの山の白雲よしのれどもぬさとちりかふ花桜かな
風雅 雑上 昭後「かへるみ月にまどふめことちぞハちくうなれども又やそふらん

○**ちりひくゝる** 古 秋下 在り平 いせ物 九十七段「桜花ちりかひくもれ老らくのこんといふなる道まがふがに
風雅 冬 ほ三条院「神なびの山下風のさむきまま ちりかひくもるよもの木のはちれ
続後拾 春下 臣尾之「見わたせばちりかひまがふそれでもちりかひ曇る山桜かな
拾遺愚草 上「られて曇く秋も山路のみえぬまでちりかひくもれ峯のもみぢぞ

○**ちりかひくもむ** 続後撰 大臣 上「さくら花ちりかひまむもまちのあのおぼろ月夜のかもの川風

○**ちりそむ** 散初 拾 春 能宣「ちりそむるをとえきてかつちりやおぼつかなしと妹ハまつとも

○**ちりつむ** 散積 拾 春「見る人もなくてちりけるおくやまのもみぢハ夜の錦なりけり ちりつむ花のせきとどむらん

○**ちりつめる** 壬生 中「よしの山いく代の春の桜花ちりつもりても峯となるらん。華をよねつる

○**ちりのこる** 散残る 拾 春 おほ武令 「見わたしの山ぶきの花さかりなりちりのこれりと人はいふらめ
同 「ちりのこる花もやあると山吹のひとへにちりのこらぬ春のかくれに

○**ちりのまがひ** 散の別 続後拾 大臣 上「咲く花のまでてぞとたれ散るの色ちりのまがひのかた見となれ。ちり見えてそうる ちらさま 華よ見のまとを ねすふるかな

○**ちりのまがひ** 散の紛 古 春下「いでまに旅寝しつべしさくらちりのまがひに家路忘れて
続千 春下「見が来つるはるぎたえぬるをちりのまがひの春の山里

○まがひも次のまよひもはなみてそこと定まらぬぞちりおちする 万二十 散乱 チリノミダレ と訓

○**ちりのまよひ** 新勅 春下 定家「かつさきのゐまそちらぬ桜なむちりのまよひよりそふらんこつ
拾遺愚草 上「たちわかれ桜がりとなる夜てちりのまよひぞすむらん

○**ちりのさと**　○華よりけるあと出ぞ 散のま

○**ちりおくる** 散後る 風雅 春下 入道二品親王「春風のやくかよふる枝よりもちりおくれたる花ぞのどけき

○**ちりくる** 散来 拾 春 こつみ「吹く風を何いとひけん梅の花ちりくる時ぞかほまさりける

○**ちりまがふ** 散紛ふ 古今集 十六 「ちるとあらぬ木末のをどもいかへくまちりまかふ路をしるべとするなる

○**ちりゆく** 散行 拾玉 二「木のもとをたずねんやうもかくもちりゆく花よれつなかり
山家 下「行とまくおつる木の葉も吹く風によりゆく方ハちりやあらぬ

○**ちりみだる** 散乱 万 九十「川のせのたぎるともえぬ玉もかも 散乱 チリミダレ する川門ぞも

○**ちりえく** 散落 風雅 春下 昭照「弱よらでるそやられぬ情えうくちりしくをや峡の空なる
拾遺愚草 上「いくたりのくちきめるん枯葉ちりしく木のえ杖をとりまねて

○**ちりとく** 散敷 孟津 散透 うゐ之 比ちりもへる梅の枝につけるゝをみて来れり

○**ちらん** **ちらば** **ちらなん** **ちらや** **ちらさ** **ちらね** 桜なむちらばちらなんちらずとてふるさと人のきてもみなくに・万六 花さくと見る人をなみとなるのなき将落時は過きてたむとぞ・古 秋下 在り平「ちらねどもかねてぞおしき紅葉ばは今はかぎりの色と見つれば・同 春下 惟さうの承こ「ちとせふる秋るき時やさうざらんなとこそちらめ根さへかれめや・古 上「咲のやまる花の色をば木にちらね七日へすぎにしとぞいふ

○**ちらさ** ○**ちらさ**ハ **ちらせる** **ちらし** **ちらさん** など いふ也。**ちらさ**～**ちらさる** など とさく 見及もせ
古 春下 そせい「花ちらきれのやどりハいつも香なとしよさてくらん
今散 チラス

○**ちらし** 万 八廿七「見が宿の花橘さゝとくぎきとききてよやでおとしに 今散都 チラシツ
同 廿「妹がえてほもあつかんとらぎゝを花橘をつちに落 チラシツ 律

以上常の**ちる**え。次に出しける三語の**ちる**・**ちらさ**るともめとれはえた 動くならふ詞ならて用ふべし

ちる
散。是六月あの おちてあるをいふ

ちりかゝる 【拾】九三 さくら花ちりかふ雪もかゞ春来りもせのふりかゝりてちゝるなる とりやりなどするよ

○ちらさと 令散 スチラ。俗の トリチラスといふ

とりちらさと 【読拾】恋一 みつらひたる人のちらさるとや、ちりもかゝりとよ 莫
と の語を出さ

。ちらし 【夕霧】三十 れゐのさまもえたらてにえぬまゐるらんもちらしてさるとおもひらちるを 【わくき】卯 かやうにおぼさる、すゝきづゝるとにちらさちらしのみべくもあらさ。ゐのるえ

ちる 散。是へおちるの 世間へパッとるいふ

ちり 【わくき】卯十七 此みかみなめりされどけうもいとさるゝをよきおよ ちりもしかうじ死名とりそくん。パットスル是みとめれど杉をず

○ちらさと 令散 ナカレ。俗のイヒチラス フレチラスなどの チラスと

ちりかふ 【挟】卯下三 此人の音ずへりもわらしてるるをぶかふよりおまちるぞだ あるねど

ーる チラス莫 【わ六帖】卯 光後 ちるさるよ的をえるあのおもかくちるくそちがう合てそれ

ちらさし 【栄】ちりてぬ ゐや 卯十 花山院の射られ すゞしらおぼされてけるちらさじほ代の形なりと思ぶせ御ひそれど さもの手本な

ちる 散。是へ人の 離れ散るをいふ

○ちらざと 不レ散

ちりあふ 【まうつれ】廿一 母の是示の北方くの人〻 まうでちらざまふくへせあよ

ちりわかる 【えとうくし】廿三 さくて又一人〻花やうに何るをさらんとえて ちりわかる 散別する 【よもぎふ】廿五 さをぐみさそひちりわかれ一上下の人〻えぞ

いきちる 行散

い の語を出さ

○ちりぢりふ ちりぐ。かなの所よ 五張へ ことを出さ

ちりどまり 。隣の中よても 近きをいふ 【挟】下卯 ちるとまり ありさる人の住むとかをいふとおみゆうろふとゆて 【同】卯廿七 汝の名やてが年にをえるちりどまりとお〜くゆるとゆてや

【拾】雑秋 ちりどまりある所よ宿たぐへよ来てて〜 【うつほ国ゆづり】上六 けは有数へ中納言の君あまんありり あらてちりどまりにて今ぶる北中よくてあ〜ぬく 【えとうくし】廿 けおとどの北との西新へむかしの志げいさき あり 私本王並又まいるえいおや〜ませぶちりどまりの北んぐもよ

ちりぎとまり と の語を出さ

ちりづく 近付く。近うまいり近うするさと ・年月るもらくり 【土左日記】廿一 条のちりづくよろこびのあまりにえく

・【わ保】又表 【保示】おき 【長き】夜のふけ行く月とるながめてもちりづくやまとしる人ぞなき

○ちりづき 。【万】三十五 「なもかゝるみねめとるえてゐるまのね〜るが嬉し母子迎着奴 チカヅキ ス 【わ六帖】六 衣笠内大臣 ちりぬればねよなるんとやきりくき床のめ〜るるちりづきねらん。・【式子内親王】「人とふぬ花のみのあるの 中にまいりとあるとちりづきにそり〜ちりづきよりすよが いとるゝちれば

ーまゐる 【さう九】廿一 ちりづきまゐりあそ

ーよる 。【やとりき】五十六 例のるれ〜〜げよちりづきよりすよが 【わさかれ】十 五の宮よ例のちりづきまゐりあそ

ちりながら 【六帖】三 【読保】恋 ちりかくのよ故の塩ぶりちりながらそるくのこもおもかおる外

。ーで迎るものうまれど 【保支】 わとなごきとまる頃指やちりながら待まるとのこあるの時へぬ 一りのねよひ来ぬり 【同】冬 【いせ集】 やえてあるるで八なにちりながら年にさちりてなるときふつ外 花 【読】からちるへ人よ あもねるのそり 【いせ】

ちから 力

ーある 【夕霧】廿六 又あるぶ人なゐり〜ゐぶこるゝ主力あるうてちりゝてなく主あ〜に

ー出く 【そうひき】卅九 かゝるわめやと念じ侍りつる力出まうで来てるん

。ぎるんのー 慰の力 【とりゐ】卯十九 弥をさしたりやえて死ぞよるもふくおそくとみてつるぎるんの力をぶ〜

ちからゐる
。俗とは 心と弟じ 力を入ると 【後漢書】朱暉伝 童子内 イル ヲ
【古】序 力をもられぞ〜てあめつちとうごろし 【宇治拾下】九十三 女ごとおそれしれてんするよいとかゝるるべき こざるありそり ろくおひうんれどのふつふ 杉力りへぶあり

。ーいれぞ 【古】序

。ーより 【落くぼ】卯 おゐぶやうに力より我まけましうるずるぞ 。是も同じ

ちからぐーう 【わくき】九 はあゐぐくへ家ぶ力いりおしるさしひきつくるがきぼかなくんよりるぶやうあやとえりそめつるえと

力 ぐ〜ーう 【落くぼ】一 老あつれどよりものつめべきとといと力ぐ〜ーうしぬひて

ちからのつかさ 主税寮 【和名】五 知加良乃 豆加佐 。【万】九廿三 検税使大伴卿 ある 税ハチカラと訓て 年貢をいふよ

ちからぐるま 力車ハおとつんて ひく車也 【万】卯 廿五 「恋草と力車る七車つみてこふらくわがふうら 【挟】卯下十 乃のわどるを恋まつむべきやうにやさらえある力車どめく

あるくおしやりつづけつくりちがふよ【長秋詠藻】下「世の中のくるしきみちはあらそひの力車のえらぶなりけり」
【新六帖】二 紀貫之「あれたるやえ力車もひくくるまりむそぢあまりのなげきこりむとて」【栄花】十三 大路の方さへぬれべ
力車にえものいれぬ大きさぶもよ綱をつけてさけびのくるりうちていきそ【玉の小櫛】八 中そるべはさうるべき
にて天なるておもへまさるそ 太六 力車とらすなするべきうかすべくとしておいしまさき。一夫六人の人を力車にのせするべし
【太平記】七十九 やぶま逃入りて力車のありそるにまぎれぬるといへば

ちからくらべ
力競 【垂仁紀】六 不期生死頭得争力（ヒタブルニ チカラクラベ）

ちからびと
力人 【うつぼ】廿九 仏他らせのちんとて万のつゝものしてちから人倶まうてくるよ 【皇極紀】三 命健児相撲於翹岐前（チカラビト スマヒトラシム）へすこのきざつうざと

ちからおとり
。まさくてかみのつくちからおとり【あけまき】十九 人はみそてのみまさりとはちからおとりにはやへどや めでうれん
ちからよりて劣て外るとなよ【浜松物語】巳 さもありぬべきめてこときみど又ちからおとりさるぞやとのあなよ
【和泉式部物語】ちからおとりいろにかんとおぼえそるはされ

ちかく
近 ちかし の条に攷合せよ
。ちかやうは【蜻蛉】傍近きさにるう

ちかやう
。〜で近きをいへ やうは例の助語也
【ささぬ】五 今ではあながちなるちかやうなるもありてもめてはへなあづりそう
【こてふ】廿一 ちかやうによあべき【さくら人】廿 ちかやうにてむじ物語もなすてひるべし
【あけ】卅二 こころざしのちかまさりぞうるべし

ちかまさり
。ちかおとりとへウラハラにて 見れば近づきて見ればまさるを云
【まさかつら】卅二 きこしやしくにもてよなきちかまさりと【あけまき】巳十九 かくもちよりそぶめておほくちかまさり
くるくおぼさるれば【和泉式部日記】とりて見ればちかまさりせよ桃の花見ひぐなき撰をしまじ
【狭】二下 卅一 かづきつるきぬをもちよ引のけて来ると見るにそのかをりしよりもちかまさりして
【宇治拾】六十七 よかれてよりきぬちかまさりてらうて紀るすおよ似ぞ

ちかふ
誓

ちかひ
【拾】恋四 右近「忘らるる身をば思はずちかひてし人の命のをしくもあるかな」【ロ】ㇿ 実方「何ちんよ命をかけてちかひてんいかがやとるおもあらり」【あし】卅四 ちかひしよめるにまて【えいひめ】巳十二 ちかうけぬよしとちかひつる
体ノ語【源氏】十九 ことしそうのちかひふう侍りて後おくろに此え見る待るさりし
○ちかひ【栄花】五十六 法さちかひぞやうて人の孫ちかひぞこさく孫そんてそたへてかくる
○しのうみ 誓の海【新千】尺教 為家「今なきいちかひの海のつくしるくるき波みへたへ志のみ」【普門品】弘誓深如海歴劫不思議
【千】尺教 崇徳院「ちかひぞハちかひの海ふ天とよすうるあるたのまく数ふつうさん」・【拾遺愚草】下 歴劫の弘ぜいの海ふ舟つくを生死の波ぞ多あるくるも
しのふね 弘誓の舟とも【夫】廿三 信実「引てしちかひの舟はみせよのつかふくろへもいそあれ」・【玉葉】尺教 経長「月にこゆるちかひの舟をたのむをなくうらさ法あえぞかし抑やそも」【風雅】尺教 永福庵師 忠行さ「しらき此ハいつうらうへべさちかひの舟のくまたあそんハ」

ちかごと
誓言 【永宮】十九 初ちうさよるづのちかだとあるかさて見せてもかくてあるすらき・【うつほ】下五十九
誓言シ 神仏をかへてかひハ罪あるべきかへとをいうさちかことをとしつ

しつる【いせ集】廿一 枇杷のおとどちかことをせてたてしおよ・【宇治拾】巻三 よひう女をあひて物あまはよおもんちかことをみえてさせてきそ

ちかごとぶみ
誓言文 誓詞也【千載】の八男女社中にいり外ものつべくや【あけまき】十一 仏の前つくりちかことしもうろく侍らん

ちがふ
違 。行ちがふはちがふすなのちがふへしいすこいみおすこへおすへいかするさへ入り交ろ意で編束のちがひみといつるもまとべてく交のはのまさし【夫】廿三 寂蓮「冬ともやくたちぬる波かへる波行くちがふあぢの村鳥」

○ちがへる【好忠】十月終【続古】云【夫】廿七「鵜のちがへる穂の君をにくへたつる本に我や恋さらん」【続夫】おく

○ゆきちがふ 行ちがふ【中宮亮重家朝臣家歌合】乱駒まもちがひてやせとやらん所で大月いおくろそ・【散木】大人ゆき起

はしきよしの御局と申すはちゞへけしきおぼえけれど人々は【あひ】十六 院をは更にいとむし后の宮春宮なとの御
伏させ給ふとのもとにちゞみて【たてちゞ】みつゝ おもへは木丁 廿八 中く木丁のもとのさくらちかくなるあたりにより
通されくおもえる。【ちゞひ】【ちゞひめ】【ちゞやか】【新六帖】五 行家「みやこの左行せうにあひてもしろ
あをしく又ちゞひぬる。【下大】時々かくのと侍せまちしあさましのちゞひもむかきつゝれ【承回】五 知家「かちひ出を
きけしくもあへすもちゞへやつれのかけるかもと 己上りけや行かふかたへなるあへてのたゝへきをさきしより

【ちゞみ】

縮。是は俗に同じくたゝ全くもされど古くは夏の衣のきちいみくて大方のはたゝへそのきいくて後とも太ふおのちゞへき
みけくより普通にたゝへてにいへるも（二体を兼す）をそしくえ又すへ【袋草紙】四 吉備大臣奉送誦文に「あへちなのかるの
矢のさきたつ弟もちゞへをもすれはちゞへやとかきく

○【ちゞく】ちかむきの約 【ちゞよる】共に おしよせる意より 【やけうへ自把集】さくらもむくきをあかれそちゞへるそぎもおとく七月日の
いとあつきにかくのまり「わかし夜をもちゞへよびぬる秋の夜は秋ふくきわと思ひうぬるれはなり「さしちそ
はちゞへろ夜はやかてゝもあそくわかふる花さへうさけ【拾太】四 光俊「ちゞろと手よあへとるる秋の夜やくり
うそちゞへろ人をもあれ。【新六帖】光実「ゆるそ玉の夜のうきそうちゞへても又かさきのはさやらん 鶴。○夜すがへき
縮 【新撰】五 為家「むけのやかあさてかきて玉たときなしのひくれそちゞへへ世もなし

【ちゞそぞろ】【新撰】五 光俊「今みせやその心もあそれへすけ矢筋のちゞそぞろらん

【ちゞさまり】

○近にかいへ。大将より下庶弁の【後拾】雑五 三条院「いかにへのちゞさまりとおへる君よされは志
猶ほ友人となへいはふ のなるをしるなり ○左大将殿時くつ【古】七本 公季「ちゞさ
まかり共にいまりしそふれか秋のくるのたにあさむきいりて【きき拄】廿二 かへりとさひしきおちさきちゞりてきもむげ
いけれとにくき事も（ヒゲ黒大将ノ）【よそぶへ】十六 白宮 ふかる夕さりの大将よ 後時 おれ君ののはちゞさまりくとらへくすおちて
かならずぜんとあそひますへく【新後拾】春下 為定「せめてくはれちゞさまりのゆくたそえそ採ちら
さしそむかなく・【続千】雑中 山本入道前大政大臣「いれひたにあひたいおりし秋のちゞさまりのかくさそ思へて

【新千】雑下 後堀河院「九重やちゞさまりのをきみしくなのるときはけそ秋はふけにかり【年中行事歌合】おの三秋の衣
ふけみそと何ちゞさまらん九重やちゞさまりおかくりなる衣を。【しの目のちゞ】○是は大嘗会 すゑのうらの陰 九十九 衣のちゞさ
まかりの司のうへ義不の仲もとやあらへ考ふくと言ふくらし【伊勢のうたへ】九 あ

【ちゞまゆ】○近き由縁にいふ 親族に【小川】三 かんの君のはちゞさまりゆるさるるへきは世にひろくなるへし。

【ちゞめ】近目 【鴨長】三 ○余りに近親の近き せうとゐてきせ是とそのちゞさゆりなること

【ちゞし】近。○道路にも ○年月の過去未来にもいふ 【壬葉】雑三 家持 ちゝ製「たのもよう山本さして出る路のちゞしとされをもおなくよぶ

【ちゞさ】【あいまさき】玉かくもある新の近きされは君への君もやゝく見えきえゆく

○【ちゞきある】【ワ家】ちゝきあは八幡の方の浦にこそ行き侍れ【後拾】雑四 ちゞきあはあかなる音もちかきなるへき

○【ちゞさなら】【世のはかなさ】玉 桜川にかよふ人の心をあんさせてかたはちゞさたよりなくなる

○【ちゞくおきし】【幻】中納言の君中将の君そとおまへ近くておほ語り出る【夕霧】八 ちゞく寒うよりく出る。【あなまき】十一 ちゞくよりて方のるすと出てあへ【ちゞつみ】丸をへくちゞさきふるふ隣りは男女いとかる【ちゞく】【そそき】甲五 らたけこうちもとちゞくつふ 人せん

○【ちゞみれば】【宇家】二十七 二条院はちゞみれば【ちゞかるる】【後撰】雑五 いと「新れはと人をそかてもちゞやけのうへそむく
いと合せくなけく。【宇家】甲めのとは恐ろしかる人とちゞく居りへ

○【ちゞく】式巳下 年月ふりて 遠くなり行 新古今 ちゝくみせるを【ちゞする】【まつ回】廿二 行幸ちゞくなりて試楽するのしろ此そ命婦は来れる

【ちゞの事】【宇治拾】四 五巻 式【ちゞ八】【盛衰】廿六段 遠くは往昔を尋ぬれはくきんちゞいるをも

○【ちゞけ】【くみのちゞき】中 廿四 国もりの人へきすもちゞけふるん 【ちゞやう】【ちゞさまり】【ちゞつく】ますくおに出て

【ちひしの舟】あそふの【ちゞへ】ノ西三附出と

【ちよ】千代 【いせ物】八十七段「世の中にさらぬわかれのなくもがなちよもといのる人の子のため
【古今】大歌所「あたらしき年のはじめにかくしこそちよをかねてたのしきをつめ

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

[後]賀 清正「君かよはちよつてふろくれ竹よちよまてもなほてちさくなれ」[夕がほ]廿一 秋のあくるみとのひさしもとハちよをきくさんこちみす。

ーふやし 千代ニ八千代ニ。孫の事ニアラス [古]賀 我君ハ千代に八千代にさゝれ石のいはほとなりてこけのむすまで [同] 日 わかなくは君がやちよにふちなそて又やまてハおひやせん。[拾]賀 兼もり「おもやふるひらの松の枝さけくちよ六八千代も色ハかはらし」

○ーのはじめ 千代の初 [千]賀 紀俊「いまそしるちきらぬさき君がへんちよのはじめの子の月と思へは」

○ーのあき 千代の秋 [後]秋下 友則「霜かれのかくよそひのふて人むすれはちよのあきにそかけハしけらん」

[長秋詠藻]下 霜かれふさうひさしき床夜ハちよみもあきたもあらんしやせう

○ーのかげ 千代の影 [新拾]賀 永縁「年をへてつとに位をまもりかけきちよのかけれは君そうつすべき」

○ーのかざし 千代の挿頭 [続千]賀 公任「さくらさきにのちきをすべてもちよのかざしにおるあへらし」

○ーのかず 千代の数 [新勅]賀 内大臣「ていやあらはいそく早苗にあるすくハちよのかずとれらの君のよゝ」[続古]秋下 通成

亀の尾の瀧つ川波玉ちりてちよのかずなる秋の夜の月

○ーのためし 千代の例 [拾]雑賀 忠岑「子の日する野べに小松のなかりせばちよのためしに何をひかまし」[同]神楽 兼盛

祝ひつる松をきたるハなからへすうちのためしとみるへかりける

ちよ

千夜 [いせ物]二十二段 [続古]恋三「秋の夜の千夜を一夜になせりともことばのこりて鳥やなきなん」

[土佐]上「ちよゝふすさきくもやハあらん友の日のちよを一夜ふすさきくもまたる」

ちようにん

重任 [続古事談]一 後三条院の御時諸國の重任の功とりて長く停止せられたる時云々 [日本紀略] 寛弘元閏九五日丙辰今日丹波守業遠重任依造羅城門也 [左経記] 万寿三年二月廿九日云々近江守源朝臣以私物作瀬多橋依其功可重任之由云々

ちよゐ

叙位 [平家]一 其比の叙位除目と申は院内の御はからひにもあらず云々 [続紀]大宝二十一月丁亥至伊賀国行所経過尾張美乃伊勢伊賀等國郡司及百姓叙位賜禄各有差 [選叙令]注云 計考叙位也

ちよく

勅 [拾]雑下 あるじの 「勅なればいともかしこし鶯の宿はととはばいかがこたへん」[夫]四 西行「勅とかやくだす御門のいませかしさらばおそれて花やちらぬと」[鎌倉右大臣]下「大君の勅をかしこみちゝわくに心はわくとも人にいはめやも」[文安六年百首] 季通「勅ハ冬のうすれ木なれど勅なれば春の詞のむすてちとし」

[兼久記]下十八

○ちよくし 勅使 [うつほ初秋]下五十六 ふさぬさ勅使なる云々 [桐壺]九 内より御使あり三位のくらゐおくりたまふよし勅使来てその宣命よむなんかなしき事なりける [竹取] 此十五日司々に仰せて勅使少将高野大国といふ人をさして六衛のつかさ合せて二千人の人を竹取が家につかはす

○ちよくせん 勅宣 [平家]五廿五 かつハ勅宣の旨をも守て [盛衰]廿四 山門執奏 一門園城相語て勅宣に背き

○ちよくかん 勅勘 [平家]五廿四 勅勘をゆるされずしてはいかでか謀叛をおこすべき [盛衰]十三 勅勘勅勘の身ニ候

○ちよくぢやう 勅諚 [平家]六七 これ又勅諚なれば人車かつてさぶらひむかふ

○ちよくやく 勅約 [盛衰]十八 松殿さらくして楽しさるハかねての勅約ハありしかども云々

ちよくろ

直盧 ○関白の御休息所也 [年内侍日記] 御ちよくろにて御連歌ありしをいとやさしくおぼえしかば [月清集]内裡 のちよくろへまゐるころ [平家]一廿七 御ちよくろにてあるべきにて云々

[三代実録]十三 不許出於直盧之外 [同]四十九 公卿大夫會太政大臣職院直廬称賀 [中右記] 於宰相直廬休息

ちさひ

千度 [万]四廿二 笠女郎 千遍 [拾]恋五 人丸「思ひつゝ…」[拾玉]二「いくちとせふ花さく桃の君か代をあひてゝくちさひよひ」[夫]廿四 土御門院「…」

しやし

千度八千度 [千]秋下 基俊「たらちめのいふうてもあへるこころもちさびやちさびあらのこゝろむる」山田のみなちさのまゝひかぞへらんわども限らず [同]九 ゐ泉「…」

ぢそう

持僧 [禁秘抄]中七 御師御持僧中可選其人御事也 [新後撰]雑上 院のその宮と申しし時 御持僧ふくそうてふとすく位に侍るを辞ひて天台座主になるとて

ちつ

千束。錦木ふたつ十本のさせ木ともなれ東とうふ。稲ふたつもの行把のさし

羽虫 嫁川 初春 三房 ちひろね 嫁川

ちつけ

落木えもなぐさの数をしてちづのざくめ妹が門なし 新勅 葵 おさ筆「秋をこそ君が歌のあと報ふ両袖もちつけむ」

乳附。俗のざくろあつびくむると乳つけとし長く春をめ〜ふまるし。俗ふ乳つけてとうろ

乳漆むるさにて古くもおそちつけてとうろ あの七ノふよ仮名 うがあさそやま 印本ニナシ

左大弁の北の方のちつけをれあのと三人一人いとんどろう三人いとんどろう

東つかこ花 大 おとろくうおぢ おそき世後して四ちつけよーもあくびやうてめのさらふいれさ花なまひり

そうろ 十 うろ子の別当をこーむいでにくれもそんろんちつけよーもあくびやうてめのさらふいれさ花なまひり

文選 十三 褚淵碑文 因心則至 ちつこと人衣体の詩ふ寄ろし因縁又也ろうまつ

草のきのやけのくるとちうにちなこ私ちの浦のりか巻も四まつ

ちつせ 令散 **ちづん** **ちらね** のたぐひおの **ちる** のおる附き

ちつそ 四をふく一れの羽ふいるも已入生と

ちづん

沈。香木ん水ふ入てうくねを浅香(センカウ)とふひ 和名十二 一本草云沈香節堅而沈水者也

一の枕 俗拾 雑五 ちづんのうー白ふのつうふいこ

一のつくゑ さうむー 三 ちづんのけくのつくゑふそく。 画合 十六 ちづんのそこふせんろうのあらぐ志 三五

ちづん

陣。陣ハ其宜 **さゑものー** 左傍つの陣 **枕** 二 さゑものちづんぐに右上くおさならるぐーて

の居るまを人 抄西の諸門ハ左傍つ守りて宜秋門ハ右傍門の陣ん東の諸門ハ左傍つ守りそく

建春門左傍つの陣ん三五 **たちえさのー** 帯刀の陣 **吉** 春下 春宮のたちえ花の陣ふて将の花のちると

ちやうじ

長奉送使。秩宮ノ伊勢へ遣り奉ル人なり 三代実録 四十九廿八

ちやうじ

拾 賀ヘ中納言朝忠天暦六時秋宮ぐぐり給りの時の長奉送使ひてまうりくんとそ さ花 九

ちやうふそうしなぐさめ上達もんごとなく老そあるをそそひめり

ちやうそう 定葉

ちやうじそめ 落くぼ 四 ちやうごのいのちものべ

丁子染 **着のくバ** 十三 丁子そめのこがうーまでーある志ろたあやのちろ

ーさをおさまく

ちやうじや 長者 **譬喩品注** 十長人之徳、姫大本疏第五、式、世間長者、倫、十種徳、一、姓貴二、位高三、大富

四、威猛五、智深六、年耆七、行浄八、礼備九、上敬十、下接、行友 六 り一天竺にたまさろにのてそうなぐ

り一長者のごうよとうひのとめんなおものあーバ使ふそへーをーんと

いへり。是ハ富ある人徒ある人ともゝべー 吹上 下

物の千分がひとろちうこ伝もあくまろむさち伝もく

ぬりこなんまうのぬりさをとうちまひのひて

女のちりけるよ。これハと俗よゝ多ある人のすゝ 盛衰記

のおとてことー廿九まうちる

ちやうじや

枕 一 さうぞそてつれバいみじもちやうざとう法師などのやうよねうさまよ

ふてそおうれ 抄 東ちの長者などあり。いうめーさまをつめ。徒ある法師の僧官う

ちやうづや 聴衆 盛衰記 四十七 諸侍涙よおがれ程元そでをぞ出りける

ーちん 聴聞 禁秘抄 下 卅六丼上御局聴聞ス 枕 二十九 いちやうちんすゝさちさをざめうづくねでまもなくてこる

ちやうちんの不よのぐろうぐよ程笑メの女房足をつ 栄うバ 二十 ずいちのうめもう

ちやうし 長史 **ちやうしき** 長式

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79

ガラス使用

みゆりくれバ云々

ちやくしゃ 著シテ 著守

ちやくすいろうご 著駅改 公羽根冰 中卅 それハ検非違使以下来集りて制法をれこそみことゝ
あり元明天皇和銅六年正月甲子の朔に始て朝賀の礼ありしより以後毎年の例なるべしとみえたれど四月八年
月まで朔旦冬至にあたりしことなし仍て五月なれこゝにみえたり 朝野群載 十一 左右獄囚事云々 以前令月廿
七日可著駅左右獄囚勘申如件 万代 雑二 芸妓の政をみてをる令法師「むら雲くもそのうへつゝれる
ふるあめのよのへぐゝバりを 著守 三五 光方廷尉佐にて芸妓政よつゝさゝりけるよ雨のよ
りちりくるよ扇をさゝらゝ晴日夕陽よむらひてこゝそさゝるまで作るにおもひをうざり
けるすやうく

ちやつぼ 俗の好こゝろさし 義経記 酒よせ〳〵たる男ども

ちやまち 巷通ー 万十一 十三 ゝゝさゝの八十のちまたにも
らん 新六 一 光俊 ふけゆくろのちまたよこゝそぎしてゝ
新六 五 衣笠内大臣 ゐかくのこゝろのちまたをふく角のこゝろバりハやうのりハ 和名抄 十 巷知
名知末太里中道也

ちやわん 和名抄 十六 十二 稜和萬木 以荒葉蒸茶以庆汁煮之今畑熟也五月五日咲之 百 物名「のらま
きのおくれておふる苗なれバ 拾 雑賀 五月五日ちひさゝうちまきを山すげのこゝろをれて
のあゝんのひすめゝゝろぎんとて 大磨弐

ちやんぎ 前楚蔵時迫 十二 夏至節日食餐

ちやまさ馬 散木 下五十 ゝゝさなゝ児のちまき馬をもちてゝ
ゝゝさりぞよりのうしハひきうゝ春ー

ちやまさのかこ ちまさの桶 神代紀 廿八 天鈿女命手持茅纏之稍立於天石窟戸之前巧作俳優 夫 十八
公朗「遊戯ざゝさちまさのかこさゝうもちていそゝのまへはしれふやされ

ちげ 地下 系図 三 地下の文人ハ云々 枕 一三 殿上人地下各 同 十二 まだ院のおむしへ殿をこゝめをりて後よと地下と
みなまゐりぬ

ちやうのみ ちゝうの神 主左日記 まこつのちゝうの神よふりなん 袖中抄 十九 おくふもゝへゝんとをもおやこの
頭昭云ちゝうの井とハちゝうの井とふまや又云隠岐の国よりそちゝうの浦とみゆまさしの宮と
ゐ神ハおはしまされ舟出とてハその神よ奉幣してそちゝうの井と名付たるまや
をも陸奥も道といのる神をちゝうの井と名付たるまや

ちやうろ 持仏 そうぜん たゞゝの西おもてすも持仏堂をりて行ふ尼をうちそゞれ
ひこゝーあけて花をるめり 文一 姫五 持仏のかゞりをりぐりをまゞこせゝせのひて 栄海行状
十とゝ比多宮の法華を一尺バりまつりこゞをそゝさせひてやゞて西ゞつまをむが
おこそゝさせもうけり

一堂 持仏堂 狭三中 廿五 入道の云ハゝ持仏堂のつまをおーあけさせひして峯の胡蒂
のくれまををぶめやゝせもひて行ひまふ

ちやね 十冊 散木 中二 「きみが代ハちやねのようさゞあこの松もちれ

ちゞ 万 六四十七 隆きゝゝうゝまろうみ 神代紀 ちゝうみ

ちゝさ 乳房 曽卅 三 六十着四月序 おもゝーのちゞさをもむゝそやくまこそめの衣をよろみ

拾 哀傷「くもゝーむのちゞさをもむゝそやくまこそめの衣をよろみ 同 月行基一首

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

くさ〳〵やそくさそつてたもひて〳〵ちぶさのむくいをふぞりぬぐ
女悪胎中口吃乳根母乳百八十石 仮名 上あり仏のごせうにハ智さりの中うもあまたちぶさ
ハ出まふん

ちご 児。赤子ヲモ又オトナニナラヌホドヲモイヘリ 枕ハ一ノ 世九 子生ミタル 其年の十一月よりそれ〳〵さ児をさく
いぐさとでまへれバ 名ハ一ノ 和下 とゝごろ〳〵ふる山子もおも〳〵のうでもいうそでおり〳〵ふん
児もぐるとゝ云〳〵 更ノ巻 四さてもひとうつくしう〳〵りつるふ児うな仏へふ〳〵ん 同 五十二百あそ
びぐたのまふく児どもいとめぐ〳〵ふ 和名抄 二七 赤子和名知子今按云合乳之義也
ちごぎみ 児君 狭 四中八児君をとりまて云〳〵此貝〳〵のつる児君ハ云て児君のつげけうや
云〳〵 とうへや 三廿四

ちごもみ 児ノ乳ヲモムカヨイフカ 国ノ乳ヲモムカヨイフカ 下十六いさうふぐ〳〵ひふ
〳〵のひ〳〵ちごおみよとそのみおそろ〳〵とてぐ記あ
ちごろ 児頭 狭 四上廿七児新の世よ〳〵らぐうつく
ちりうひめ〳〵ふなどのあいせいで〳〵 番ひ〳〵き 上五十八 為つ
のひつるまうれハにこ〳〵ちひさくぞおハせ〳〵

ちさき 児生 り八本 卅天和冬りまぐのおちごおひうりのまおぐ〳〵ふ
狭 三中 四十三 大将のおちごおひよたぐ不おく似さ也あつ
りて上のおちごおひうぐ〳〵ぞおりまし、あじをふ〳〵人ハ笑えさ也あつ
ちぐく 地獄 天 三十四地獄の名をとてある西行 「この
のひ〳〵を年まふふるふあ 「つと人ハ去での山ものそま来りあ
つ夕とあまふ風の次まりてかむ〳〵ふなとぞうふ〳〵ふ 「何うり八吉めく苦〳〵そふ

ちさきのかこ ちさきの絆 神代紀 廿八 天鈿女命手持茅纏之矛立於天石窟戸之前巧作俳優
公明 「遊ぶさきちまさのかこをとりもちていそとのまへよりいれまつれ
ちげ 地下 花宴 三地下の文人ハ云〳〵 枕 一三 殿上人地下各
同 九十二 同 十二まだ院のおむ〳〵へ殿をこぐめをりて殿上と地下と
みなまふりぬ
ちふりのかみ ちふりの神 左日記 まつこのちふりの神よふりをるぬさのおひ風やうん
小うなん 袖下抄 十九 「おくまもへ〳〵んとをもおかこのちふりのかみをいのれそ和名抄
頭胎云ちふりの神とハをふりの神とふるや又云隠岐の国よりそちふり浦とふ和名ふるこの意と
ふ神ハおらをれ舟出をしてハその神よ奉幣してそうりといのるこそやしそれを本体にて海
をも陸をも道をいのる神をふりの神と名付たるふや
ぢぶつ 持仏 立花 たぐ〳〵の西おもてすも仏仏をりて行ふ尼をうふりそでられ
ぶこ〳〵あけて花をふめり 天 一廿五 仏仏のおうぐりをまぐ〳〵せさせふひて 栄海ノ六
十とゝ〳〵ハ多宝の仏塔を一尺ばりまつりこぐおさてさせふひてやがて仏ぶつまでおこさてさせふりける
一堂 持仏堂 狭 三中 廿五 入道の玄ハ仏仏堂のつまでおゝ〳〵ふ
のてれまふをおぶめやう〳〵せふひて行ふまふ
ちぶね 千舟 散木 中二 「さゝみが代いちぶねのよふるおふまにろさでふこの数もあられ
ど 万 六四十七 「後さゝふ〳〵ふろうみ 非代うちぶねのてまふ玄ふるの浜
ちぶさ 乳房 曽舟 三六十着四月序 おもゝ〳〵のちぶさのむくいするおでふくるまつごとに
裕 哀傷 「人ふ〳〵むのちぶさをおむ〳〵そやく墓ぞめの衣をよふみ 同 日行基一首、

ぐさよやそくさそへてたまひてしちぶさのむくいをおほ
女悪胎中口吃乳根母乳百八十石 仮名 上あり仏の本母
ハ出来ぬん

ちご 児。赤子ナモ又オトナニナラヌホドヲモイヘリ 枕ハーら 卅九 子生ミヨリ
ノ其年の十一月よりそれハーさ児をとらく
ちごさぞ 児もがみと云く 夏の歌 四 さてもいとうつくしーりつる児うなゐ仆人をゐーん 日 五十二西めそ
ひげたのまうぐ児どもいとめづらよ 和名抄 二七 赤子和名知子今按云合乳之義也
ちごぎみ 児君 狭 四中八 児君をとりまて云く此見ーをへる児君ハ云て児君のつげゆうや
云く ととうへびや 三廿四
ちごもみ 児ぶみ。歯ノ乳ナド ヲムヨイフヲ 国ぶり 下十六 いさうろぐーひみひーを附ハおくりまゐらせをそ
ーのひーちごぶみよとそのみおそろーとてぶ記る仏
ちごもち 児顔 狭 四上廿七 児歌の世よーらぐこうつくうめーをひーをいやうにおひ
たちうるひめーんなどのあらせいで〳〵 雅ひーき 上五十八 夜つ子の出りさちのちごもかに似たり
るひつるうまれハこーちひさくぞおハせ
ちごおひ 児生 ーハ本 卅 大将タキリをごのたちごおひ
狭 三中 四十三 大将のたちごおひをたゞ不おくに似さをもつるぞ云く 花山 八上の女房ちごを等
うて上のたちごおひいらうぞおりーま、なごをふ
ちごく 地獄 夫 三十四 地獄のををそてある 西行 「このそーつぎの教よのぶれーそーれ
のひーを弄よろるる 「つと人ハをでの山ちのそまゐ来りな爺のつるだにみをまゐれつ 「ひと
つ夕とあまるよ風の吹よりてかむーるををぞ

なーられりみことをいハゞとらく くろをもむーの
かむーのるーみハよるのおりひのむくいあるべー 翻訳名義集 二五十一 地下之獄名為地獄故彼沙
云膳部卅下過五百瑜繕那乃有其獄然此地獄有大有小如大論云言八大獄者一佑二黒繩三合會四叫喚五大
叫喚六熱七大熱八阿鼻地獄如是等種々八大地獄復有十六小地獄為眷属云々 漢合名大臣集 一下一ろのかれ
みこくうまてるあひだごくもくへもをとるもそうるー
ーるのびやうぶ 地獄画の屏風 枕 四六 依仏名のあーへ又の日ー〳〵地獄画の此屏風
ぜさせをうるのみ 栄さまぐ 七仏仏名とて地獄画の此屏風をどうでーうらみる目とぞまりあれ
おるよ
ちこゑ 千声 堀太 袈裟師将 「それをこがよおもゆーらん
木 三六 同坪の師教の下句たゞめととていそぐなるーん
ちえ 千枝 天怖 二 「和泉ちる信田のもりのくちの木
くちの木ハ本ぐちのおかうる示よるまでらひいそーびて云くちえにもえられて云をそうへのために云ーはい
それうるぞそれハ数をもりていひそーめうん 堀太
「五月こぞーのぐのうれ乾ーざと
木ぐちよ枝のびごとなけ。是らみる楠よあり 日 多 上五十二 花鳥よ大帖の分を引ありてくび
の葉のきくとあるハ偽り心但ーのぐの森よ喜をよめる 新古 雑下 未楽 「うつろぐでおバーそのぐの
りをみをようりぞするくびのうーぜとあう麻もいへ
たれをうふれバちえをもられて風ぞすーき
ちえぐさ 千枝 夫 廿二 隙信明朝臣 「やまひのちえぐの薬をりへて立田のもり林さびまろ
ちさ 苣 和名抄 十七十九 苣和名知散寒補筋力者也
ちさき 智者 おこそ るのつきそていまーてかーこを智者ありけれぞ

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

へとうこゝろえ人さそこるうつーとうて [さらの院] 六十一古流経よりの〳〵はじめありとて僧伺ふち
名あるちさごとなどめーてうんぎをでせさせめ

ちさとワーハ 内竪ライフ。千七サワラハ心力 [建武行文] 二十三内弁宜陽殿の元なよつきてちさとくく
をり千 内竪上古以来ス英雄息未冠者令侍殿上之名也其職見侍中群要後世只官人勤之

ちさと 千里 [延喜式] 十六陸陽寮十二祭文云く千里之外四方之界 [令則] 「いくちさくあるろなれや秋ごとまくるのくびとろのなくくん [六帖] 五をた
へでそう 「つくくとよ里のうどをつぶてくハまれのつひもれーちろう [日] 「わゆーぬろや
行ぞ秋の花のろハちとくもあーごーとおりくバ [夫] 十三家衡々 「なかめやるなるの里のくりのなで
月よ身ひの秋のろーをぞ [日] 廿七袋蓮 「一ともよちとくとうけるをも打ゆとくよーと打まの
そくく

ちさの花 [万] 十八廿六 「知左能花さけるさろうよ

ちさき 千木 [祈祷式] 祝詞 高天原ス千木高知氏皇御孫命乃瑞能御舎手 [夫] 卅四 主殿門内大庭 「ささみ〻代ハ
山田のろーにろちをのちびろーんろ〻ハらぞ〻ー雅望按ス古事記ス八米木又儀式帳ス八比
木とうけつ日りのくうー上代の屋造ス屋の左右の端ス木の上りて棟ス行合ふを組ちつくま
と上へ出ーたるりのありとつ

ちさのかこそだ [夫] 廿四 後多羽院 [夜集] 「えくくのあまの家おいく代へぬみもすそ川のちさの
うさそ [日] 廿四 僧正行意 「非ぢ山玉垣ごーにこりくせバ枝ろまさり花ちさのかさそご [新古] 春
二大炊御門右大臣 「ちさこひへちさのうさそ花かさくのさ四さあらでくーのつりめろま [令義解] 雑七
古後朱 「仁よーのちさのろさそ花りもあので春おさまりふめハさよろう 顕昭ス ちさこ八非壮
のむしまあるホこやさそごとハ棟の上ようちそ花てこるくカの様にてある木七

ちさ 契。契約ン [非代紀] 上五 将巡天柱約束曰ス [相つ] 三 さくちの母よ以ちさうやふりくん
[日] 十四 今八つーろひくん人のちさりまちん [そくさ] 六 人いみーじの花ちさ
[夕ゲ分] 廿 この世のさまーねちさりまさそこのあのみま [りる] 上百日 さがひーろのくろぼー のふる
ーあーごさまやとちさりうれーも心ちーて

ちさよ 契り [相つ] 七 ろのろをさくくちぶりのくすれぞ [くさぐ] 四十二 おろうるんちぶり
ろくさめのみのれかくべー [未] 大まさちさりろくさ [仲物] 廿四 こよひあんとちさりこりひろ [松浦宮物] 下 「引とれめくひびをのやなびろー
ちさごろまいのちりせバ [ろり] 廿九 「いさおとそうすちさ
はや [初度] 云二百冬 「ひてうくんのろもちさまあよちさ
るがうちもいろのそハるくもちさまあの姿とまろ
廿七ろくもいかせんちさーでとハぬタぐれのろく
ちさき 。神ひさちぶるぐろちさいて如るすン [うろ] 六 一みるのひさがーの様くちさり
さるをめひあろうて

ちさめろ 持経。持仏の持とおるーくあるろ百さろうびよも経をろ [代物] 一経ハ六巻の先生の
さめよ六教ろせのひてこづくの芝ス持経ハ院ぞ保四年ス
ぬごまでおりあーやれる四所初のうひてかくあまれて お経のやうやひろびてえのろう
[保ー六の末] 廿八 ろうろてそハ持経ま一をめ
ちさめろうじや 持経者 [字治] 十二六 敷実ろ以お経ろ
あろうれバっのお経ろまりハせんとて云く
ちさめろう 知行 [十訓抄] 十 十六条修理大夫私季ろめづまのうさ
ろまおりの不あろう

ちゅうち 佇待 拾 物名くまのそとつの山さとよ賀縁法師のやどりてゆうげするまぢ
ぢ一ゐうひる法師よ今よめくいひくれかよめる

ちゅうだう 中堂 てらー 七十一 中堂よ時ー〳〵まゐりのいろう

ちゅうもん 中門 ◦男子ニモイフ乃 禁秘抄 下五 内侍外不著織物類也是皆号命婦云々凡一切者多
中簡品也 榮根合 卅八 五節出さともまふ皇宮の女房中務下のさとことなげくさとるを出さともまふれへ
とゐりふくさとその出さとの多り 日本紀 十四 かさちーうき名とりうる形くの本扇の人ミ

ちゅうぐう 中宮 てうの宮 四 中宮はめのくまさよつけて 職原抄注 中宮始者光仁帝天應元
年四月始置中宮職是也

ちゅうげん 中間 ◦つきもない折 ◦半途 ◦ぶらつく 枕
ものや 日一四 ちうげんなるわよ大進物やえんとあうくへの言るをやなてまふおぢみつい
ひてるえれんとあふんと仕らるもおり 更科日記 十四 夕ひたぐみうよみうてこうひいぢーん
ゆちうげんよ汐さうちなどてこともさぢーとあるぐざりうさーりまぐひめ 枕ぐら 十八 いとと
もの分なるこぶりのり汐えあぐちうげんよちうぬでさ分なりうと行なげさて出のひぬ

ちゅうげん 中間 ◦下ざまの侍とス 著笠 十二十九 ゆるされて此本間よおされてふうひる
あ分ーうけーてくうさうく汐ぴて走りけれバ良あるうよおうんおぶーおされうひる

ーちゅう 中間男 著笠 十六十八 中太冠者とス幸以の中間男よむうぐさくよ
つみとーせるとス 日 日廿一

ーもん 長門本平 十四ノ十三 中間男がくびよみさとさる革袋うつくしう出ーて
中間法師 著笠 五六十三 中間法師常在とつみ
ぶもうづく 重服 袴 哀傷 ーのぶぐちぐされひうとさ流さる人ハ重服をさてまうさとス

日ノ十五

て母がりてうり云く 手鏡 雑中十月よ重服よありて汐りげる又のとー九春云く 散木 上五十七 重服よ
汐りける年の秋月のねうりけるおにのうきうりけるを外てよめる 月くげハりのわりやごの汐れまよ
りてふひにゆうかぐみる 保元 三十八 各配所へ趣カル云く兄弟四人各重服ノ装束ニ乃

ちゅうもん 中門 まろ 廿六 車よセたる中門のりとひさうもぐみよろぐひて 栄花 廿一むら
ざよあるうち汐のうりー中門よどまーてかさもをくありて 栄花物語 十五 その僧坊うち外の
出さまるたりうり云くうへの西堂のへごその中門まで送申うる 宝物集 二中門の柱よよ
らひて寝殿なる女房よあひーしひうが云くようあんど内うちーさとおー出ーさりけく云
さやさ云く 枕 三十 廿六

ーもん 長門本平 ハうぐあの小袂くりこまを出ーて中門の中よさくぐぐうう
さまひて走る大こだうの石をつひて走ーおとつぐぐ

らさどころ 血さどころ 雑公 廿六 卅 巻の首をちげ出ーうりうう
沙石 一下十四 くちびるもみなくひきりて血さどころよなりてくる

ちー 地子 三代実録 十二 六祖地子穀百斛 令義解 三 凡諸国公田皆国司随郷土估價價租往債租者九等
田限一年賣春時取價者為債也子人令佃至秋輸稲者為租即令所謂地子者是

ちー 致仕 ◦文字のごとく仕を辞ー退くるく 三代実録 七七 上表請致仕 易林 伊伯致仕禮曲禮大夫
七十而致事 後 離一紀幸の又の日方ん致仕の表をうけう さうれ 四 廿七 致仕の表をりたまふと
ワ名 下土いかさおぶちーの表をりてこりねうひぬ 日 日十八 ちーのれくぶさぞうひー
くおるひ分こえうひう

ちーね 淺茅 哀傷 花園院宸製 いろふさこぞのふぶよおちにーむいろふくぶちーおやうーおそうりみぶバ
夫 十三 信実朝臣 秋風のげふもおにーむいろふくぶちーおやうーおそうりみぶバ 四 十四 元輔 かもう

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

さねちーものいろのふりければゐまをぐみてぐちーまのえぞも
ちーまのえぞ 枕 二 秋の月のまねさうげまをぐみてぐちーまのえぞも
ちーん 。花鳥 雪ひーろよ大文の高麗べりを竹たくりのれたり 万 上廿四 ゐぢーん 元四十枚
ぢーや 持者 著妙 二十六本八歌山の学徒ちりくり多年法花の持者なり
ちゑのひ 智恵の火 枕 四 いうまーてこのちゑぐとろろ 恒盤経 三十二智慧有大勢力如金翅鳥能壊悪業壊無明闇猶如日光能破陰樹如水漂没焼邪見猶如猛大風
是一切善法根本云々
ちゐ 尤
ちゐめ 千尋 周礼地官媒氏註 八尺曰尋 百 五卅八 「水はかとのろ 元のちもたく縄の千尋なり
とねりこ 万 卅三 後九条内大臣 「えそーしぬちひろの縄をーづめそも及ばぬ恋のみち
百日 戯言門院大納 「ちりやみちひろくく縄りむすびうちしみてみよながら元心と 百 二十 五十 光明寺
入唐根本 「おちの山くりめよりいさよりよるをかりろたきのーらいと 百 十五 是非 「山ひめのぬ
さの退ぜゆさもちひろのうみこ秋のりみぢむ **ちゐ** 十一 髪つぎ糸 そぬはてーちひろといくくの妙
えろみと云々 「そろあ元ちひろのそこのみるこれおひもく来ぬれのこぞこん 枕 雑賀 元禅 是八名所カ
「万代をうぞつんものいきのそれちひろのままのまさごをちれこそちひろよあさ、さざけちりのれ 新政集 上三十二 「きみが代ちひろのそこのさざれの
持のおろうぞよあるそまで
ちびと 千人 さる 四十四 あまれまれがさるれよ人よもくへつべきほさまりてみろうろのまろ
みくろとみるよあいろくさらぶぐくまる

ちびる ぐりろ 上 さるやーたろうのいろもあるあやうよこや君をたろうすものくをひねろく
れば腰をどちびりてこぐれたろ杉葉1あえさもそちちひてをーくみゆ。これ八衣の縮さるを
つみるべー
ちひさや さくさぐ 四十 いとちひさやるれバさ
舟よそて 東風 十八十五六のをどにそいてちひさやろ 栄久の民 十五 小服ろの一
ーちひさやろ
ちひさー さ 枕 雑下 三位国章ちひさ氏風を扇おおそてかねのくまちせて云々 ろつせミ 和さ
ぐりのみそくちひさ氏ぐ タグ刀 十四 ちひさ花ぐそ
ちびまのいー 千引の石 孫代紀 上十四千人所引磐石 百 四五十三 「ワ表ハちびちのそをセハろろひま
みんも非のもろみー 寄物集 ものくをりの石をそそ
「ーーでをげルーれ幻るぶみてそちびちの石のざいをろ
ちびさの石あーねそもあそろちれをのこぞなく
ちびまなのほる 千引の綱 夫 卅三 隆祐朝臣 「こやさ
ちびろろて 千引の綱 我及若君遠 羽る山へのぶんそ毛すでおさ元ぐくハまをひんぬ小松ミみがよりひのくすまるせて 枕 夫 廿二
ろりと 千本 松二 夫 春一季経々 「松巻ーくハまをひんぬ小松ミみがよりひのくすまるせて 枕 夫 廿二
永保三年廿三名所会 親経 「長田ちろちりのいねをろずよーてよひろもつまーねがよりひい
ぢゆく 除目。諸国の歎まろくを召て任官を授けらるーをいふ又諸司を任ずるを京官の除目といふ秋ふることし 百 あーひ 廿五 ぢりくの夜をろられど 枕 雑 除
目のあーたる命婦左近がのくにつりーけるに元輔
ぢとと 映資 さろ 卅九 北徳ろうそーめ玉の軸ろの表紙ぢすのかぢりも 細 隔 竹どろのこま

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』　請求記号 837-79
ガラス使用

あをたるふまに経をてむけのも

ちびそで ちび筆 ○筆のさきのきれたるまゝ 【和泉式部】 筆をちび

ちびきゆ 刓滅 【三代実録】一十二所在銅印文経年代文字刓滅仍賜之

りきいくまう 地水火風 【沙石】 無住「かくあまく地水火風をよりあつめられたれバ、ぞくナーかりける

○利の部

りち 律 【さごろも】廿三 律のしらべハ女のものやなつかしうよろしとあらしてすのうちより聞えさせ 【ゆふ】 下四十二 りちのりきありせまるあらかしくそめたるに 【因】廿二 定家「をちのしらべとさこえのこゑあくまゆゝまぐれくさいとあびく庭の夕かげ

りよ 呂 【竹川】上二 女の琴にてりよのうたハかうしもはハせぬをいとしと添あひて

りん 輪 【四季物語】 五月 花のりん三つ四つありもさてゆれ

りうたんの花 ○竜胆リンドウをいふ 【古】物名 友則「わがやどの花ふみしだくとりうてん のはなければや をにはもくる

りんど 臨期 【中院通茂卿集】 【和名抄】 龍膽也 【和泉式部集】「りうたんの花とも人ハ見ざれやハそらのつまにもかくれゆく」寄月恋「りんどにハなりしつきあと夜あくさめるまちかりし夜月ハみるらめとも

りんごう 林檎 【和名抄】十七八 林檎和名利宇古字与柰相似而小者也

りんじ 臨時 【さごろも】十五 りんじのまてあそびのくまのあそびもさぶまふものハ 【さころも】四下八 春秋のみ読経をさせさせる物ぞりんじにつさまつりてこさかしもをせさせたひなどして

りんゑ 輪廻 【夜話】 輪廻生死の罪をかろはして 【拾遺愚草】ころろ死にたきときにし衰なれバ まんゑのあまやるかうん 【仏国禅師集】 輪廻とくぞろを「あつきのらんまうれにもころどしてあそハ

うれしきさうひのたまひ 【地蔵経】下十 是得是失起不善念造諸悪業輪廻六趣往本願経云一切衆生未解脱者性識無定悪習結業善習結果為善為悪逐境而生輪転五道暫無休息 【十輪経】云諸有諸趣死此生彼如陶家輪往来無絶 【心地観経】三大 報恩品云有情生六道猶如車輪無始終 【仁王経】三十一 輪田者往反不息田轉如輪

りんじのまつり 臨時の祭 ○まつりの祭 ○音便也 ○賀茂りんじの祭八十一月酉日也調楽八午日なり ○石清水のりんじのまつり八三月中午日也 【後拾】賀 後綱の朝臣丹波守にて侍りける時かの国の臨時の祭の使さそ族の花をかざしてまかりけると ○丹波国にて臨時に行へる祭也 【さごろも】十九 りんじの祭の調楽にも 【大鏡】 五十九代寛平十一月廿余日のほどにかものみやしろの辺にて つかひあそびありきけるにかの明神さくせんしのひけるやうもろもろに祭りおほくまりそのさみしくつれづれなるに祭りあつかんこ ○やまとせぬへバ云々 【敏行集】 かものりんじのまつり 【実方集】 石清水のりんじの祭のつかひにて 【うつぼ】 二十がこらかぐま三月廿よ日にいとしと水のりんじの祭りに

りんじのきやく 臨時客 ○ 【初音注】 正月二日三日の間に関白大臣の第一の客の不意に来るとを 【よろづよ】九 夕にハりんじの客のことにまさりけるハしくぞおもがくしのみ 【年中行事歌合】 臨時客 忍れ「りうそるのやどのあそびのかりえてぞ猶くえちりいよ季八雪ゆき 臨時のあそとひハ摂政関白の家に春のはじめ大臣已下のかんたちめへと招きてあそびするのあるをきこしまれる公務にてあらねバりんじのあそとやさ

りう 龍 【竹取】 【てらごひ】 五十五 りうのまりり仏うまれあり此ずへくそハべるめ

りうたう 龍膽 【此集】「りうたうも名のをあけろ秋のくれちよろきの花のうにハおしゆる

りうげん 流言 【尚書】 金縢管叔及其群弟乃流言於国

りんきう 林檎 【和名抄】 菓ノ部 林檎

りやう 綾 【枕】十六 此義へまなれる筆のりやうの綾をそらがさいくろ平斉なぐいろどらたざ

やうにて

りやう 灵。らう 別ニらノ部ニ出ス [竹林] 六 うーうひよりりんかのりやうこそ

りやうがうげさと 龍頭鷁首 [こてふ] ニ形ニ鷁首をかゝのよゝこひこゝぐーゝうーうひて [栄花後] 五 舟のぎゝりやうとうげさとこぞ出らう [源氏物語] 一 [文選] 二子虚賦游於清池浮文鷁往鷁水鳥畫其象於舟

りやうぢう 領掌 [代始和抄] 外儀の督佐ハ武官ニ兼ル事ハ領掌ニいゆゑ

りやうくーどき ○らうくーどき ひさこぞりやうくーどを 同ド [物] 良々し [枕ニ] ふ舎人云ゝかーこもりて物をぐい

りやうけ 灵け [国ゆづり] 上卅三 今のうで分くとこーーどりよ云ふ分れバれだちぐやれうすーーんとあんねこふよハりやうけこぞされバーんぞん院のりうーーのうとよせうそこらいつうーつまみりこバ後ヲ せとをこならん 同 りやうけをぐいとしてりのまるーぞ分ふんあうつうときのみくふハれりくありて

りやうおん 諒闇 [書経] 説命上 王宅憂亮陰三祀。天子喪にらりーせまとし [古] 哀傷 体字の年云ゝ [月ノ宴] 九 内にも東宮さもうなゆゞくあるべれバ強事うもれどこれハ後工人なゞもうとにゝび をぞ死たる

りやうだ 領ぞ。らうだ 別出ス。 [東征] の八今の分分の領じ。もべてくうもあれ鬼神よも あれ我物よとることをいふ [赤や] 十一 領じうーぞくもいとおろく分り [ゆア] 十四 分下ふこーやうみ すたりそでゞそて [花りら] 七 れおうくさまよ四ーまゝやせをーんおのがりのこ分ドりてくハさやーのたま ーらひもくげるりうよよりり [花ぐり] 十四 二九 ものくの男こ そうれ云ゝとのこ子をバ只ものよーてえそひりやうじてうーろを [下ちひ] 七 鬼よも神よも分ぜ

田ノ十八

られ人もおのれ人もとりごとれてもこれよこさゞの死をもとべきものにてあめれ [宇治拾] 九廿三 此秀の 娘ハ衆分して三年ふりめるを云くらく思ろーえりの死のより やうぜれうりのうるあやまち ふりくくちられバ 同 十六 これとりくーつとそけみのいけ贄さあるりつゝ人のもりとりやうじりゞーハ さてぐりず [枕上] 上五十八 ッカヒ人ノコラ 二人さゞりくれもゞ おるゞやうちる空さうものこひりやうゞたま へだゝう

りやく 利益 [撒本] 下五十二 長如来ぐーいみぐうちものごうつさみて 隆源口伝 [長如来] てとりやくうも ーけるうる

りやく 利口 [著聞] 十六 五十三 知音もかくるこやハ分るべき人の利口にて有かるやーん 同 五十四 不実利口をやうりやくを [山槐記] 二件更利口出来故

りつ 律師こ [さらく] 廿九 故田古息所の法せうくのりーのくりうつ成 いのうの師にてのりかゞーいとそけうるーの山でりくーやうをゆらびハからなあさきーの月のねずこや

りつぎやう 利生 [医] 廿七 後京極 「のちの世よ弥陀のりーやうをゆらびハからなあさきーの月のねずこや

○奴の部

ぬ 寝 [狩] 六十三 四 女なげさてぬとて [古] 表一 三 人ーゞ なげさぬとハーのぐん [和泉式] 奥上 「さのめさう人もなうられど秋のよハ月みてぬべきこちてせや [我身] 廿三 下 「ぎうーでありても分ハーー秀のれくとハまれれてハまる [うさ物] 十一 弁内 めさまの寝ようー [千載] 表四 成範 「こひまびて打めるよりの寝ようあめ [万] 一廿五 「吾七のきみこひ ととうあるーん [同] 日廿一 「秋の夜よやぐうちびくうちなびけいもめーあやもいまー [れりみる [同] 十四 「人の

めろうまいねずでろ〜紀〜〜おぐめをすろ〜ほ〜をげくう 初巻 雑一 勘定 「う紀人のころもよはあ〜
でおもいつぬれゞそみやる家はうのまゞ

ぬ 沼○らくれぬ。う紀ぬ。こりりぬ 別よ沼と地名の沼ごも古いつう 夫 廿四 延喜六年 緑信 ろと〜〜ゞ
「こゞりゆようと紀ころもちすくれをのよ水よゞろありをころもうれそろ
ゝろゆよ〜〜ろゝ〜そバこきぜの沼 日 ちゞろの沼 盤 家集 「いろくいで〜人ちろぬべきとゞえ
ゆの沼よりもゞげようつゞてれをき 日 廿八百番 「いろよゝんろんろ紀めの沼ままみ芦のちさのころれもつき
ゞろ紀世を

ぬでたま 吉野地 上卅一奴婢多麻能くろ紀みそ〜をまろまさようよろひ 雑哥紀 廿三 農播施磨能
かひのころ駄鞍さやろ〜 万 二八 「百あり〜てまみをバまろんぬ婢殊の吾恋愛に表ハあるとも 同 五十
「うつてまハあよ古も有一奴成多麻能よろの伊賦まをつきてみえころそ 同 三廿 「まらが表ぢやまよと有紀を
ぬバ多のよりてる月よ紀ちひ何〜ろも○いづれも思さく留きまよて

めろごり 金箔 江次第 一十八主上起座入自夜御殿南戸簾堂箔東方戸立給 抄 塗箔廣殿西庇也 ざき本 廿三
これもあ〜でめろごめよれ〜れてれわ〜と よぎり 六十 めろごり
内ろよ〜てわりのごりりよりり 同 廿四中のめろごろの戸なりあいせて ろろのへる みのり 四条ち
るさ〜〜ゆえ〜此方あ〜さいも 芸カン ころろそろ南東のたとありてておそ〜すとちんでんの西のぬ
りごめるりくり

め 梁 ぬ 多へ已よ多と

めろ 筆 白文 十三十二 鉦金五鼓 抱 乗下 貴之 「名よのどくろくもみそどうろ〜〜〜水ハ
めろろり 万 上七十一 仏供法の壇ひきろくめりて 五雑雑 廿三 あろ紀紙のうろぶろいろみろさよ
ま〜て紀森のろをめろくろ

ぬる 佛 **ぬれ** 仲ノ語 **ぬれく** 廿二 別ニ出ス 抱 春 ふく〜ず 「さろ〜ろう西ハありて死ぬおおしくハめるとる死
のびよろくれん 今集 哀下 永隊 「まろ人のたえひる月あ〜バめろ〜ろりてれろがハみてます 万 一十五 「うつせ
みのいのちを〜み浪よめれいらろの〜まの玉をろりをん 古 秋上 「親がするちろ〜ろんふ聖のつゆ〜めるめれ
てをゆろんおおハみろくとも 万 二十三 「永さちめれぬ山のえて 同 七十七 十七あさりするあまをろめ〜ろろてとり
ぬれて〜ころもかせろうもず さろ木 十五 あろ〜ろのあハれてて大松のひろでいろうぬれぬ 八〜姫 廿五
物衣をぐろのいとめれし〜めろろろりど あふひ 卅七 火をろうあめろろまみの打ぬれろろる有くぞめ
でろ紀 うら紀舟 廿四 女め〜〜ろまろる まをろりて そろは 八 まさ〜〜てかきさとさみのみうで
に 要之集 「うびよろて立ろくるれ〜ろころもめれぬ雨ふる松のおくろる 政政集 上廿七 薬毒筏水 「ろろさ
川まきろす風をまろて下ぬめれぬりみぢをそでまうひつれ 伊物 百廿一段 「受のろるをとめぶてふさともがる
めろめろ人なれせてろべさん 和泉式ア集 上 「白玉のへ〜ひろふハ〜ろ〜ろ
きをを〜れろくめ〜にてぬれろふそでの名をろてもてべさ 万 十五十二 物古 秋上 「秋ハぎの咲ちるのべの夕寒
ひぬれつをまも衣ハみのめろも 続古 冬 後鳥羽院 「こむろ山〜ろのろ紀れふくろぜにぬれるぐ〜ちるみの
うみぐで 拾王 「ちずとよみろのまるをうりのよにめ〜ろ 〜ろ集 「老ハ
みのろ〜ろりのろふハ〜もぬれにもぬれんさくの下寒 万 七 「ろ
めろされぬ浪ろへをろ〜て 同 十一卅三 「ろ〜へやへあぬ衣かりぐ
めろく 万 十四ハ 「いりまぢのおかやぎろ〜のいろあづ〜ひろ
ちろをいろり

めろたまのもめ めろ玉のろ 夫 卅六 定家 「めろ玉のろをハうつにまりろろこの世にさむる松ろで
めろしろ 床ろろ 八

ぬるむ ○身よ熱のあるをいふ 小町 「人しれぬ身はおもひまもあそぬまかみさくめるみてれるかゆるうる」 **ぬるめ** 十六 うちひくめるみちどしめくるるはさめめひてさうやよみえるへば 日ろる 下五十六 ほ多もめるそてほんちもいてあしけれど 同契注 万葉よめるしと『といへる伺よ少熱とうりめるしと いふ義訓をうれり 栄ろそ妖美 廿九 関白夜の心ちまめやうくろしうえさられどぬるまをひられば えくもろくもせさをのびず

ぬるむ 後 亥一 「君こふるなみだいとるぞめるそけるたえあおりしのうすなるべし」 拾 雑下 貫之 「名よいへどくろくもみえどうるハめるまちなさろうる るみれりひねにまにみえめるちなさろうる

ぬるで 崇峻紀 七 白膠木(ヌリテノキ)

ぬるし ○風よも。水にも。寒暖ろいうう 万 十六 廿七 「こさひをわしられをのよめる水めるくいめをひや水のごと 枕 一一 冬ハ云くいとをれ云くをれうてめるくゆくびもてやけばとびつ火桶のやもの白き灰ろもちりめるハもろし」 ワる 下 廿五 琴ノ歌 えのさむさめるさをくのくめて 同 日 六 正月廿日ろうろれバこえもおうしたそよ風めるくふおて 吹上 上 十九 「染にてもむる衣のいろふるみかすべき風のめるさをおゆめ 夫 三 「風めるみ(サミ)栃のいろなるさえれでいづくハやどのうぐひすのおり 枕 廿六 夫 「朝ぬみさくく風ハめるけれどいてさて栃ハいやさ(え夫)たふろり 古 雑上 けれどもの心をしろくぞむ 安法集 「岩間ちるいづみめるげよちりぬれバみだハのまにくるいただろう 今和語 いるめるのふろやうくといひてめりけり

ぬるし ○心のとうねさめ俗言のぬるしに同じ ワる 上 畠 「かれバくて世のえそのそぐろハ内くの心ざしめるきやうにハありうれど思合をて 同 ハやぐしのいとめるさぐくやしさや 同 日 五十五 心めるくあぐしうちるくハなぐやうめしあんおうりけり

同 九十七 いまへよりかいふるき道にもたどうううてかるべき女方にぐいみる思ひれくれつひてめるちなす おかうるを 同 上廿六 つひまうくえなりるしかるまでおうれなりめる心のめるさを 敦忠記 下 三吉修理大夫家連分めるきりのぐとふくのあざさ弓矢をすりちるもをし

ぬる 糠 和名抄 十七 糠音康和名沼賀米皮也

ぬるし 枕 六六 あれなる物よさ男のワたがこぶけさうど志ちるれうり 散木 下 四 狭後 夫 廿四 「たびめるた罪のつりのうをめぬうさ

ぬるとうさ 枕 六七 うくうたよろしたる男のいとしのびやうよめぬうさ風さてぬうなどをこしつくめり 同 七五 あさともをくびめのハ僧奴の君のぬうをさくつさてとりのひてき 夕名 廿一 こさけさくどにやあんおきるびちる手にぬうづくぐ仏ゆる 枕 二七 駆少をうこと立さるぐぬうづくうどれもちうて云く ぬめし ぬうづ尼陀羅尼よしもいのり 栄花 初花 出 そくくの僧俗うぐしらぬくた堂にしてぬうをつた大がひをつた をすくぬうをつたいのうをうぐよ 五 四 廿二 「あひれもハぬくをおうみハ大寺のぐきけしりへよぬうつくがごと

ぬり ○契云 文集 三 昆明春水満亀尾曳塗(ヌリ) 同 雑記 云 こひぢ ひぢりこ云く文集よ塗の字をぬうとよめるも面なじありてをのあしををよいへバ上よいつるにハかしかうべし 為尹百首 「つぜおくすき面代うのうぐみえてをのぬうれうるくまぐなき

ぬりうたひし 叩頭虫 和名抄 十九 十七 叩頭虫傳咸叩頭虫賊云虫之細微者觸之輒叩頭和名沼加豆木無之

ぬりつき 草の名七 枕 三 廿七 夕名ハ教うかれ似て云くにくさみのありさまをいとにを一ちて おひ出けんぬうつにをとふものやうにたまあれうし 物撰字鏡 草部 五十九 酸醤加我弥古又奴加豆

支

ぬらざ 今狂言 十九 いものつるのをひくまりてぬらざるぞのちりうりけるをみて光清「なふうざに
いもぢぬらざいちりよろろ云々 和名抄 十七 十二雲餘子和名沼署預子也加古 散木中 五十七 夫 廿七 哀方中「さみだれ
ぬらさ ○猪の臥所をいふ 東人のぬらさくり臥あぐてみえよ同ド 散木中 五十七 夫 廿七 久安百首 待賢門院安藝「ふしをしてよ
とのゐのぬるもわりれざめりてこゐぬらさにやつれてぞころ 夫 廿七 久安百首 待賢門院安藝「ふしをしてよ
そのの家はまどろまでめさおさまりよいのねざめよ
ぬれ 儒 体ノ語 夕ざり 十六 その春けさもいとおやー云々女君のかくぬれをあやーとぐめひ
ぬべければ
ぬれいろ 儒色 堀後 落葉 常陸「ぬれいろのにーさを遣にーくのはしぐれにさるみりみぢちりろう 夫
八 永方二年云々 重家「五月雨にーそれてちくれくぎすぬれいろよくをもる少ぬれ
ぬれにしき 儒錦 夫 廿三 家集 仲正「ちみぢする秋の山べのぬれにしきたーいれめくん
ぬれぬく 千載 夏 枕改め太政方「五月雨にぬれくひんあやめぐさ沼の岩垣をみもこそこせ 夫 九 終哉
「くれはどりあやふくにあるタ立にぬれくてさせみのまろみ 同 円藻 登門院但馬「さうぶれに神もぬれく
をくへどもあまもげちることもろの花 さらき 廿九 あられちる雪のふれぬれくまりてよづくよろんうれへを 袋草子 三 十二 道政「ぬれくもれちりもろんそーたちの上
かくぬれくまりてよづくよろんうれへを
毛の雪を打ーひつ さらき 十二 さらぢ川八十瀬の浪にぬれくぎいせまでこれちりひれこせん
ぬれごろも 儒衣 ○たぐぬれくる衣をいふ 堀後 泉郎 兼昌「ぬれごろもさーてくりよさのおま人
ぬれそぼち ぬれ衣 ○なき名おふぬれぎぬも同ド 堀恵集「ちろとまでさみもわさるんぬれごろもかく
るなき名ハこれのぞころ 千載 哀 一 隆房「れるーくいろさもてーうぎれぬれごろもさそしすべきなき名
あーどを くーよ人ちどをれてもぞやすくぬれころも人にさ今すくも多れにあーさじ

ぬれぎぬ ○たぐぬれくる衣 夫 廿七 家集 朗詠「春のわろうくにぐぞありびく白糸のいとまのぬれぎぬあちす
かーれわりくバ 大帖 五十「ぬれごろもくいれすおさくの春よりひのぶくぞ我そろちろく 四 九十 あちろと
人もなれやもぬれぎぬを家にハやせ猿のさくーに
ぬれぎぬ ○なき名おふ 伊勢物 六十一段 後「名にーれたぐあぢにぞありびく白糸のいとまのぬれぎぬあちす
どりん 後 巻五「にくうぬ人のたセそぬれぎぬいれかひよみへど今ろうきろん 和泉式ア集 下 ぬれぎぬと
比みをくこと今ハろくへさてそんと人ないてのちいろろことろりそんろくりとのひ
なるにもよつく人のたをれバぬれぎぬといりそぞにおもひわこせよ 後 雑四 小町そうまこ「うたとそーの
ふるあめのそらにて我ぬれぎぬハやどろうず 拾 雑恋 贈太政大臣「あめけーさみぐろくへのなけれどやなて
ーぬれぎぬひろうもなど 散木 「のびてもいろでろとぬくれぎぬをなるのくさちてやまんこやさろ 大帖
五下「すくめてろぬれさぬてろるものハろるなぐぞの死するなるべーー 私家集 廿四にくうれ人おいぬれ衣を
ぞるさ法ろーかるぐひもあれバにやろうもあぐびやえさせぞ 拾 九十二 さるろくぐごとなどの出くる
てそろるしれとれろうてて紙よ為といけうみせて个よ
ぬれぎぬにハ付ーんと他ーたれハ云 栄花 一七 「もろ名おぬれぎぬもろぐろーをまこ
ぬれーも 儒柴 夫 廿九 家集 仲正「ーぐれもろ山のぬれ柴ろうにくやまくをこめて紙ひれろ
ぬるで 薄。今ハおんさいと 和名抄 十七 十六 薄和名須須木 本艸注云自三四月至七八月通
名絲薄味甜體軟霜降以後至二月名瑠薄味苦體硬 拾 雑春順「羊どく春ハろれぐも池水にれろめなくく
なるぞぞありける 別大 大和家「古川のーびれぬなしにつるれてなぐれもやめやその理本 應神紀 六 水さ
まろよさみの他よぬなくろう 万 七卅四「永心やさよさゆさにろれぬなハへにもれたにもよろさまを
○れぬなし 「うきぬなハ 別 出

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

ぬの 布 和名抄 十二 四 和名抄能織二麻及紵一為レ布也 名義抄 五 光俊「今はよにあるもまれなるわくぬのぐもう ひらわ〳〵むら〳〵なりなり 大悟 五下「白川なさ〳〵して布にもあ〳〵なくになぞわくらひのこころうき」 後拾 玄一 能因「けさこそはさてをく〳〵そくちにわれけふの細布むねのいしとや 夫 廿三 仲正「むろのそまのうくひの外花やもろのさ〳〵せさてつくりの布 日 中務々さこ「わぬくさくみのさぬの〳〵あさ衣なてもわひみぬむさのくるしさ 日 さらまきる市女がをそるらぬのりろふくのさんをひつて 日 公朝「よのまのをひくたけばうさ布のうすくもりぬくたみもいてくり」

ぬのぐ 布屏風 枕 八一 いやしげるもの 布屏風のあたら〳〵中〳〵行〳〵みそぢあまり〳〵ちて〳〵さら〳〵のそみおもりくきうせて 拾 屏風を布にて張て画などするもの 古 九八一向沙汰にも及ぬこと

ぬのこ 布衣 万 五廿九「ひこもる犯布こそぬのこのこのごとわひさられもちわ〳〵せでこ〳〵せ竹のわ〳〵 和賀左傳「ちるまでにはびれとせこさんなのひとへくへば死の名ごてるべ

ぬのさらし 布晒 万 五卅八「あらこその布衣をたまもせそてにくやをげんせんすべをるこ

ぬのばう 布障子 禁織拾 上十一 北副高擧主布障子二間 打付 枕 八十 大史ハ云くかくりうえそて行の大夫権の守をぐりく人の云〳〵紫革して伊与すみぞ〳〵して布さ〳〵ぞろてをひさる云〳〵

ぬのもう 布の帽子 つれづれ 廿八段 布のもう〳〵あ〳〵くうと云〳〵もかりハろひ犯そ帽額の音の時ぜる〳〵布のもうをるもり

ぬく 抜 。太刀 髪 つぐる 竹のよ 此詞ぬけるハうそぎくこと ちう〳〵ぐるまぐ柄のくる今ハづれとぬうんとすらん 弘 廿八 太刀ぬ犯さるうひなをとう〳〵へて 武烈犯 二

ぬく 貫 。糸緒などにつぬ犯通をるこ 此詞ぬくことハそぐ玉も農矩〳〵犯おやゞ弘まめ〳〵 古 春上 通貼「あさみぐろのとうひて白糸をもにもぬける春の柳う 万 三 三十五「大船をまぬぢちぐぬ犯大君のみこと〳〵ふみいさりもてるも 拾 雑上 貫え「ちがれくる激のいとことてようもかう〳〵ぬけどもぐれてれつる〳〵ゑ 続後 雑下 和泉式ア「をくるをみたをそぐ〳〵ゑ 天智犯 十七「橘ハ於能我えぶ〳〵那例こぐる 後 雑三「ぬきもめ人のいのこころ

ぬぐ 。衣も喪の服にも当るもの 新後拾 雑下 よ〳〵ぐてもめ〳〵そでくる 万 二廿三「衣あ〳〵ハ暇時もなく 古 玄二 五 支則「ふりくぬぎて我ぬるうり衣ひのてぬ犯ハぬ時のまもな〳〵 続拾遺 廿八 中務の栄をひさ〳〵犯そぬぐぜなべぬが〳〵をまふさ 日 九七ぐ〳〵母方ハ三月ぐ〳〵ハ〳〵てつぐりにハぬ色をまりのみを 万 五七「うり喪をぬぎア「せく〳〵のうえそめ〳〵衣をぬさくて山ちく〳〵ぎ以ちうりぞろう 万 上 八十八「さぬもえるぬ〳〵てぬ犯くぐちぬめ〳〵 夕ぎり 十六 志バ〳〵打やをみのひてぬぞぬ犯うそぢちなバぬぎくぐ〳〵ぐこそいわぬめ 日 秋上 素性「ぬ犯ハ衣バうまぞ 雪丹 四月終「その日の菖の根よりもなが犯をぞ衣ぬぎくのく〳〵ゑびめる 散木 上 十五

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

さか山にそるさえぬれバ白めの天のもころもぬさみてこそ 金葉 哀上 俊宗女 「えなぐ〜祓ふりとにハじ
若衣ぬさすてられんみそぎ河 〃 〃 国ぶり 十一廿六 わらハのくさぬぎふりすて
みちるものいろ〳〵ぞ物のおもふ〳〵にわらハのくさみ色 枕 七扇
紅光才 祖右只祖袍袖許不祖半臂下重 枕 五四 殿上人の直衣ぬぎさらひて扇や何やと拍子にしてつかさま
されどゝうたゝぞろとうたひて局どものおはするあたりへ云
うへもひ歩てぬぎされつゝさまざまのものゝまぎれ 夫 十 後京極 「うるハしき
ひうたゝ〳〵のこゑ あげ巻 服衣ノ 今ハ〳〵てぬぎすてゝ物のかとりの
卅一 ものゝ人〳〵のぬぎすてのこんまいとゞ花のかぞも云いひちすて
ノ源ニ似玉フコヲ おくうびのまにくゞりの汗額をぬきさとくゝり 天聖紀 四十八 婦女 蚤髪千背猶如故 うらさと 十
物のぬぎをべ〳〵たるうちをさめとゝりて 幻 十五 裳うちぎぬもぬぎたてゝ
をとるよ うびうし 卅一 うちぎぬハぬぎたべ〳〵わり 打ちゆて云〳〵
ぬぐ 昔のそきもの 夫 卅二 ゝ人〳〵ず 「ぬくゝろのそきもの
な
ぬくうとり ぬくも鳥 後京極摂政三百首 冬ニ 「たゞのしるこゞのうちれやぬくめもうさる
る 西園寺後百首 「こそさもあ一夜のさうのおくやとろもさうろもさみあるうるる。但此歌嫌かれみ〳〵ど
鳥〳〵ぞの寒〳〵書に安り物の百首の奏ぬるべ一 定家々三百首 冬部 「秋ちもみ一侍もかそうろうめくろろの
てハたうつのるも。此めくちハ生鳥の温血をうひて鳥とあゝむる之ともハぬ
ぬき 俗 物古 ヽ馬放 「水まさる沼のさ月のうたをろ〳〵そもぬくるゝ
うたいうの沼のいかぐまろ〳〵ぬとをれもふとゝる こぬま 沼川 夫木
ぬまる 沼風 夫 十九 信実朝臣 「こもみうみの浦ぐぶれぬく沼風よ高やあさうの名にしおふ

ぬまのいそうれ 沼の宮道 千載 夏 春大臣 「さゞれにぬれぬくひろんあやめぐさ
ぬまえ 沼江 散本 上 卅五 「さみぶれハつるゝうの忘水をひさすくのぬまえとぞみる 五月雨のころ
ぬまえて ぬまえてそ逃ぬまえのそこと答うり
ぬまぐつ 沼水 後拾 春下 前遠 「沼水に蛙なくうつべくそ知の
ぬけ ○次のぬけ出と心同ト。本語 ぬくる 見安きまろに学と 画合 廿 家のまの中にハ教人なぬけぬ
うへの何うとうものみえひとでみえたる 同 廿八 よりひたゝでつうさ
づくハえうぬさぬりそう 後のくゝハ 十三 ゝとゝ〳〵人なぬけくうりひ
ぬけいづ ぬけ出 ○さう本 の往坡群の心うり さうさ ハ何すも人なうどれあつうハれぬさゝ〳〵やすげゝ手〳〵
世にぬけ出ある人の活ぬうりハ不せ死るおろ〳〵ぞん 後のくゝ ハあぐやうぬけ出ぬさうぐまさうぐまさゝこそあめれ
にもまさうぐまさゝこそあめれ
ぬけく ○俗のおろるさまをうへ 沙石 五十廿 肝のさめうこそ見〳〵て来つれとれもしてさゝぶうりて
うろてうへとう安さゝ〳〵ひそれバうりて山へゆさめ猿本まのぐりて海中ニ山なし多さするなれて行
ぎ〳〵といひて山へふくへりぬ乱 ぬけくとゝ〳〵てうりめ 盛衰記 十四 競が所ニ大将ハぬけくとふさんれ〳〵
同 四十二 十二 ぬけくと判官よおつゞきてゆく
ぬけがら 蛇 物六 大行家 「身においぬ者とのさゝやくぬけうこのせみの
ぬけ 蝉 ぬけ目 別出ス 枕 二六 これさ今さうのうりのそうれもくあうまり
とそひ〳〵ぬけのぬをとのせられバ南おりそまあうまりのそれぞうさ此
ちくもむうどめさまもりものぐるり一命ぬのめくいくくぬひ
ひつるがそむをぶ海をさつのとゝぬめもー あゞぎすひれさそ
うさぐびよりうりしのゝそうてそぬひ也せうふをされ何うぬひ

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

うくもあれなぬへる葉ハ 古 大宇所 「まゐをくにけりてまきすくそて 同 後 宗典 「山さとのまきの戸ハしげくともんみのしろ衣ぬりぞてる

ぬえ 鵺 万 一八 「ぬえことのうちなびけれバ 古今記 上二十 まき山にぬえいる記 和名抄 十八六 鵺紹紅性鳥也

ぬて 擰 和名抄 廿 廿二 擰佑天悪木也

ぬさ 。旅人の道の神に奉るの心 餞よも贈る心 又神宮に奉幣ともいふ。万葉にハ大るぬさと

よめるハ 和名抄 十三六 幣帛和名美天久良とありて 又サの訓あ〜 朝野群載 廿二 一出京尉向奉幣道祖神文

云〜即今行願途中平安之由 夫 秋上 弥やび 「秋ふかみ山ちとびやく秋なれバ〜ろ川にぞぬさハさむくも 拾

春 「そろそみさちうれやく山ちハさみこそぬさとちりまがひけれ 土左 そぬさをなりやくと云

夕くれ 五十一 旅衣おろ〜〜てぬさをどりがまくて 夫 廿二 六帖 「そめさうていのれるぬさのわるひと

ハさむけのみちの神やちら〜ん 夫 九 行家 「たがみそぬやだくみしてろ川たきのせゝうよぬさをがて

らん 万 廿五 「ちりやまる神のさうよぬさをろいいのちハれもちらざめ 一廿六 「ぬさ

ろうかのてさやへりてれ 夫 廿二 人九 「もとへさうぬさとうしひて 同 第六 四 衣笠内大臣 「今ひとも妹をこひろの神さこそぬさとうむけて

土左月記 「ろこのちひろのそこにも向をるぬさの道凡やまどふるなん。 物千 旅 貫之トアリ 夫 廿三 第六 四

光俊 「ぬさうつるぬさの道凡なやれバまどらしげめたるさる山さ人 古今抄 中四十七 更取國之大被佐而云〜為

国之大被而云〜 奥儀抄 五 大ぬさハそ〜へをるる陰陽師のもさるそ 古 巻四 業平 「大ぬ

さと名にしおへてもつひまよるせハありてよのと 夫 九 躰宣 「ささ川のふちせるひくなこと

ろぬさとりと人やみそ〜ん 同 廿二 家集 西行 「里人の大ぬさふぬさ川ハ神のこゝろをぬさとてなつてむまる〜むまとの〜ほりぬ

ぬる 同 廿二 第六 五 西東 「今ハられすてられ侘ぬ〜ぬさのおもみてなれ〜ぬさぞこひし 同 九 西成

〜ろくろ〜日数もさだのおろ〜〜〜てみるのそのりこみぬさとろ〜〜

ぬさみてくら 「ぬさ袋。契云 ぬさハいろ〜ハいろ〜の組布を尺ぬ〜ぬさとよめり後世旅行にハこまるにぬさをと袋ぬいれておゆきて打ちまく

るゝ 上百一 こゝとのつまぐ〜をたびあるこゝろのさもけのぬさ袋ぬやとそゆ 拾 雑上 りのへまりけるへ

のりてぬさをむすび袋ぬいれてつろととて

ぬた 経。織物の横糸をいふ 万 七九 「みろのきねがみのこりむ〜ろられ織んとてぬさをし〜に 古 春上

行平 「さるの野ろ子ろの衣ぬたをうちをみ山風よこそみざるべ〜られ 同 秋下 「雲のうて春のぬさこそよ

ろ〜〜山のにしきのれバろうちろ 夫 九 羔抜 「玄山のあ〜〜をぬ

の縁

ぬぎうへ ぬぎうら ぬぎかへ ぬぎすて ぬぎすてべ〜 ぬぎすてて ぬぐ の條に出

ぬきで 抜出 年中行事 二十番 相撲 女房 「ろうそうてこゝろうつくしけり。七月廿六日にあるを内取といふ廿八日にめしはせらるゝあり又廿九日に

江次第 八廿三 相撲 抜出 昨日相撲人中抜出之令取相撲也

ぬきあし ぬき足 まつむ 八 「我ともろ〜れ〜ごとぬきあしにあやまちのぬバうろぐろ〜れといふやなごりにてぬれあしにうちをて障まをそろちていさ〜うあくると 請 小雅巧

月篇謂地盖厚不敢不蹐

ぬきて 貫簀。簀をぬきそてたゝ〜ひの上にてみおをそて水を外へちら〜ぎぬるのよさうひ〜ものあうとぞ

延喜式 主殿寮式 三年一請貫簀一枚 万 四廿五 「いろ〜への人のわすれまやるさびの酒やもぐらとべなぬきを

たまろん 伊勿 廿四段 女のてあろふをぬきをすを打やりてたゝひのうげにみえけると うつ 狭 三中 廿五 みえをうるそて死

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』　請求記号 837-79

ガラス使用

ぬ一 主。主ノコト 夫廿七 義注「おりひぐまの人になれよいぬのめ一とりゆる
同 後京極「めーらぬ風べのさとをたてとへばこたへぬさとが恋をとゞめて心のおもにあれぬめーこゝろこまのたゆめをぞひく
ゆきとゞみでかーこゝにあくにゝへんとぞおりゐ 金槐集 上可考
ぬ一 ○是ハ敬語にハあらで物のめーとゝみすかるべーなるくめーさゞまゝあこひとゝるそゝ 同 ハイカイ日「山ぞさのそゝろ山ざとにさゝりとゝみゆるさゝゝる
へもどにてなーりて 顕季 「めーおくてあれのこまゝさゝる山ざとにさゝりとゝみゆるさゝゝる
礼政集 上廿六「うつ一枝てこのひとりくゝぬれせーをくもめ一ゆえいろまさりそゝ
ぬ一 ○敬語ゝ ○宣長云めーハ何のうー一ゝとうべたを乃字の約奴まれぬめ一ゝとゝ。千蔭云此説いあたらずあぢのぶの詞則之まれバ乃字一ゝといふべうぞず奴と宇と通ひて乃宇一ゝと同語ゝされど右ハうー一ゝとのこゝひたなーみなめ一ゝそのこゝひつけられバ中世のあぢれにあゝうんよ
○其人ゝ向ひてゐさ●又うふされ敬一てゐめりロ又章子の地にいゐあり
○向ひていゐめー 忠見 九別「めーうりハまれやゆきまーこゝちのくれーのぶだうのさみだうに後
拾下 待従高ニテ左大将朝もぶめーと そーをまるも心ありやゝ 竹元 ハ毎人朝うゝてゐるめーのみもゝとまつうまうてもぶあるまれをすべうめるゝなと捉とうるく 宇治拾 二十二 此女朝もうまぶめーたちハげまあやーとおもひうまうん 同 八十七 猟人ニ色テひぐうまーりゝをみていうめーの殿ハとうみなるやといひそれバ
●他時ニ敬一てゐめー 宇治拾 二五 膳アナル男ノ朝ハもうめーの云く 今昔 此夜のもうまぶ侍の
土左 一一三 これをみてぞ仲丸のめ一云ゝ 貫之 十一 肥後ぢ着衣のとゝまぶとけとうめーの下るやまる

高光 天暦九年宇佐の使にさよとを下るに餞に上のめ一たちふみのふついでに 伊外 下 右大将朝房の名
一たちのぼうけのへ うき舟 世九 いそーくかーづるめうまらうどの めーさまゝ
東や 八句のうんの男一のへぐゝもうのくーく 枕 十二 指 道命「さつうみるおやをおーめてこのめーの盆をろ
みるぞあそれなりける 我 二下卅一 其めーとゝづれうまさりけるとなり先をみせをーうん 宇治拾 十三 今ハむりー
名誇佐ろうへありけり冠の表げをのおぐりけれバ世の人おげとの
口草子の地よゝめり 峯使 卅一 義人のめ一打りゝひて
ねーがうひーがでと 同 父め一物のおゝーある心にくゝ不ありーくん なれバ 東や 廿三 父めーのおにかをーうん
こおりひうう人ゝハ 着ぶくの君 十七 右大将係のまさうのめ一のお一の娘ゝも 方 五廿六 おがめ一のみさまたけひて
春さゝーバるーのうやこにめさけたまりん 同 十八 卅六 「方さにりかにもよこさもやつことそあれハありけるめ一のと
のゝに 宇治拾 十四 かくれをろーげにぞびゝもゝくこゝでけーくれおーの心ぞハるゝ
ぬ一つゝ一 ○夫をさゝてゝ 佐承大夫集 卅 めーつゝくさゝこまぶうちこゝめべくみえーさまをうを
めーつゝくもゝえーぶうちこゝめべくみえーさまをうを 永久百首 忠房 おがめひさゝゝこおかゝへさくゝうる
ぬひのとぢめ ○是ハ物ゆゝ年の針どめをゝゝ前の後の下の枕草まの文よみべー 永久百首 忠房 おがめ
つるるめひのこゝめやまさうんまぶうろびめゝぶぐくうる
ぬひめ 土ぬひ一 五 あやのゝそひにてけまのめひめまで 散木 上十 「めひめをう八をさるなるさるみれぜ
春も梢にまくハ咲けり
ぬひもの ○縫 今様 やうをめひまもうめひのすゝ 枕 ハニむづゝげをる物 めひものうゝ 世九 二色く
のあとのうぞくーれめひものくうぞのさゝもさるさいれおうーうみゆ 狭 三下十 おをーいろのさうろ

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

のうたゞ夜の字保後のうつゝぬに「和名抄」唐勢切韻云一訓絽乃次五色絲刺万物形狀也

ぬきん出 夫七巻抜「あハれ人ぬきんでゝ我をもしらぬへてくるゝことのいろ〳〵そゝなぐめせきハにごりのいせの山にしをぬきもし風ときゝもあ」詞花 後拾「おきのいろをねもとみそぎけるうのとくるハさゝ〳〵やへうつぐるゝ」伊勢物 大阪ぬきてうゑおひて出さぬきてふるうとりとゝおひんん」竹川 五巻「ゐ〳〵ゐのひとハねもとをこゝろもとつゞ〳〵しくつけきまてねもころ」同 春下巻「花のゝろハこゝろをこゝろもとをぬきりこゝろの八雲もぬきとまれて」宇治拾 一巻「ゆ〳〵こそゆすみつれとゝ

ぬきてまもれ 。まゝの約まにて則ぬきまれ被盗たゝべ〳〵 演語の偷偸といつゝ心俗語のぬすむもやうに物をとるといへるごとく我心の欲する所へうくれ〳〵のびて行すとゝなるべし」 後拾 下「くいと二なくあそびて教ゆのぬれバからくごとぬきとまれて傍厚のまれれバ〳〵てあさまし〳〵く大将後のもひうひてねんつゝまもりせんくにごとくにうとゝて出ひ求まる」 まつひ 廿一「いとまなくぬきまそれのくなのまうにハゝ行つゝなくて」 同 一四十二「山川ようへ吾ぬすまん〳〵」 同 十一廿「ゝろまくまさせろまみよ仰をうくいそどいひ〳〵と思ぬきまん。此三首も同心ゝ

ぬきてまれいで 狭 一上卅四

ぬきてまよ 散木上 六十六 残菊号書「りつ〳〵ものれるものこ〳〵たまもちゝまよ。是もひとゝ〳〵の心なるべし」

ぬきとびと 盗人 和名抄 二十倫兒和名奴須比止 推古紀 廿八 強盗竊盗並大 之不可止 万 十二卅二「ぬさゝ〳〵ア〳〵ハさ〳〵れぐ盗人の奈れる元うり入てみえけん」 拾雑下「盗人のゝろの山にうりにけりわるドろぼ〳〵の名にやけがれん」 伊勢物 十二段 ぬきとんなりけれバ国の守にうめられにをり」 四ノ廿六

る心あるものもゝ〳〵 枕四 ゝるうりてみるにゝみ〳〵ゐとぬきとゝ人をおえくそゝそろくすゞけれとゝみさゝゐ兒てゝ 抄 又人なうぐとゝかりんとゝぐれていゝる内ゝ禅話に此差賊などゝいふ類あるべし」 和名抄 上「ゐれダ名ハそ多ゐそ人ゝゝゝハゝゝゝ一枝ハゝうゝてゝゝん」 竹九 九「くやひめて大盗人のやつゝ人を殺さんとゝゝるよりけり夜のあゝうだゝ今ハ春ゝ〳〵ゝ。是ハにくゝみ罵りてゝゝ

ぬすゝうゝう鳥 後京極殿三百首 冬「そゝうのやいゝをみるうふねするろゝのゝろゝ〳〵ゝ」 三百首 冬「ゐくきを吹すろうものびやゝ〳〵ゝてゝくゝ夜のおゝ羽に「そゐくきにたまゝゝそゝゐうゝ本庄 発やぬすゝろをゝやがてゝゝゝん」和名抄 上「ゐれダ名ハそ多ゐそ人ゝゝゝハゝゝゝ一枝ハゝうゝてゝゝん」 竹九 九「くやひめて大盗人のやつゝ人を殺さんとゝゝるよりけり夜のあゝうだゝ今ハ春ゝ〳〵ゝ。是ハにくゝみ罵りてゝゝ

ぬすゝうゝう鳥 後京極殿三百首 冬「そゝうのやいゝをみるうふねするろゝのゝろゝ〳〵ゝ」 三百首 冬「ゐくきを吹すろうものびやゝ〳〵ゝてゝくゝ夜のおゝ羽に「そゐくきにたまゝゝそゝゐうゝ本庄 発やぬすゝろをゝやがてゝゝゝん」和名抄 上「ゐれダ名ハそ多ゐそ人ゝゝゝハゝゝゝ一枝ハゝうゝてゝゝん」 竹九 九「くやひめて大盗人のやつゝ人を殺さんとゝゝるよりけり夜のあゝうだゝ今ハ春ゝ〳〵ゝ。是ハにくゝみ罵りてゝゝ

○笛の部

ふえ 流人 続家紀 十七 伊豆國の流人お右手清撥佐添教教

ふり 船鵜 和名抄 十 十五 瑠璃俗云笛利青色而如玉者也 夫七巻春「ふり山のみどりをうつゝと純水 同 廿四殿舎門院大輔「ふりそめしそのゝ夜の夢ぢをうつゝとゝ夢ぢをたゝるうのとゝろさてゝろりのとゝろ〳〵ゝゝゝ」 新後 天喜 後成「ゐさよ此ゝ〳〵のうゝ本うゝろ」 同 四ゐんのゝとゝろりのつゝゝゝろゝす系て。契云瑠璃杖ゝ

ふりそゝ ふり草 流罪 拾集 ふりそゝをのゝとゝおくゝ秀のふゝきゝりのゝ

ふりうゝ 流罪 拾集 二さゝをゝゝて流罪ゝていまゝゝろりのゝ

ふり 類。タグヒノ音語ニテ一家一門又ゐろの者をいふろ 好悪 アサカムナニクノヲ 上二 置文九州宮崎市 ゝろかゝりゝゝろ

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』　請求記号 837-79
ガラス使用

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』　請求記号 837-79

と ○詞の玉緒にも一つのそこ出たり 古今 十二 とこそろもてそこ出たり 古今 十二 れるどこにかくてとなくちり ぞみろ 日 上ろくごくにてハ行ちんぢんな列にをこつべし 古今 十二 なん 詞玉緒 古 六 そるのろくを古にまりてそをどこもちへ人のこころべく 後拾 へ こやこ知らけさをろぐにいつくもひろそへとつれまーぶ 古 七 めぐーーれおもまくにる机こちらのとーをあらしもいろる 日 十五 あへすとるぐのろーのるぐくてこひろうまれーーぞへよいっ○是ハをすると云ひひの之まく云心にハあらぢをすると云ひひの之

と よの心 ○此と 詞玉緒 よを多く出してやはら字におくとをくハ下知の時又よのんちろにのり 名月 五 こよいハ盃などしてと 久ざり 文台 えみどことをいへことの外にてよろよさそすれば 後拾 廿七 こちごちをぐさめるみ 詞花 廿一 分ろのち何ろよようのてすろろーぢてすれ分そ手ささやーにとへーれをおひおさすく 万 七十二 氏川と舟ろせをとよぢくぐもれこえぐーーかられもあ 日 十廿二 ろうち船ろさせをとこぢおのそろねかを施のれとせあ 古 巻三 元方 人いさ見れなる花のそーめるバむーも今もろーぢをいろん

と 物との心 詞玉緒にのり今著と

と 物語文のが 物との列て軽き心なり語葉よをくあり今著と ○著ろ声之唯 名月 四 れ心ーてれがさん方にをいづーぬ近日の君こをさーくのせバをこいとぢやろぬえ文字ハよさりまろべーぬさ心なろべ一月とろ文をバんをさてまぢーせろりけろをふなろべ一月とろ文をも成ろくよ男ハとくをとをりされバ武ア内的其夜上東門院にさあーひりがをりろう

けれバいよ〳〵心まさりーそめでれがーろり 恵見 三 三月櫛の本のりくにてかのろめろ「心にもゾひのろ 拳ヨウチテカハゝやまちろ花のにろろよをくぐこころる

と 唯く 非時記 五 熊野高倉下忽夜夢云く武雄雷神謂高倉曰予劍号曰韴霊今當置汝庫裏宜取而献之天孫高倉下曰唯ト而寤之 書紀 十三 おろぶの高ろをさり 卜ぢろ本 八十八 大和よ男ぢりぜえのみをえ云くは盃さーびそをとのくろことうひもてなーさへ例のおろやけろ多なれぐ人よ祝ぜこゆるも云く

と 挙 尾上 別出 古 春上 よくへーぢ 山ざろ〳〵とびみるれバ春ぐすこ挙れもをにもちろろく 拾 賀 称徳帝 六雑 「そのねよこさの松風そろ〳〵いづれのをろもろぐそのろん 万 八廿九 「おそちく挙のくへのろれなのろれことあれやれぐ紀もさぬ 四 五十二 山鳥こそハ挙向よ嬬よひさこへ 夫 十八 後成 「竜田やた内山をこえこせバやさとにてろりとこのをにて

と 男。マスラヲ 賤ノヲ サツヲノ類別出ス 新六 二 知家 「まろのをハーけるいなバさみだれよこれなをこそ田まひろーん 医 廿九 ふろ三海のひもろにちみろ「よへ人ぢ「いなーれや山田もをのろかにてねねよのんをとりくよへ宮ましひくをのろこひおろをーー 日 卅 隆經朝臣 家卅合 「まろのをハーけるいなバさみだれよこれなをこそ

と 緒 万 二十二 東人のぐぐのろそろの為れをにも妹ぶにのろにけるなそ の緒いろへて吾にせん 新古 三 彩表 十九 をつ竿れさろみのをよりて彼のこころにけるうん 新六 三 彩表 十九 をつ竿れさろみのをよりて彼のこころにけるうん

と 苧 万 十二 「楮麻の苧原の下草 日 十八 「そめぐぶとけよろ 和名抄 十四 二麻苧説文云麻 和名 阿泉屬也爾雅注云泉 和名介麻無字名也周礼注云苧 和名加麻屬也而細者也

と ○此小の字 こころ をとる訓やり其差別のおれこに題目を出を各假字の順を追ひて尋ねみべーー 小手巻 小車 小樹 小舟 小衾 是ハコブスマ ヨメリ 小社

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

と 尾 和名抄 十八 三 和名手鳥獣尾長也 新六 二カ所 一云砂の山九山をこのへたるところのそれとなくこもん

未考 「世よ知てつるんどりハどろ長のいそ九めまにまいるまろ

とい ○をもて同じ吾ろ寸ゑ 枕 七十三 ものいふとでみをとゝ

けり清とい此君にそとひさゝとき〳〵て云〳〵 玉くげ 十三 〳〵

とい〳〵 宇治拾 八十七 いろめ一度ハをゞきやとひけれバいゞハけるくゝ

〳〵そ 柴月名義 いそでひつゝハナのゑぞそれハかさゞりをまくゝとゝ

ろくいさろ不ゑろ心ろ〳〵みえさせろよ

とりや やろう木 九十二 常陸の前司どの〳〵娘君の初瀬の比寺よ

ろろ〳〵とにとやゞ〳〵人ゑりとえ〳〵いで

さろもち 大地 非代紀 廿三 果有大地頭尾各有八岐

とろのへ きろの鏡。とろのうミのことをの老ることろ〳〵。漢國の故ろえ

のとみの気くろうえげとうみてこひく 袖中抄 土異苑云山鶏愛其毛羽映水則舞魏武帝時南方献之公子

蒼舒令人取大鏡着其前山鶏鑒形而舞不止

一のとうと 夫 廿七 よゝ人〳〵 万 五廿二 山ろのとろのとろのろ

夫 日大百害頭脳 山ぐろのとろとのぐみ けれどもゝ〳〵ゑりにれいろれろ 日 日 家座 山ろのとろとの秋の

まゑぐみろぐ九夜みていつゑ月み

一のとぐと 夫 廿七 万代 仲実教月 やゑぐろのとろのろとろのろとの

衣 とゝめよろゝれてぞれり山ぐろのとろのとがとのろ九ろまろ 日 日 後多初院

とれ 伯母叔母 父の妹妹 遍母と倶ぞべろゞず。今来ぞろに

り糸絛が新も今左ま附ゑ 和名抄 二十三 父之姉妹為姑一云阿叔毋作母和名乎彼今按父之姉也 袖中抄 姑名

四十九

抄云昔人の姓を子ゝして年来やゝろひけろ毋のとバ年老て云〳〵 散本 下十九

後拾 雑四 義忠朝臣ものいひける女のめひなる女に又ひこうり移りけるをさゝて赤染

まことやをばを山の月ハろよもさゝゝろとれもみひろ祖母 紙。大和物語にそれをゝ

をそろり 終 。仲ノ語未期ノコヲ 拾 雑下 こその秋娘よおくられて云〳〵さハ秋のをそりなりろり 狭 三上 三十 此人の終りにあ

ゞ〳〵そゞのちろひとのりの毋さゝとをりをまろぞろれ〳〵九 千 哀寂然 「ゝされずとをり紀くこそろれ

ゑれさてもろれハなぐさま枕ども 新後 雑下 深親長切臣多まろりにけろ時をりろぐれぬろ〳〵九とて云〳〵 夫

冊 源空 極楽へつゝめてとくと出たゞバみのをろりにハまおりつ祖母ゑん 自 常不まろひて作りけろゞと面白く作りけれバ 「をそろ 天皇 元 令やさ

をそろりとろ 国ぶり 中七二 れおいまろちゞみれをりとり作ろ

さゞ実忠朝臣のうへをゑんえちゞ十作りゝ〳〵バ 新勅 十 人数 伊勢の山ふみふりとにてをそろりろ作りろるに行基 宇治拾

四十二いろ〳〵九ひゞりになりて云ゝいゝとくをりとりてこそろせにをれ

をそろり 終 。ハジヲハリ 四時ノヲハリ 新六 光俊 「くれいてぬとゝ

ろる

をそま 尾花 万 八卅六 萩の花をハなろゞくゑをてゝこのろろ

ゝれ人のゝまたろろをバないつゝ妹がゑ松ゝせん 形続古 秋上 後承拾 「うちなひく入ろのをそゑうのみそそ

夕やゑまろふまのゝろゝゞせ 和泉式ア集 上のゞゝれバをゑうのおもひまゑれゆくゞにたりぞそれにける

をそみろくれ 尾花ぐれ 夫 廿二 文安百首 親房々 「あさちのゝ尾ぞゑがくれにろのこゆるもゞびや康のふるゝ

なろゝん

とりみのげ 尾花ゑ毛 馬ノ毛ゝ 猫太 駒迎 「せさのとに尾なゑあゞげゝゑろゑおかさられこまをひくに

をなべた 新六 六知家 「今はまこのべのをなきのそるふみこそぬれやつひくのあた 日 行末「けふ
まこをまのをこそたつみまをそてかべのわこなれりをやそみくん

をなせくる 男 菱形 祝詞 吉祥於遠 廿作男菱形以加之 十州記

をへ 竟 祝詞 絲綿竟奉 万 二十九 「天地とくもたをんとおりひつ
妻のうちのこのくをへ物のそをみさをりおきつくあそふにうあくん 土左 例のるどもこそるーをて

をくるひ 後 表四 をくくひおんくろまうでこーかど 「うつせみ」十をくくひ

をもひ 万 十七十三 「山のうひそこともみそをそをうひもねのもをふもまをのふれば

をとめ 万 四十五 をくくーの春そのーくり 「をとめ」廿五をくくーしばうくうくハ 「てをん」三州く
あやーねこをきみんーおうをとくーの秋もをく 万 四五十八 「前年のさねつくくりてくくひくをそふれぐをそも妹に
ねひくをね 夫 卅六三也出 竹先 さをくくーのきさくねの十日ごろに

をくり ○媒鳥 和名抄 十五六 媒鳥文選射雉賦注云少養雉子至長狎人能招引野雉者謂之媒師說子度利
万葉の記 廿六 雲雀のわーと鳥これをくをいけてをくりにてをくりバおくりくのをも出ぬべーとおもひおれてをおくり

拾 物名 さーのをくり雄鳥 すゆく 「川岸のをくりおるべきかわーバ云ー

をどる 躍 宇鏡 踉蹌乎止留 三代実録 一四騰躍止利加理超天 万 五四十 「さちをくり足すりさけびみーー

あやめ 拾 物名 すゆく 「川ぎーのをくりおるべきかあーバうねにーにせぬ方ハるげつべーー 枕 二五ーハべの云ーの
やーーうをくりてありくくものぐのの云ーいくーく長ざとみ法師ねどの 平家 五廿一をくりあがりくそやける
二四のこもいくよくーねぬのちさにをくりありねてもさぐるをくうするも

をとこ 男 ○たぐ男女のーく 但男女の道男女の中にいくり普通にハヲノコといくり 神代紀 上三所以成此男女

をとこ 男 ○元服をいみ 平家 二廿三 あハれ汝七才にをーバ男まあーて君へまをうーせんとそおもひーに
男 ○男の子をいふ又ヲノコともいくり 落のくぼ 廿五おれをねおれぐをの四男の十バうなるせちまおれりろうまみ

をとこ 男柱 ちの手家 八方治橋の男そーうをこそてまとりて今もをーますたくひくり 新撰字鏡 幢柄
橋梁之左右之柱学止古柱

をとこ 男方 万葉集 廿五 ねあみどにても男方のあそびにまどりをくくひ

をとこかけ 男影 浜まの 三十三にねうくるハこそれハうりを男ぐびにハえをひ

をとこたなう 男踏歌 ○正月十四日ニアリ 「をとこ」ーハ男ぐうあり 年中行事分書 追儺条 負世 「このとおく
あすさーをめうをめうをさーのりのーうねに月来に右近衛の兵舎ハ正月十四日男追儺のるにてねるべーハ此ねおれ
ねるハ女追儺ハ十六日之大ざ数の柱士れまうくものうこみをめーて年のハじめ祝の酒を飲りて舞をまのせーまき
ねるこ

をとこつひ 男使 ○卯月上申日之 公事根源 平野祭延暦に此神社を造立ありて負観にかの祭礼を始行ある
上々午肉ねひふ云ーー男使とハ兵勅使のまこ 裕 賀をじめて平野祭に男使そしーーとね。今按るに春日祭に
も此平野祭にも男女の四使ありて春日祭の八男をふ祭の使といひ女のとバ女使といへり仍て思ふに平野祭の男

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

使をも祭の使といそぐ女のをも女使といひ春日の男の使をも男使といふべき也可考

ととさわや 男親 秩 三中廿四

ととて 男牛 ○漢字をいふ 玉ゆづり 中十八 男のたまふことをそくへ〳〵とかきてれたる本をこそ八男よもや女よもあらじやまめれ 同 四十七 男よまるるちが紀よくをそくへてかきつ〳〵女よまでかきつ〳〵つぶに書つぶるるこそ大かたよくてつまさにこそ

ととこのるじ 男あるじ ○男の主人をいふ 宇治拾 二十 男ひとりととこのるじ

ととさろう 男君 山家抄紀 一 飫肚寛博謹慎

ととなみ 男君 為くみ 三 男君のみまへにぐに

ととこしいう 男主 枕 二四にくさ物 大方家の男主あるじでうろ〳〵いふところ〳〵

ととこ 男繪 ○男の形をかきたる画をいふ 栄根合 廿 かーうるせめ

ととり 男文字 土左 かのくに人ひとりまでうかなるをとりてあの国つくる人よりひきせられぬをやがてそうろんとてとりつたへたるなんめでたき 同 此筑紫のめーのびて男をとりてかきて

ととこと 男をいふ 俗に男をこーろくことをいふ也同〳〵 大和 四廿 くに男をとりてありとこそ

ととめ ○少女をいふ 但文章には天女五節の舞姫などのかたちは女とのみかけり 古事記 上三 妾賀賣又 女人 卜糸セリ 神代紀 上四 少女 姓氏家系等略 五一書 川上の中つくもむらに茅ひさびつ林にもりるところをもめて 同 日卅 山のべのいせをみがてり非風のいせの處女らがひさつるぎ 同 四十五 をもめーがそでふる山のこずゑ紀のひさ〳〵紀

四ノ卅一

時ゆわかひさるれハ 拾 賀 元輔 うぐひすをきのそてとこさみそこんをめのそもりーをめのすぐさをおがーぞ 万 九 多人ーもう 夫 卅五 ーさみをもつ松浦のさ〳〵ひめこそのあまをもめても 夫 卅五 ーさ人きびーを まろあさてろ行ーをきしのあづまとのをとそれあみな 同一四 光行 のれの外さでみ白をとりつつをめがそでぞみる 和名抄 二六 小女 和名手童女同上米

ととめを さるさ 五 をめこがりとおもへハ棒バのをとをろーみ山のさごろをの久ーさ代ろおひそめそ紀 同 四 永久四年百首 妓女 家使之 ーをめこそ被みのあびくとこそ ゆみつくるそ紀 同 四 五集 花山院 ーをのえにすらん 同 四 更衣 ちろゆきにさ色せいををそをめてをでのそ

ととひめ ○ヲトメ ニ同じ 夫 十八 ろり君とのひろにこうるあまろとめのまひのすぐと

ととうび ○そめすさみにてをろのみるまひせとうふ ーをこをめさびすとかく私をそめくにまろーをこ 政事要略 ーをめをそめさびすもかく 夫 十八 知友 くものうへにあまるひみのさーろ〳〵ーをめさびをきとーのへにあまるひみのさーろ〳〵ーをめさびすもいそみろろ

ととぢ 伯叔父 ○雲井ノ人ノ兄弟ノ次子ノ名ニヲヂヲ 幼 廿一 之兄曰世父曰伯父曰世叔 和名抄 二十三 伯父釋名云父之兄曰世父曰伯父曰世叔 父第 神代紀 下九 老翁此云烏膩 催馬楽 奥山 おく山にほんをやとぢこそ

ととう 遠 ○とく遠をいふ 伊七集 廿三 六帖 三 浦 初石 玄一 みくまのーるる 古別 貫之 下十二 白雲の八重にさるるをちにてもおもひ人はこころへだつる あり 十三 そるる

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』　請求記号 837-79
ガラス使用

うづひしゝて 雅言 初 右の大殿おもや水ハ川よりをちよりくる人のあしおとしてわれとうまくいりくれバ

とち 遠。以前ノ心ニ 拾 賀 賞之 十三 六帖 「花のみやまもとちなバ

とちぢと 越度 十川抄 二廿六越ぬきさることにてさしもぢかりあるまじきことなるべしあやまちくるまれいつ

とちとり ○宣長云 ヂチとハ初めのてにくることなり むしもさゝをもちゆやもこれハ若くへてことなり 同 十七 鷲木 「うくひすのとちとりつゝ

鳴くなれバ 万 二十四 「大ぬしをまちとりつゝへのまの花 まちかてやいそんちりぬをちらさのへのまの花を

とちとりびと 遠方人 古 狭衣 「とちとりびとのそと 後 秋 「人しれずとちとりびとの天のとりことひさくとをやをくひこゝろくもまを 万 十 廿六 「まちー秋なれど

とぢるー ○愚按 雄略紀 九 舎人性懦弱 行元 八 舟のりてころ殺してその首のエをわるとや

くと問ふに舟人云こゝやしるきりくひてさゝろわざとをちかさ 舟人らも あるゝゝえーらでくれぶーて 続紀 廿二 此天日嗣高座之業 手拙劣朕 朱 被賜 同 三十 四十五 誤手違 奈良 古事記 下卅三 おもやさく 表遍那美許曾 伝足石歌 手違奈伎夜和礼尓於止礼曲 又袂 欽明紀 齧骸る

とちとり 遠迫 万 二四十二 彼此之島ハおもひけー 古 春上 「とちとりぶこゝろる 後 雑二 大和物語 「をちこちのくれちろ山ざと

あさまがけよゝりきをへのこやハとがめあ 新古二 あ歌 「そゝぬてそ月いるべきをちこちに をゝとめの見ぞ

のこる 夫 「をちこちの弁発月よあけれバひとゝそみゆる

とり 居 伊物 大段 文ばかり妻にれしいれて男やなぐひをおひてとまりぬれバ夫に心やひとり 新古 廿一段 云ゝといひてなりあそう

おきてもねバ一人夫に心やひとり 新古 廿一段 ゝゝ 廿一 ゝをいきさるゝぐ

同 六十五段 あるにもあらぬ男をうらぐしてくらひとり 夕ぐれ 九 人のうけひろめてぐしてぐるおぐこ河ぐ

りのこのハこのまうおがやるものをおもひとり 夕ぐれ 廿一 これうらぐしをすハさみひろんやとてをゝめ

万 十八 十三 「とり 居 枕 七十二 猿のやうにいつゐてをゝもれうー 「とり 居 古 バイカイ 「こひしゝをうさもりこゝそ

こひそれをれぐるゐくちくる 万 十九 四十七 「あゝしゐ年のくゝめるおもふくちくひれてそれバうれしーくるかうの

同 廿六 「谷ちく水ハそれぐもぐぶくて 同 二十一云 家居麻之手 同 廿四 「ゐをる時にとるすゝしまべにくらして

とり 析 ○ 「とりー 「とりー 「とりー 「とりー 別よ岁と 枕 十二 初のこぐうーのいぐるは

れハ 初つ何 廿七 さゝバ此初のゐうーろゝのなるゐると 同 九 なくてぞとハのるれにやとみえり 「とゝゝ 十三 とゐ

らんれをもちんをざみをも 「まひ 十四 いこゝろれるこれをひるひて

とり 圖檻 つれゝ 百廿一段 ゆぐのハ檻(ヲリ)にこめくちりをさゝれ 淮南子主術訓 養虎豹犀象者為之圖檻 著艸集

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』　請求記号 837-79

ガラス使用

廿卅二 此蛇くまこのをりのすくにすでにをえぬ俳のをりハおそ老木を左に折まく〳〵あるおのにて待るき此蛇をり
のそがきまをり此とさし入てのまんとするをくまこ蛇のひろり下五六寸ばかりをさけてむだくつかまて分りつゝく
つかまれて蛇をりをひしく〳〵と巻けるが〳〵ぐつまつゝくつかまれてをりの麁のうつやぶれて一示へをりよ老くすぞう
にをりにをり

をりにく 詩大雅公劉篇 執豕于牢酌之用匏

をりはへ ○ 契ハ云 をりくぶ 一四十一 狩もよろしうふれらしわにくも見え待るるとのへば 有ハへてに心通へり 時延之時長くでくすといへる詞之同もおうらど鳴といへり 古 一恋
あけるてハ蝉のをりハへおこそくしるハなこるのかえこぞこれ 貫之 六帖 新古 神祇 川やしろしのにをりハへ
ふきてころもいるをかせなう七日ひざきん 奥同 三 六帖 三 続後拾 雑中 白波まをりハへあまのこぐ子は八重にの
ね国 みちぬめりけるぞ ろ国 古 雑下 大和物語 五 こがこそきゆまつけをりかるこうたとろくるの山にをりハへてなく 伊勢集
れをのこぞうく国
廿二 後 恋 をりハへてちむぬへちり れりこぞすしげきなげかのねく まみて ぞとに国 古 恋 後 同 あしひきの山をこ
後 こゑをぞりハへてこれらまさるとぬそのをぞなく 続後 恋 保家卿 をりハかえ至ハをりくなおくらし なくるおせとにすゑさ
ばもおれを

をりく 折く きりつぼ 四 さるべきおあそびのをりく何事にも女あるすのうぐまハ さかき 廿五 うゝめいと
おかふくまなうしんく心あがりえゆるおくまゆりしを 同 廿六 山樵のかさかなるさまをりくに何ゝれハみけよ
なでしこの茶 同 卅二 ときまず花をりくまえけてるるこそ物しおすなれ

をりをり よこよこ 卅二 あどりハさてめくれずゆるおりく時く れのひるぬぞうりの心にてハ よこ笛 十九 あの
つひでにみのうへうしハおうゝのよしづきてわらしうらん侍りし 竹川 廿六 物あそれたるおうゝにてをり
てみのよ かげろふ 四十二 うゝへハおりひあしうおうゝろと見えして

をりへ 夜 二四 年ノ一ヲ 高砂をきうりへしふそさまへバ 万 十三 十二 白きへのそでをりかへし ふれど
妹りすがうの夢にしえゆる 同 十三 十五 吾ころもでをりかへしひとりしぬれバ

をりかみ 折紙 古今栄雅抄 下 崇徳院讃列にしてちくれさせあひて後の侍なりける人の老より○てゝへられて○る
ともあんありしとてをりかみにも宸筆なりけるものをとつくれくるれなりしなり 玉葉 雑四 信実朝臣 ○に
○をりかみにて宮家卿の許へさしれくとえ侍りける歌

をりくぐへぬ 千載 哀 顕昭 夏衣をりそのしくくとつけむけバおさぐべる萩が花ずり 夫 二十 上 道崇 久安百首
さらし山猫の雲のこきえぬまハをりくぐへてなるなくぞこゝる

をりさきぬ さてこそ 廿三 祥のしらべハ太と今め花くるあの声きれバさうくもとめる月にぞ○○○
あかでバ

をりかけ あげまき 五十 姫ぎみもわうれしく花のひかこえあよに

をりまつ 折松 葉和抄 上九 下侍ゞ注 如折松此所也 うらつた 三 をり松おこおくしうろみくどにおさへてさし
しぞおてとすられバ○今本箭火巻に打まろと侍るハうつしあやまれるを 夫 十六 宝家四季百首 冬夜 いとづれに
をりまつくおてみけし夜も松九重のうちぞこゑひし花 弁内侍日記 上 うへのきのでども殿上のをり松めしけれども
つまこるよしやけれバひろ庇の北むおてかれさる萩の枝などをりまろおせられけるとぞいとやさしく
て弁内侍 焚かれのふる枝の萩のをり松ハかえいつるもるのさめしくこそきこれ 同 下 殿上人のをり松ともすらる 公事根元
内侍名寄し出居のまへに大松にをり松せきす女孺これをつとむ

をりふし 折節 さかき ○ 折ふしのいくく心えて折しなどバかりハ 同 十二 をりふまし人よぶのたびごとく
にもまめくとにも

をりふせ 折卧 新古 旅 まへしらず 秋風のいせのさま荻をりふせてこひねやすらん何くさまくらに 万 四四

をりこと 折琴 古史記 いとやおうをり琴つきひきなり

をりけ 柏木 廿二 打あまりぶせうへあぶれにもありしるなく うつ姫 廿三 打ねしく寄り侍りに分れどく

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

[illegible]紀 十六 そりぐ〜うちするさまにまりつきうちもろ人もさに打あげなやみふるをゆ

そりやすも 三とつく〜 廿一打〜もかの吸ふの人とゞのの伽のうたてつくうちもろを 竹川 十八打〜を例のせわばほの君九ばざう〜に来りけるを

そりゆつ 折櫃 林逍 三 鴨雷神祭一座云〜折櫃四合 拾 四十一雪山ノ体ノ大きなるをりひつをともせてこれに白うんぶひさるのいれてもてこ 夫 廿三 西行 そりひつ そりひつぐ 廿九 其日のわ前のをりひつ物。往折よへたるうの之

そりひつぐ 折過 三のり 十カ あそれをもおもてぐ〜もちぬ出にて こさ〜をさり

そる 居 ○居ノ所ニ附ス

そる 折 夫 五 貫之 きミがためとがとるそのみ八もる年をくるよさけのんちく〜こさまをべくきりぐ 万物 十死 本の枝などのそもをいくうそてあり 古 ぬれつぐ〜ひてをりつ 同 をりつれバぐさにけり

そる 折 ○假ニ又 波八物をそりうへそさまにとゆれバをりをりてう 百 七十五 けんもち仲つ玉傑八をゝ多くの八重をるぐうへにぶれてあん 回 廿五 長分 白波の八重をるぐうへにぶれてや枝をゝ〜ん 中務 廿三 白浪のをるうみぐうへに云〜 重之 十四 吹風に色立まさる菱ゐミ八岩にうつろひぬるふちのそる浪さんそりそ更るえてをりうつのそ〜のまみ〜さけるうの色 三 重之 一きゝ〜ちめぐるる 六帖 六下 貫之 水にきへくやくるとゝろうり池の菱なこをりつぐみる 忠見 土 拾 玄 前順 なまくそ〜むぐ〜ぬ〜にハさ〜もやぢのくるそこにうつれバ波そをりけるる 古 三 ゝろ死のくそゝろ〜〜いそみつむめぎ〜めゝもみ仲にとれをゝ。 重之 十六 もゝうにくんとゝへてやりそれどむ〜までに八波よりへ〜ぐ

そる ○巻フル声 如ノ條ニ附ス

そる 百六十三 二ツ 四 二 目 十四 今暮ス 百 六廿四 よくる

そる 後 春下 ゝ〜人〜ぞ 伊勢 六帖 六下 続千 ゐがやどのうげもたのむ春のそる立りくゝる浪にをゝるなる

そる 六帖 三 白なミのよりくゝりてくゝ人八あまのうらてゝめづ〜ぬ〜 四条大納言 あまのすむ浦のいそやの仏にハなこのそるをやをりてよゝ〜ん

そる ○巻フル声 如ノ條ニ附ス

そる 百六十三 二ツ 四 二 目 十四 今暮ス 百 六廿四 よくる

そる 回 四十四 ゝまされバ君ゐべきものにハさきにハ死さ死をり 同 ゝりも君ハ死さ死年遠里。ゝりく花のさりそるるとハ竹ゆりされど中つせの人のまちひさる河なれバこゝにあくべ死ねんぐ〜のべぐ 百 一十二 ゝる山ハうゐびをゝ〜ゝみるゝ〜とおあ〜ゝひ死非代より云〜

そる 陸 夫 廿五 櫨修正公羽 ゐるゝゝりてもくく人ハやこのつとに伯をるゝ〜ん

そる 同 暑ス 圀の亀 圀生ノ稲 閑ゴ三 別ニ出ス

そるバ 小川 初六三 衣笠 松のブ〜ゝきゝ〜にをてる山あの末ハ小川になりにけるる 月清集 上 りそり 経

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79

ガラス使用

りありてぞあんさうの小川のまハるみにまらせん

とぐべ 岡違 [新大] 大和歌「ふるさとをぐのまちちかりひしきの家がやをきりタはさひをぐの秋のころ風 [捨遺愚草] 中「おりてゆくさをちこちもち〳〵秀のとぐべせさとのみの月げ [あ一] 十三るゝれにれぢてこのごろれバ [玉葉] 雑一 後鳥羽院「おぐかれべ〳〵うみぞまとけをるをぐのそをくもタぐれ [同] 日吉家「いりけてて〳〵めのくさのゆきにあとをつくん [生三四] 上げさこれバあ〳〵あぢちこまむまでをぐべの秋にもねつかこ

とぐさまのぐさ [古] 物名 支則「みどりのこさねさうひ歩るかをりさまの花やまこつん [同] 墨俯のか「うりてをのとるまきてもらんかふうのれてをうにーまと。吉野の後土御門の本よるいひこうるぎみこふのるる本こそのみ乱かーそもりいこといへれくもひてる院にてうけがー契沖が説ないちちろ友ままれず六帖本にも出さず古今集より外にハまず或抄をとるさまの本説こわれーといへどさーたる説拠をーかのお作なるーとかうこれをこ

とぐろ 楓 [和名抄] 廿九楓一名樊和名手加豆良雨雅云有脂而香謂之楓

とぐろも 。拝をとるる佛神貴人にもス [神功紀] 十九籟致地ヲヲガトヨメリ [万葉] 廿一なかてくらいのぐろーとぞをがむる [夫] 十八加茂社百首 慈鏡「そろ寺のありさまなく幸さうとをむこひあるこう用のぐげ

附 とがみ [三代実録] 二十二修文徳天皇七〻日御斎會 [古] 雑下 そひてらのむろまろうくりてをうこゆるに伊勢 八十三段 む月をぐみてもろ〳〵んとふ野よまうでぐるに。泝二ツ日時ノコシ [土佐] やりての文とふこれをまてくをぐをり [同ゆぐり] 中七十五 右大将ふぢなかぐれてまうでさまひて大宮とぐ〳〵まりのん [狭] 三ノ上卅くろつつでに北条の山をぐ〳〵まろ〳〵んれ

心ぶーひてまろのぶろーたよ [幸五] 五師をさろ乃をぐてとろこび [玉ぐ] 廿五ぐ〳〵をとりさまをひさこそをぐ下四十三 昔七右をぐ〳〵よ故帥大納言殿をまれおぐーまろのぐに [散木] 岡の屋 [夫] 卅一 家集 西行「仏見をぐ岡のやれ〳〵ぐまら一日秋までゆきて前こころん

とぐや 小萱 [新勅] 秋上 恵円「めーハあれぐれと秋をけるまえるをやぐーこにうづをなく [新大] 一ノ本「のぐれバをがやぐ下ハうぐれて秋くれるにたりれけるる 同日「上ぐ風よられのーとがや遠ハて秋みーれるをよれさまろ一ものクまぐれをがやのこやみのぐれ

とぐり 岡生稲二 [夫] 十二カ条「おぐりまのくをろふれいる筵りでぐれバおにをろのぐまをくろ（つかくか）ひこもり

とぐろえ 岡越 [夫] 廿二 [新大] 二 倍実朝下「をろぐえのろをくるーふ川そひのみ子ろれこをゆきてめろ〳〵ん

とぐろも 岡見 [堀内]「こころまのおぐつろさんをろこすく梢をぐーもこをこ子ろる。岡見と八十二月廿日れ来集会をて本まにのぐり来れむひていりひぐこすろありこと

とぐ一 宇義 速字部 可咲見醜貝阿奈字加之 [ぐ一] 十五 これをうろをうこのもこひーのふちふ月ぶおぐーまろうーんくれまに [玄葉集] 廿七 中将をうーたをねんとて門そのく辰風のりこれろて

月宴 十九 ケぐこれぐをうーろんねまこいさろーのう女房さうおろうのくこるる [守治拾] 十四廿 茅とさろぐくを生ーのれバこれをそて文房ぐるこれをろにてあるろうくこそろくろんをどこつぐげるを

とぐ一 犯 。罪科ノ心之体ノ語 [花鳥] 大いまー（のふまをこ五さんの世のひくいふ世のをろく神仏あさろにまーまさおはこれへやのろくぞ〳〵 [守治拾] 四十ひ〳〵やに七ふぞろうのろ云〳〵ぐくそぐくのをろーをてろくく玄をまぐバあさまーゆーしまろく [夫] 廿一カ実朝ト一春日

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

とゞく 枕 [神代紀]下廿五 直冒風波来到海邊 [朗詠] 九月九日 菊為重陽冒雨開 [続紀] 廿九ノ二 向野天皇二年
五月丙午云々以氏作字是近冒姓侵用佛菩薩及賢聖之號毎經聞見不安于懐自今以後宜勿更然 [同] 廿七 をち
こちとらくなきけて [同] 四 これハいかなる罪をかくしてかくるゝしるしめにこそみすらん [とさ] 四十九 「八百万神もあはれと
おもふらんとおもふつみのそれとおもひければ [拾] 冬 僻凡の名に仏名の外 兼盛 「人ハみなさとしやもらんおもくれバとしのみ
つもるをとくらぞとれ [さころも] 五十五 秋院をおさへとかく思ひにたゆらかにはあぶ〜しけりしえあるを
あさく人のかゝりゆかしきをも
すのく

とゞまき 。契沖云草をうみて巻たるを巻子とよみこれを草環とはいへり [夫] 廿八 知家 「ミが魚八ォしめも
きみびがのあかさのそゞぎまし末のなぐれて [古] 雑上 「ワカ〜しくのしづのをだまきやしるしよもしきたるあんめん

とゝき [曽丹] 五月中 「さゞまくりかけてひきしめとゞめもながしや友のくるをまつよハ。是ハをさまし氏とゐ
てかいあくりかくるといひかけたるをや「いぐるさまを草玉といふをや

とゝまき 。枝ノ下枝ニ枝もある本なるべしといへり [狭]三 「谷ふところにそびえまし氏ハかれあれやおのかゝろの
くちてやこゑる [宗祇法師かとみん谷] 「いく山にこえまれまし氏のかげそみえけてかへぬ村のまぞなき [夫] 廿五 頼氏 をを
「つま木こる材がそぶまれおるくのこしてけりな家の衣系バ。是ちお衣のそ切りて繋とのこゝくごく衣系をそ切
りれこゝくるとるの心にやきて胡といへんをそ ‖ 多ゞきといへるをや [夫] 廿九 植切 光の生す人な按詞 「くちかぞれかひく
ふの山さうみるうとぞもし氏ハきる人きあ [円] 家隆 「つくば山ころそぶまきまきのまげくれど家ゆく旅のあつハさつかず
[日] 安嘉門院四条 「つくば山しげさあめぐみまのしさびハうちぞまさのをさきるやさうまし [円] 寄枝 名 為相 「我そこであ
さぞつくちんおく山まゝりそぞまれのしげきき木ハ

とゝけび
とれ 。折ル みづから自ら折れるさうにまがりてかくるゝし [神代紀]上廿二 雄誥 [古事記]上十五 伊都之男建蹈建而 [さころも] 十一 二条より洞院の大路をとれるさまにほどく

[こゝろさ] 二 五条の大路を西さまにとれるき
とれ 。[こてふ] 注 細流 情ヲ折ル心之 我ヲ折トイフニ同シ 是モ負ル心之 。[タぎり] 注 孟津 負ル心之 。今案ル二強ク争
フ人ノ相手ノ詞ニ従フヲ俗ニ折タナドイフガ如シ [こてふ] ハこその女房ともあげるも春のいろハえおとさその事まじかり
けりと氣にとれてこそえありけり [タぎり] 七十六 ようらくいひそめつとあしバ行かハとれてかしをかへりあへ
とれ 。枝ナドノ自ラ折タルニ同シ [玉かづら] 十 天下に目つぶれ足をとれのりとも 。以上 三ヲヲウ [ ] 共二本語ハ
なれハナルベシ
とれも 折葉 [夫] 十六 衣笠内大臣 「うづみふせを小柴のやよいしおがれてされハこそよりまさやぐる
とれく〜 依字さぐれバれの静に出しつ
とれさる [新六] 一 光俊 「あらしふくのとなる葉るのとれさへりやまくるみえぬまのあしひくる [後ひげ] 上 此春のう
きいかなりともでさくいろえまなる尾花をとれらかりすねく [こゝろそ] 此おのそるみもとえのゝとれきへりてきれ
くとみのひて [後ひげ] 下 仲ざこの給従所をんまゐひては階のおりくに舞せでとれさへりまよ
とれのくる 折残 [末つむ花] 七 をばいのくぐさとこしとれのこりくる
とれうる [弁内侍日記] 下 とれこぞれ子をまぬれにあしてまひかり
とれさ 折本二ヤ [夫] 卅六 为家 「成りく人あすの衣破ハこゝろせよたかくさがくれとれきさまこ
とれの 依字さぐれバれの新子生しつ
とゝそ 鳥之 [円] 十四 廿八 「鳥よの大手曽鳥のなきさてにもきまさめをとゝろくとぞあく [円] 四十四十 「あひみて八月
もへあくれるみといへバとゝろと家をおきふさんくも 。例とみえたちうりとつゝハ此義なるべし 此詞中世にハ用ひぞ
とゝそ 獺 [和名抄] 十八十五 獺 和名手曽 水獣恒居水中食魚為狼也唐韻云獺獱之別名也
とゞろき [著作] 十七廿三 かみの木の擶子髮をとづめ法師一人ハかしらおろし [宇治拾] 一二 かしらをそりとるる法師ど
[今昔物語] 法師のまとゝれあやしげなるが所ハとゞめにおいてそのえめのあるくとある折ふきたるが [發心] 一五

からうたをうちすんじつゝ…ふところ法師のきゝおけける 古今六帖 三 ゆらしきさきこえればからふねうきといふ所に

わびさる法師の 義経記 法師なれどもからうそくねばさうそくせられてわびたる云々

をんる 遠流 平家 五廿二 ぬすまれいてはなるほどをんるせられて伊豆の国へながされける

をんな ○男女の中をうけたる男は云ひ 女は云ひ おどろけり

をんなさだめ ○後世男の元服して 十訓抄 三 ふるき女がたなどは云ひ 女がたの命うへめまいりて 狭衣 廿一 女ちかたなどと云ふ

をんなになる 廿七とさ女たちの…手ぐるまへしれどもおりしつかえけるにあん女になるまでさにけると男になるといへるがごとく女の成長しころとのみ 玉かつら

をんなにて ○是は女くしけるとかしに行れの女なりしよりの心之 我はまた女をはやめたる旅よりも我が女になりての心にあらず 夕ぎり 六十四 女にてなどもちでぞ…とみてもなどうとこうさんと我はなるたびなおとなげん ○此下は我身女になりての心之 手ならひ 六十四 兵部卿宮ぞいとをじくれは…女にてなれつらうまつはばや くまんわかえ給ふ 東屋 八 女にて見まうまほし あげまき 廿三 つゞきつきのふるささま女にてはみきとてゝくなりんとまへひらおどてまりめんうしとめのめしたんちも行まなられて

附 **をんなかしは** ○我身女なるべきの心之 あげまき 九十四 うちかへりのしてるもみぐるしくはあれでけよくぬのさよげになまめうきさと女なるべくあらず 若菜 上十一 これ女ならばおなしそうならむおもむつびよらる ませう心うつりまんとわのかけりうぬ心あらひは見しよるも云々

をんなにて ○同じ源の此上なる 是は源と女になして我違なりさきよの心之 源氏 若紫 八 女にてこらんはわりしうぬべくへしれど是なりすなと云ひ 勢よりもはればかしうて女にて見ばやといろめきさまはうらにはおめかし

附 **をんなになして** 是も同じ心之 初秋 上十才かのえひとのみにもまうかとものみしなとしえなかある人ありまつ折えうまもかのこさみと女になしてかとくまうしく云々

をんなにて ○肝向かへを女にしくはかは同じ心なるよし此見るは男女の遊ぶ…みえるにあらだ只打見るにまなるべし 源氏 あかしの巻 四 院のおありさまは女にて見奉らまほし 花宴 廿九 わくあびのみてにつのは数をおこさせるべきまゝは歯のそてしくちてはのうちくろみて女ごのえるよりうつくしきは女にて見奉らまほしうやうやくあかり 四季物語 世のつぐわやの心ぐへかさらは紅葉めでさう眉みどりに女つくてえまはしうわかしきて

附 **をんなのえうらし** 狭衣 一上 卅九 さしむかひたるかひなたどのしろくうつくしげになるさま女にもえうらじりしくみえぬめ

をんなどころ 女所 夕ぎり 七十二 かくいはすなる女どころにてあとけなく方のるまかくひさうえのうちれ ○孟津 女どもうするゝ所なれば

をんなともだち 女友達 ○友だちの女をいふ 女どちとおほさるや 古 雑下 女友だちとものがたりしてわかれてのちにつかはしける こちのく 後 春下 友まぜうそてつかはしける女ともだちのもとより云々 こそめの君 推香親妻 大江玉渕朝臣女 和泉式部集 上 かたさらへ女と 同 雑一 女ともだちのかくれにつくしよりきしべしを心ざまとをそてものよにありんりぎりはつるそれにとかひしがまうせぬれ

をんながた 女方 伊勢物語 六十五段 男女方ゆるされたりければ女のはるる所にきてむかひさりければ まるるはにつく女方もいやしうやうくるひてるまのおもひをなんしける 夕ぎり 十七 いりみれど つるる 下 九十七 いまひとつ方かいふかと又にもてうりうさてつるべき女方にぞにこまおもひおくれ給ふ このり 廿三 我なかくこものかくにまれしく見えしまくるくすわくかるまじやはしに女方にぞわりまきを さく木 三 女方も心あはてずし

をんなかづら 和名抄 廿六 草 芎藭 本草云芎藭一名香草也 加豆良 唐韻曰芎藭苗曰蘼蕪

をんなかうぶり 宇津保 下 四十

をんながく 女楽 若菜 下廿七 此人々のさう琵琶のねもなはせて女がくころみさせん

をんなづかひ 女便 宇津保 上三十 云々さてまんひとう給ふさそうしなどをとくそ女ぶようにはそれはならんぞ

さんぐうつかひ 女使 [金葉] 賀 新改元大斎中将にて侍りけるころ春日祭使に下りけるに周防内侍女使にてくだりけるに [公通根源] 春日祭り上申日これや二月十一月行ふ先未日使ふ近衛中将かねつも 又云當日に内侍むふ [玉葉] 雑一云〜女使ぜー世のうきをぐいひて云〜従三位重子 [尺素往来] 今日賀茂祭云〜女使之条毛車

さんぐうのつかひ 囲ゆづり 二七十 女のうきひ一くるま

さんぐうのくるま 女の道 [ぐうろ] 六 女のみちまぐひかふ八人の出門にもみこさしめーどきありそれど

さんぐうのくるま 女車 [あげまき] 四十 こやーふる女車のさまにてくろへいりあるに

さんぐうのくるま 女文 。女どちこうろをとみえ [ちぎえ] 廿一すんなをそーうろをてさきまで見どちれ

女房になりぬるをさしてうきさしてくめーう

さんなご 女子 女子ノ所ニ附ス

さんなごころ 女心地 [こきつく] 十六 女ごころてうぎりうくうぎりうくうつくせバ

さんなで 女手 。猶男手の下に [うつ仁] のをおーくり [おうぐえ] 十四 仁仏 まをいこうろ兄つくーあふ [大鏡] 二大政にはおーくあ女はうろ兄つくーあふ

さんなものがたり [伊物] うるおのこぎーの女人のめにてあんあーとこーて女ふるーにくーけーとー色よさーでハのまーとういひれバ [枕] 十三 さうし兄の下司の家の女あるーで云れこる者そひーもおくー

さんなやー [ちくさ] 十 おうびれて女ーとこれだあまりさけにひきこめられて [さうし兄] 廿一ものがたりあれいとよ似ていまいくーあまめりーう女ーし兄不ときくふうり [のるき] 十三 いとおかしげに女ーくうなまめいこるけさひーふうさ女ーくなうびたるうへをくや [ゆぎり] 十三 いとあてに

さんなる女 女繪 [あげまき] 六十七 おうげまき女ふどりの表ぜる男のそまかあぐこさーぜ [びうん] 四女画

おうーくうさたるがあうれバとりてみくろうのてきうりみれバ勅筆とおぼしくの松とまきりくる女ありそこに紙のそーにうしてうくれーふうおうーく [古序]

さんぐく 遠画 [平家五十] 遠画へながれのふに

さんぐ [守伯拾] 四十六 まぢ筆がありぞうひのうーん とうこうせめひれバ別のくれいバ民教大師五位の童

あうれにどこそーりやれといひうひれバをうこいひてにげよりとくがめれバ我八人のうおーまそーらめにこぞ今武正府生のあーれいるるといひあせつるにおーを似あうびさてハりもうのおそするりけれをそつれをうこいひてまびにうり

さんぐく [守伯拾] 四十その切りんとまる足の上にのぎりて此足のくそうにもが足をきれ往生をとげさ相あうものーあきーれてハいそくうこんやをうくとめれけれバ

さんぐる 女 [吉] 序 たとへバ珍まうけるうあをそていどに心をうごく

さんぐるこ 女子 [雑要抄] 四 天王與一夜而服遂生女子 [続紀] 七 女子能継余後在止毋 敬令副宣旨 [とうむく兒] 三十八ばうるそあーんとみて云〜そうり来る女子あまさみえつまどもさーんくおりみ女子をまづくなおもひさごをおもーさんてよいうくいかべ兒ぎうりうう [こう楠] 四 人にまさ

[ミクそれ兒] 八四五のにくうどおそ女子をこそ [寄中] えそハ何のおいくあーん [寄中] おにがーらが女子をこそ

とーんでんのお方とをのこぶいこどおりひゆえのひひる女子八只所なおりみありしこのものそけハ四五の此方いにこぶれーもろれける [回] 三十九 もんでんの上とハ三の君をでゆえけるにうとちも心ま

やんでこうれもひとそ父おくぶ云〜女子ハ所をこそとみてとひ

[附] [もんなこ] 女子 [土左] 此家にてせれーをんなごのめろうもうへ

[もの] 一。掌ノ上ニ [石] 八廿九 [れ] 〜ぎとをくをの上れうのそうをけうも兒とあれやをくがきまさめ [回] 十九

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79

ガラス使用

土「くものさかなかひてしあしひきの峯上のさくらちくさきにけり 新古 春下 経信「山ふかみ杉のむらたちみえぬまでをのへの風にちるはなのちるゝる 尾上ノ桜 尾上ノ月 などいへる類をもよくきこゆべし

をの 斧 万 十四廿二「さの山にうつや斧をのとほどほにねりくろくかれゆけばみえつる

をのわらは 男の童 土左 年九つばかりなるをのわらは年よりはをさなくぞある たづの村き イモ ヤモメノ所ニ出ス 因 廿二 西行「しめめて雀弓はるをのわらはあそく

をのつまづき 斧のつまづき 水鏡 上 文武 六月に右門大外の仏像をつくりたまへりしそ 仏師のよからんをもとめしにそのへなりし冬云々 千葉の木姿に一人の侍ありて此手の仏をつくりたりし人化人之又さらにべらずくといひし化仏師にあひのみよ形をのつまづきあるべしとき画師にあひのみよといぞうちものあやまちなきらん云々

をのゝく 方丈記 ちかにつけておそれをのゝく 著聞 三六 又ねさわらん姿におほしやうにみてたりおそれをのゝきて云々

をのゝえ 斧のえ 伊勢集 ごらちさる木をのくつぞうれにはあはずくよくへりみすぐれみる人のなき 古 雑下 友則「ふるさとはみしごともあらず斧のえのくちしところぞこひしかりける 後 哀三 女「かくしつゝよのかくさくさも山なたえて云ゆくよろうかめらんをのえくちし所のみけると 拾遺 兼孝 上 おなれや入にし人の吉つれもせぬ 拾遺 懐旧 公実「をのえのくちし木の山人のかへるを世にはなるくもりけん 三文輔集「こさぶひく子日のまつのくちめやはいそをのえにさきてこのまん 六百番歌合 逢日 兼宗「をのえをくらくてや人のさとしえん ころ ことはをのへにつきにしといさをのえはくちにくさきん 後 賀「をのえのくちんかしらぶとさえみがよのつきんくぎりは うち心みよ 述異記 山ちかがゆくくるのなくる

をのこ 男 をのこご ノ八 儁語ノ女夫、男子 夕がほ ノ八 ダヾ軽ク常イフ男 玉かづら ノ八 男ノ子トイフ也 娘二 上十二 信安郡有石室山晉時王質伐木至見童子数人棊而歌質因聴之云々質起視斧柯爛盡既歸無時人

ムカヘテ タヾ男トイヘリ うつほ舟 ノ八 郎黨ドモ侍ドモノ所ニツカヘリ をくらぐ 九をのこのむれあそびけるつるそれのりちりくしさ世のわくめとおるべきもをのこどものあそびてぞひさく むかぐら 七 娘どものをのこどもれにつけてあらそぶをも出来て うつほ舟 十八 をのこどもはひるよりちららんあたらにかくるへてさゆしく 同 廿二 馬なるへての例のあらくなる七八人をのこどもわらく 因 十四 雅六 明孫法師「いの國にくさしらるをのこもそまでしらくみんとれよれのなやあらそぶ 同 卅 権僧正公朝「さひ川よやあそびきのこやくるそはへをあへわれかゝらのみや 桐如集「あかまりてすのなれあひそをのこくゃあけんみりぐのからひなのめけり 和名抄 二五 男丈夫也 和名乎乃古 園太暦 師々舞徳太男 東鑑 渋谷庄司重國郎従平太男行光郎従藤五男惣息泰村男 長門平泰 十五廿一 康定ハ雑色男ゟ宦官袋をみをせていひき つれぐ 百三段 又五郎男をど師とまるより外の才覚はなし 同 百八十四段 あれりし男をめしよせて 長門平泰 二 舎人男がかくりとさうり 同 八 京中のへれらりしきらせんとめすよとれり男をめしよせて 同 十五 中間男がくびにかけさゝる皮袋よりとり出して 万 四廿九「我衣を人にあきせそなびきする奈良の男のてにいるとも 兼久記 下 十三 挌動の源 八男出来テ

をのこゞくゝろ をとめ 四土 をのこはうしとそちりくりよせ侍しぬべ

をのこのこゝろし さこくの院 上 七 をのこのかつへもとのとをかうのあとはそんなき

をのこゞ 男子 をとめ 十五 をのこどにはわたくしまじをみあらくと 蜻蛉 ★をのこゞ三人ありみるに

をく 招 ○宣長云 云々いづれも招きすするを袁伎とよめり 万 十七 四十六「をくよしのそこにあければ 同 十九廿三 郭公ヲ待歌二「月たちし日よりをきつゝうちしぬびまてどきなかぬほとゝぎすかも 弥綱 下 風招(をき) 同上 招禱(をき) 因 十八 顕仲 家集「あるゆきされ友なれずすしるべしてさかどもみえずまねきつゝるる 同 廿行 家集「あかそゝこぬのそりをもとなど人のうひ人の声しきるこゝ ○ヲキトラジハ招キ得ザルナルベシや

をきゝくさ [illegible] 招餌 別ニ出ス

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

とぐるま 小車 夫 廿三 宝家 「雲かゝれるかくれのとぐるまにあや」 同 日 寂蓮 法師

「山街のお伝こゆるかくまにこゝろやりもるあらつれのあま」

とくろ 麻鞋 和名抄 十二廿三 麻鞋乎久豆以麻為之

とくい 夫 五 書母 「岡もみもあぐられにきりにうちて山のぐいをぐ〜とうちて云〜」 やどり本 六十 山のくさぐ〜くて柄のあやゝみえぬに

とぐれ ○宣長云カキクラスシ後ラスニアラズ後ラスハ 才 ノ部ニ奉タリ 毛詩 十五 六 「あるうみ さゝ〜ら こゝろのあらなれ あげまき 八十三 「ときくりの日ゝみえぬおく山はゝろとくすゝろにめ」

とくし 小柳 夫 廿二 万 石川女 「志ろのあまのめろ〜かやねいくまるこゝろ」 月 信実 新六 五 「あぢきなやゆふのうへまさにつげのをぐ〜ともるしらぬ」 同 日 女蔭内侍 「こゝろとゞ」

何よおきてう白雲のみのをぐ〜とさ〜てこそ〜ん 同 八 家隆 「つれづくとやまさでねめ〜ん 万 九廿七 「さゝをくハなそみろさ〜んくしげきつけのをぐ〜ともるれなそへ〜をぐ〜 をがごとなてるけきみと非やいさめ」

とやむ ○雨雪風ニモイフ俗語ト同ジ 未ノ 大木 「ノ寺ハ斧ノ音ノやむことやくつゝれ」

やむしくりのうぢこゝをゆく月のかげおそろあらし 同 廿九 永久四年百首 顕仲 「堅後 「ふる雨さゝもとやめやめとそのふみをすゝにせよさゝぎれのそら〜 中務集 「をやこもめ妹ーまろ〜ん 夫 八 家集 桂大納言実氏 「そのふるゆ志ゞ〜ハこゝやめまろ〜ん」

とやみ ○体ノ語 後 廿二 「をやこまでふれバ沢水のまさる〜ん」 高光 二 「ちゞ」

田ノ部十

むるをそ〜もれバやいく〜にやみゆくぐ〜ぶみろそうぐ〜ん あ一 三 「ぐれいの雨のきやこゝろくみろうて雨ハ降こゞ 同 日 あきまうく〜をゝこゝろのの〜ぶにやぐ〜ぞ」

くりぶにぐふみをすゝまろにせよさゝぎれのそら〜 中務集 「をやこもめ妹ーまろ〜ん」

めてさくハまことろ 六帖 二下 「あをこのろいろられバ白玉のきやまぬるのあがめとぞする」

ーをゝみあるれぐに 後拾 廿二 和泉式ノ 「一人にひきられてあるそでよこそ」

「きみさわりみろぐ〜ぐ〜ふゝめゝろ〜ふゝめのあ〜ふゝめか

とやまろ 小山田 新六 二 衣笠内大臣 「のまりや秋ちろ〜か山田のとさろくこゝろ」

とやろ 小社 夫 廿四 家集 後頼 「いのるとあ〜のとゝろくこゝろをもよくくらへ〜〜」 同 日 参百首 上西門院兵衛 「うゑあこゞろさればにいふをゝ〜ろゝおゝふ〜ぐにあ〜べ〜」

とり 桶 和名抄 十六五 桶和名乎計反水於井器也俗有大桶水菜桶腰桶等之名 こゝ治承 三

とげ 麻苟。さゝいう〜器ノ 万 十三 「をゝ〜ぐ麻苟にられこゝろみをとゝ金線柱奉伊勢神宮猶戈奉住吉神之類是也。契沖説ハ令に麻苟を水桶とうれこゝろ」

とつゝ麻苟ろりぐけたる名ぼそ〜用ひられたるの

とろら 米 万 十五八 「こひ〜ぬ神ハ神りゝ〜んとむさ〜の字家長がうるのの九三 米乎介 仮名 生山中故名山斛

とりのこもち 四季物語 十二月の段 「ひとの夜ハさけ〜のもちひつ」

のはなもちりれこそまろれば

とゐひ 和泉式ノ集 ひをのにひろうそむろひゐてみるにはろ」

にようこそ

さよ 終 あり 七 わのづゝをりあらひれバその罪をそ
さよ 苧生 百十一世一 楊麻の苧原のをゝゝき春ゝあれバ
茅生のどく
さゞちのこま 小班駒 袖中抄 「ゝちのくのさゞちのこまもの
り生ろ〳〵小班（ブチ）の駒とうつゝ 後拾 秋上 良暹法師 「あさ
こまの是ハ秋間の月のひげのうつろひさくきぎゝ
とゝのほりぬくゝ馬をひき〳〵私云ゝみちのくにさゞち
雑二 さゞゝ 「つゐたゝえてハれそそゝこちのくれをぶちの
るさぶちのこまのさわぐちてつゐみるくもこゝろ
さゞれ 小舟 右同 下二 漱（オキベ）破襖にハ表夫混つゝゝ 同
丙 十六廿六 夫舟にハ舟ひきそゝくうつくゝゐ ちのあゝをまよろ
さゝくら 尾袋 和名抄 十五二 尾韜俗云尾袋加以韜馬尾也
とよさ ○虹ノ一ヲイヘリ 夫 十九虹 高野にさゐりけろ〳〵ゑの山
まゝそろハーロをそろちてをゐさうれうつ〳〵ゑの山
とよさ 壬生二郎 上 「そゝさのさりゐの岡の竹のづゆをさ
奇特 「ゐまにゆくへまゐゝぞちのをゐのまどの寄だろゝて 夫 廿一 永笠肉大成 「ろろそめゐみゝ
えゞろゐゐろゝさのをゐのくゝのこひやろゝゝん 同 廿七 後九条肉大成 「春ろゝて秋くるゝひハ山ゞろのさゐさ
れろ〳〵ゑやぬくゝん 和名抄 十八三 戦斗不佐 李善曰戦栗危懼之間也
とさ ○アホウラシ 慮神記 二 水さまる云〳〵あゞろろ伊夜千古珥辞旦 古事記 二 表許トカケリ うつゐ三
ハかだろりのゞう心あれバうひゐくをこにこそわゐそめ 番ひ〳〵死 下十三 すべて只十が一さゝろ千ちゝひとゝ

なることゞめおろく〳〵ゐりを 伊勢 三 〳〵ろうてゐゞろく〳〵と打ゐさうゞひろひてをこなる心ちすれ
だ人ゝりとせぬとさ〳〵ゐられ 袋草紙 せセろゝゐろそゞ打ゐがうそもらくうゝろでゐゐにいとをこなるべ
一 **春ハるま** そゞ〳〵くゐそさんもくのかもんを八をこうろ
ど笑すに 字治拾 十三四 馬より落て死ゐと〳〵るを八をこうろ
ろ一四方をひきよろさとろうれ〳〵れゐよ **落くれ** 四をそろ人の打ゐ
ゞまと八打ゐへゞゐさくてハ又人を誘してさ分がろさ
者ろひろそろ〳〵酒よ引て物よそかるをろの子ナ条後陪しゐろ打ゐひちるべをゐくゐうれ
盛衰記 十八 其時一ゐゞゐさゞめゐ女房をそ
ゝと云ゐ物にゐたりんそ消息ゐるを
をこうろ〳〵ハさ〳〵ゞそれ〳〵をこの者しゐて又念珠うちー
にハられて又ゐとをこうろ 西東賦 往（ゆく）廷（ゆく） 著（ゆく） 六ハ 笈中にひ〳〵ものをけるが候にのこられ
ようむをそくろ〳〵ひけるうにこ上聖房ろ〳〵ひうて勝をさちくり大死に鳴呼をゐりて暴夜の
さゝさをまゐにろ
をこと 小琴 百 七廿二 ひざりゐさゐ玉の小琴のとろくゐ
とぐり ○古言梯にだこりとうさて大ろうの略心といふ
ありと宣長ゞいつるにうゞべー **長歌** 十二 まぐりてひ
あゐ 五 ろくのの一みにをごりちひ〳〵 **美のこきハ** 十五 此子ハこをおみー不ほてみー形ぐハいとさる
くあやまくにをごりてくろ〳〵ぐ **枕** 六ハ 七ハッでろうろをのこでのあいぎろうつきをごりさる声に
てさろひのくびつけのそどいいるけさひいとれろ
ろひよの中さりにをごりろ〳〵ひれバ **をとめ** 六つさろ〳〵ゐ心に
ぐ〳〵ろんとづひまるぐ〳〵ゐをそ。 **桃沙** ホコラハシキ〳〵
ゐくハー

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

とがむる 宇治拾遺 二廿八 此ごく男どもとがめあさけりて

とがまし うつほ 七 いろはぞをとがましけなるもこそとれかすに 夕がほ いよゝこときはけしさの まさるをとがまし気なる心ちとかつハつゝみのみこそあれ 東や 廿 いとうめくしくあるひにも猶さかハ 何ゆゑをとがましけれてあらん よもぎふ 十 此心どこの いとかしけなるくいとどとがましけにおもひて 枝ぐら くゆくにおもひみけこそとりかねものおほしけれどとがまし うらみちてさ今ハうひみしとおもひ うべきと そしひめ 一 いてける人でおひうゝぐみそみれどもぎりあきおもひていとをとがまし う人あろ かるへきすると云こ やどりき 五十二 まかろころのをとがましうあしかぞさし そぎ なのあきらうろふ くるあるん人とうらみてけしきぞそゝむんそをとがましくあるん つれ 百七十五段 うるりしき人ま忽ま 狂人となりてとがましく やどり木 四十五 いとちうしとおもひきうりつる腰のあるしにおもくハ心ぞろしう そえてやみゆるるれいのとがましの心ちとおもへど云こ ○俗ニイヘルトハサシタガヘニヤアラン

とがり ○身ノ誤リトイフ心 後ノ世ニイヘル怠状ノ怠ニ ○これも古言様にむこりとなきて行ひなさうの 男こととゝいへるはあるし うげろふ 二 おがしうみぬはありなのるびくよろんまてて今まで世にはゞるものとがめを るればさしにけるどとめしつ もとま 大 いひめてゝけばふをそうのとがりにみん侍る あ 四十二 ちそへてひがし しきんよもるひけるこのとがりぞとぞ 無名抄 上 よく疑しあひるり吾あしく心ぞえきるへるとくをとこらやに まうでそるうりといひてくろ候こさ 続世継 六廿 日比女のりくへはしのびてうかひ侍りつるをさうひのう ちふせんとやよしうけありてそのとがりやさんとてうんまゐりつるを侍りければ

とがり ○具ハゲダイ 男女ノ向ニハトダエノ心 又フサタノ心 よもぎふ 廿一 とし比ごろのとがりそろべきの世に そしゆるすらん あさひ 十六 心よりかうあきとこのりるど罪ゆるされぬべくきこえつけまひて うつほ 十三 院 なとの世しめさんるおるがそくらかれのとかへそハろゝめ うき舟 三 とそゆくて まがとこりにてハめて そてみなとおもひくしあひていよわ ながくゆきさるそすりず 仲哀紀 六 若百姓知之有懈怠(タユタリ)乎 まふぢ笑

九 志そくをさうしんべけれど六とぞともほゝれそくハおのづらさとりおそると 夕がほ 廿二 ことひしもさるうなそて めしにさんとこくりつるをにくしとおもかすめのう まつひ 廿三 六条わたりにさかれまさりのかあれバまいてあれさる やどハあはれにおがしをとてびながらあのうれぞまりあくりける 桐つぼ 十九 おかあさまつりごとハそとてしせめひ ぬべかなり

とこゆ ○病ノ快キヲイフ あふひ 十六 日ごろをとゝしとていろさまありつることちのにハかよいとうくうし げにおるを 古 玄五 うちそこあゆりけることろあひしりて侍りける人のとかぞ心ちをこうりて後とゝやしへうみ れバ 玉のむらぎく 十一 風の治ぶあそせめ日比さてぐるにさらそこたをせあハねバ 夕がほ 四十二 ふとおもくいつしひうれども こよみる名ごりのちぎをとゝりざまにみえのよ 保賢法眼集 そぶらふ人のことうりたまれ 衣の珠 一 今ハ水地 をとこせのへと

とこゆる ○巣云スカシ欺ク心之 神武紀 十一 盛設宴饗(トヨノアカリヲユツリテ)誘虜取之 景行紀 五 先誘(ヲコツルアサハキカ)麻剃之徒(トモガラヲ) 六帖 五 思煩(ヲモヒワヅラフ)あ さ人のとこうりさよのあやよさにうけひくこよのろくもあるる 宇治拾 二八 これまで司のみにありてさこづろそくまろん とおもひて 浜松物語 二 こあさにへりあひて姫君あそバしとこづりそくえみひて 夕ぎり 廿八 さまざにうのみを けしおきくをこづりとらんの心にてあざむきさやのへバ ちろ人や 四廿六

とこく ○動クニ 重之 十四 又こせしの君足高蜘のまひろれちらるが二三日さてとこくと さらがまのくものた その とこくる風とへのちよおそよなるべし

とこおと をこ言 ○ザレ言ナリ 承古つ 廿三 こぐのあそそのにしけん法の師ごにまくいくをこごとれのかひ あさそどもしらず

とごめく 和名抄 十九廿五 蠢無久女久貴動揺貌也 つれづれ 七十三段 そるのみぐとごめきそて人々人のそ ちごとにハあそび そくぶく 廿九 鼻のわりとごめきてうりあさと

とこめく ○ザレテ之 あげまき 廿八 昔物語あぐにときしれとこめそてつくりあさるものくゝひにこそハ

ちうのべうれ 座あつ 廿一 さくばいのちものびをんかーとをこめのつてねぞかてゐみそのの

さざこー 挙越 夫 四 洞院殊政 いこまやまあさうのくりとみるまでいをでーのさくこそさ死ぬさるり 同 日 夜系

有個 いこま山をこーいさけるさそ花おりめるくりく人やうそ

とこ名 をこ画 今昔 十 式人待とこのみてとこ画の上ま

るにくちのえをくどみそてわりーねとくさりまー

こさ 長 院私 六九里長 同 五廿 おりくる里長が声ハねやとまで

川をさとーつりいくそ月日とうぐへさめんん 同 日 為家

ーふの川長 夫 卅三 隆季々 うさくりあハりれぬくろ

季通朝臣 竿のをさ竿をめそくこ廿母こやこにれハさやるみのぐぞ 夫 廿一重之 衣川の関のをさの老け

るをみて むつみー寅りみれべ者にくりキのあくをそえやハとぞめぬ 老のくべ 廿五 ブーぼの称うひの

をさ院のうひをーあくべて 夫 十八信実朝臣 人のをのをのをへてーさうして声くをそる丸を

れ庭 看督長 カノ部三五ス

とさ 筏 夫 卅五 羽太 信実 山ろのをさをあくみのをさ

まぐふあるーづうみをのをさいれに心とうと記あさのころも

衣をさをあくみまとかにあれやさみう記まさめ 和名抄 卅 唐韻云筏織具也漢語抄云乎佐

をさく 。雅望考るに此詞終りぬ文字ず 文字ず 廿九 とやのおにをさ記ねくうをさくもれ公へ女ろ母にころ

らひうするもるー 俊成 七廿九 そこにのて和のさくとをさ

さくとれもよ 義ひらさ 下廿二いとはせいれよもとくゆらー

あさまま、花ところれべうの中のまをさくせえねを 夫

をさこえおくれぞ 同 殿上ひをさくくんぎくるれ 同 廿八 をさくうちとけてまくふず 日ら志 四十日 こくぐ

くなにいひてをさくあくーふび まつ 二 なびさせえぞ

めるれさや 同 廿五 うつくしげにてめでこーとむ

あふひ 四 そのあれさま多りーひのうをあどまをさくさ

きをさーしのうめに さくさ 十二 よひしのあどうりハ世

うまん見めまる 同 四十八宮づへをもをさくーまの子

世ちさーくむつひえすもをさくまれを さうめ 十七琵琶こそそ 今の世にてつくべるくをさくばう 三をつく

ぞありにうり 同 十一 大宮のおりくけりをさくまうでのハず 同 十九 をさくくいいめんもえのくくめ

うま 文ぐ 十八 中将の声ハ井のお松はをさくおくくざめるハ ぐぐひ 五 をさくおとくぐ 座ちろ

五 をさくくんのうへすぐさあハぬれとぐの 同 廿 男にちろうつふんをさくまれに 三ぎさ 十二 をさ

をさむつびまミ砂ずーて年月ぬりつるを 同 十八 をさくおくれハーまさぬ六条院も多ひまれ

にやーれのふ ろる 廿五 女子の人の子まるさことハをさくーあ 粧ぢーら 十一 くさ比けつうらいそ

云こけづるすもをさくくーあひ ひろる 上七十 さんもれるをさくハべくぬのおれぐ 竹川 をさくーハにくずかさまさくーあろ

けーさいとひぎれちくぬゆ くりひめ 十ぎえいとうこくて世の笑えかるうねどをさくおやけど

ける出つへぞ 同 十六 年比をけをさくゆえあ子ずいミじくさびーげありーれすみのに 同 十七

やうありれをどをさくくあひのハぬんちる ひろる 上九かーこさくのぎえ心からひをどハれをを

をさをされとるまぢく 大和物語 一むつきの加階さうぐろのうのいとゆーう笑えれぐ来うれ下るんをさ

をさ少えど 同 四 吋くれハーまて清代文をさくとさ 衣系の右 十五 竹枝のあやーれ

さハふれんへにてようづの人の幸にありめてとをさくゆえみくどるさまねーめハび。アニソリ 其三

轉ニハ ノ心ヒ 帚 三ノト 後承 ノハモツハラト譯スベキカ

ささく ○契云 艸語注 成務紀 三幹了者 推古紀 一軌制 孝徳紀 十二 明直 字書 幹能事也易住幹二 父之事能幹先軌堪其任者也 隼人式 凡番上隼人二十人有爾者取五畿内及近江丹波紀伊等国隼人幹了者申者神之 ささく一かーこーをさくーくさやうに少こんこそよろめとてさぶきくーてあるべきに叩せてやりつ 古 長有 大帖 四このへるゝのこゝろをさくーくもおりかえぐえ〜 あふひ 五十 こやづくもをさをさーくざまをーのてーばなでうあーうん 枕 九九 きのふハ車ひとつあするのりて二蓋の赤表あるハ指衣をぎみぶれさてもぎれとうおろーもめくうれ抱すでみえーきんぎちあえんがはてひのさうぞくうるハーくてはハひとうづをさくーくのろうる尻よ 伊勢物 百七段 されぐのりけれバみくまをさくしうず何もいひーらび 夫 卅三 光俊 初古 五 山姥のあさてにみてゐるうこのをきくーく知ハ日ふみ多りけり。ハかくシク スクレタル心 川長村主の新人の上よろをいうにこそべー

ささのー 異 御明紀 六 今臣不賢 成務紀 不首 田ゆづり 中廿三 そうるくあるこさハとをさるーやよう心ーあく 主左 下 女子のさめに八親をさるくをりめべー 公忠集 廿 「をさるくでるのこふくおもひくるの「ふ海よーふでるでうをさるくておよ年の私にけうるさまうる 重之集 「をさるくでるのこふくおもひくるの 田ゆづり 中廿九 男の人数は作くねバおやうくーのろうる尻よ 伊勢物 百七段 されぐのりけれバみくまをさくく心ハおひひうひ作ーあり さゞの浣 上廿 あるをさるやうへ心よりあうにもうをゼバりくーく知名さ今こうそへ

ささる 初 ささく 四十六 いまもいとをさるーく心よりあうにもうをゼバりくーく知名さ今こうそへ 桐ふり 卅一 をさるきふでのはひくく心に ん 主左 九ウだうるるものろハ年ちハをさるくそある 桐ふり 卅一 をさるきふでのはひくく心に うりて ささめ 廿六 姫君ハいとをさるげあるれさぬにて ささく 四十九 をさるきふでのはひくく心に ささく いむるるものと ささめ 廿三 ものきさげにをさるきめをさるくのめろうるよいくもーみるる 人をさるさのめろうるよいくもーみるる

ささら 異 九 尼ざさいでであるをさるや 夫 卅五 初六四 信実 「をさるごのさくのそーめのいうに心につるさくーおハそるへおりて 画合 四 いまーくれず〜いづるよ云〜そそえるくあれとえなのひーはをさ心もさぐ今のこくれずゆるに きりぶ 廿六 をさるごちにめるるをえ死みちにつりてもろざーをみえをうこよるう心よ也ひえめれバ さぶ 四十五 をさるごちにおろくーやさうこそ

ささむ 伯 続紀 二百官人等四衣食國手治奉止任賜帯 夫 卅ト部兼直 「うぐさを紀やまくーまもの三紀八本やくるさくさめ〜抹やうる名ん

ささむらうさ 治部省 和名抄 五五 〜〜 手佐牟留都加佐

ささむ 蔵納 枕 雑秋 人九 万 九十二 六帖 人九 「ささむとーのさま 夫 仲正 「うぐひすのれぐよるハをさめさち声あるう〜ハこびうるう 田 九 俊成 「春うまだえさけめれぐお宝山ををさめてれける践うり

ささむ ○心ノオトシツケテ ミダレヌ ジットゴラヘル心 物古 二 光俊 「ひとをぢにろをふくをさるバをのえくつるぐもふれー 系ひさ 上二 卅四 をぐうまつ番のいとまめやうまところる ささぐ 十八 はるくさうさひろなん心をさめず作うー

作るに文もえをさめぬをぢにて 句承 十七 ろいちういつひうりみて 四方 上九十九 れとく弁友もえをさめあくざめるを上ごちアるうよ日ろさ兼房つさ ハ ぐちぶれのいざーん 夕ぐり 六十三 さんひるこのみをーやをさめれおやうさーさるハかーくれ也をーへあでもいとうくをさかて作るふをとて 狭 三中大いとさまでをさめやうげさるるみえて 附 ささぐ ささぐ 四二 月八有のほて光をさまれるものうーぐ

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79

ガラス使用

ようにとこのびざかれバあまりはをさまずぐれおつるをみざこそもこうをれくれのバ

とぐも ○群スルコト 三代 八ざうあれバ例のさわぎにをさめまると母ごこの方おるじけみうまものがうるんと
るさこぐれのひて 三十をさめてあるよ世中ひごさてるるーとおもくみを

とぐる 伯 藏納 今ノ 右三様トモ ヲサム ノ下ニ附ス

とぐる 小條 新後拾 冬 お光 「まこそ〻ふれどもいぐたまゐやをぎ〻がうこのあられなさ〻ん 同 又云ニ肉ヲ
「さざれこをぎこぐるをこるさせハみるのようにくこその世水 枕雅 雜中 二品法親王 「こうこそこそ

山などのをざこまでぐるものもびーさ

ささめ ヲサム ノ動ク詞四ツアリ ヲサム ノ下ニ出ス

ささろ ○八雲抄 下女ニ云ク 和名抄 二七 日本私記云事領二字讀多字ヲ今按事訓モ彼ノ義也 枕四
十おやりくまでをさめをぐーてこえいまめにり 同 二十えヨリ ささめみをてこう さ多の院
これ〻いうれバをさめみハやうどめものまこ〻んとうぐろ 「まま せもう枕よびこまでーこをさめみうハヤ
うどまでありこれ〻うみの下ろつを

とぢめよの 納殿 ○西宮記 おく部よみゆ 拾芥抄 納殿累代御物納之在宜陽殿恒例御物納藏人所綾綺
殿云〻 紫日記 五十五 をさめどのにあるぞよう生させてるの人〻ま
ひふまで 夫 十 兵儀 「をさめどのくこのつまぐれ〻ありてをみ
「をさめどの 宇治拾 一五 ばこび後にてをさめのものまをれいまう
「をさ〻く 義系のさと 心のうてくまろどをさ〻くあるこ
め

とぢ 萩 和名抄 廿二萩和名手木 妻荒相似而非一種矣 万 十卅八 「あ〻べる萩のもさやさ秋九のふさく
るをへにろうなるけるる

さぢ ○ヲキトハ招ク〻ニヲク〻呼合セ見ルヲ 夫 十八 顕仲 「ふるゆきに友しれうすおるべ〻いとけど
りみえずまこるこのさく 大帖 二 へとうけて山にいりにあ〻くるのいと
いとうべるくいりけ〻を相るれにいるごとくはむくへられめとこ
いくるる〻 くさのくにあるこまくハまこるる

とぢさぢを 萩風 和泉式部物語 「ねさめよバさるめるこん萩風ハふるこ〻めやハ秋のふる〻

とめく 枕四 あるつる ささなれバ〻こけるこ打るるよ合セて とりバ云〻打ことそとるまぢられとん
さるまて 同 二卅 をめをさひのひるう 著名 一工同三
宇治拾 二七 ひこざありて人殺をやをめく 同 二卅八日よりまありてをめをさのこ〻ろ声おび
年二月十吉山僧関白殿の〻まへまありてられへトるり十八日
さぐ〻ぐ〻ぐ

とさ ○忌 ○花鳥 四ノ巻 下十三 十一月中ノ卯日新嘗會 辰日豊明節會 山藍ニテスレル小忌トイフ物ヲ著
スルナリ一代一度ノ大嘗會ニモ 如此 又云舞姫ノ裝束モ白ハ〻〻 此抄可考 「春曙抄 一條殿御京被ニ
御侍従大宮會ノ説ニ小忌トイフハ神事ノ衣服ニ白キ布ヲハリテ山藍トイフ草ニテ摺木ヲ摺レルモノニ
大方将衣ノ如シ云〻コ〻ニハ白キ絹トアリ女房ノ服ニハ絹ヲ用ルニヤ 「まぼろし 廿一 れさぢの頭中将系
人才将あぐ〻みて青海のすがたは花びらめやさくて

ーのえ ○忌の夜 「栄初花 五十四 とこの夜ハ宰相の五君れ日〻
ぎりとこ〻して赤飯をそんこ〻ろりける

ーのあをひも ○忌の糸細 「狭衣 仲実 夫 「ひびさびをとこのこ
なりイ 枕 五三 小まろ〻ろあがあろひものとひころがこれとむをそぐ
云 「宮川の云〻

ーのこんぢう ○忌の君達 枕 五二 なまこ〻さもの とこの君ざちいこ〻ろまめく

ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』　請求記号 837-79

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』　請求記号 837-79

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』　請求記号 837-79
ガラス使用

やミてはなりなけれバしもにゆりつるを 〔元輔集〕 九廿五 「つのくにのなにはのわたりのうたゝねハわす
れそれはなりなけれ 〔狭〕 一四十五 あけくれバかやり火さへけふりてなりなげなり 〔宇治拾〕 七十九 雪のちつ
ひまなりなくふりまへてあかくれバ人々もみぐるしと大饗ゝなるとおもひなりける 〔同〕 六九 いかゞあらみん
とおもひて岸のきさへよりてわりなくつまだてて見あかしけれど 〔山家集〕 八 嵯峨にすみけるに
うくゆしくつくりみくしのさかずず山水まちなりなくてことにこゝろとゞまるべきにおどろく
りける 〔ワリ無〕 卅八 めけしハうしろめたうなりなしとおもへど

ワリな 〔末つむ〕 十七 おもひわたるさまなどいとよくのたまひつくれどまてちかきハいへハたちえてなし
こりなのことや打なげきさまひて 〔同〕 こりなの人ようしみられゆくにもひや

ワリご 〔和名抄〕 十四十六 蒋魴切韻云樏刀委反漢語抄云樏子和礼比計今案俗所謂破子是破子読和理子 樏子中ニ有障之器也 〔土左〕 此間にと
おほかりけれハわりごもたせてきたる人その名何ぞや今おもひいでん 〔かげろふ〕 中下 かうぞその森に車とどめて
わりごなどくへのよしみる人のいとうまげそ 〔さうし〕 〔枕〕 五二 なまめかしきもののようし
きるひわりご 〔夫〕 廿九 在信胡目 〔万代〕 人のいふまたわりごさつけしけるにそのひしけるかさあるを「君
がへんじのくりさくしけれバなうまく松のおもひかゝるまで。なお 〔ひ〕 ノ部ニ出ス

ワリー 初ノワノ所ニ出ス

ワル 破 割 〔かげろふ〕 卅八 ひとものいさにおきてみなきてみてさいぐ云ことろづかうそりてわたには
あさり 〔夫〕 二十 西行家集「まさにわるひざのさくらやいでめうんむさめそれぬかさよりの山 〔新古〕 家
「みる月のてるひのつらさわれのきとありのみよひぢゆきちなあり

ワレ 。自ラワレタルナリ 〔夫〕 卅三 為家「つきかる山の松本のわれあけうつくしき縄にひかぬ心ハ
。ワレテ 此詞哥ニハ多ク思ヒクタクルコトニイヒカケタリ末ニ別ニ出ス

ワろざさら 〔竹川〕 初 よるでうちのおちとまりのこわきが

ワヲー 〔きぶかし〕 十二 人とあれと心とどめんハいとさるかるべきことといまにいつかおもひえて 〔同〕 十二
それハなりわらしとくそ

ワるの 。下手ヲイフ 〔やさぶ〕 十六 上まハいとまさまひとるにワるもの八及ばぬおかさかめる

ワをとこ ワノ所ニ出ス

ワくり **ワそんな** 。ミダレサワグ事ニイフ 〔昔物〕 十二八 きたべてまはけだくち八十余人同心して諸国にかゝの
て天竺冠者ゟかく巌重なるよしを人ゆかり或ハ人にゆいをせてワくりけるがあまりにすさまじそ
ゑまでゆゑてかしこき目みあひまかり 〔明恵上人伝〕 罪五斗を行ひた菓斗さかしおかしいくら人
の心かくましくワくにのき盛てそふよまかし

ワけ 〔万〕 五廿九 「よきまを布かたぎぬのまるのごとワけさがれるかなのきくたにうちかけ 〔祭のうひ〕
廿五 こめのためのワけしたる 〔吹あげ〕 上廿一 印本も一本文 あしではそりよりあ不そくそてつきの布のワけてるつる
そぎりて 〔散木〕 中 六十七 〔夫〕 廿六 意不依くとりぬを「くれなみの袖はむろれしまみくらなきなかれがつくりのワけをぞ赤かる ら歟

ワくど 分 **ワかぬ** **ワかね** 不分 **ワかん** **ワかず** 不分 **ワくれ** 合分ニイフベキカ **ワくさま** 共ニワく
ノ所ヘ出ス

ワく 和歌 〔祭の使〕 卅め 此頃其さちまたが和哥よめでぞりたや 〔むかし〕 十一 監司 此和哥ハつかうまつ
りさりとなんおもひさまかる。詞ニイフハコチゲクミキ人ノ詞ゝ 〔拾〕 賀 康保三年内裏にて子日せさ
せたまひけるに殿上のをのこども和哥つかうまつりけるに 〔月の宴〕 三 和哥のかたにはいまだうまぬをさま
へり

ーのうらひと 和哥の浦人 〔夫〕 卅五 千五百番 寿三のきこ「かきつむるもくづといへど和歌の浦にななれたる

ーのたくらし さらのくらぶん 和哥の髄脳 〔玉かづら〕 四十七 ひとちのみそのかたちおきさまへりけるかうや紙のさうしそとこ

そみよとそれぞれめくりーうワのざるあふいとぶやくやまひさるべき不杉ありーくバ

ワが 我 [枕] 祢宋 [祢宋字] こてぐ〳〵ハるゞにハあ〳〵すあめにまします とよをうひめのみやのみてぐ〳〵 [古] 雑上「ワ
がてくろあぐさめもつさ〳〵みやばらて山なてる月をみ 「ワ」廿九 こがれころひ〳〵ろくハあさうら
杉ぶ〳〵ワくよりありろり [さらき] 十七 故ゆんの此世にハワがまゝにれてせと [玉クル] 七尼まる〳〵そワが
世のくぶろハもう〳〵ん [古事記] 中九 表登責余多陀余阿波年登和加佐初流斗米

ワる 若 [あひ] 四十七 ワの此心ありさやとらうさ〳〵見をりあひて

ワそぞ 若葉 [新古] 一あやめぐさ 信実 「麻のうへにあやめのワそぞやさ〳〵ゝれてねをこせさやよそのかくさ [夫]
九 後頼 「むろのとまのワそにまれこめてこぶすやるのひうりるる〳〵ん

ワがぬ 綛 ○タワメ（グルシ） [朗詠] 春興門柳復岸佾綵麹塵之絲 「大和物語」三 みくとうてこれバいとくバ
〳〵さ絆よされるる髪をとそ〳〵ろいとぶてつみのり [枯] よびるさ物そ〳〵ぐさのーたる本丁に
うちみる褌のおりさげよやー〳〵うさ〳〵ーかんまそれ〳〵そろ〳〵れうへの
さめのとをさあけ嵐の尾のやうにてとびひくんぶぞにげなまや

ワかう 別 [古] 別保養父 「くりあにほうる恋のおくれねバワくとくへに [伊勢] 廿六度 人のくまへ
いさけるをいとあハれくおりひてワれまうり [万] 二十九 「ワれバ妹おもふワれさめれバ [国] 十五 廿 「うの中ハ

つねくのこくワれぬくさみひやりとなありこひゆむ [ワカレ] 別二出ス

ワる ○死ワカレタイフ [猿] 三 「のちの世のあみせをまくんワ
重之 こちの国にてよにとうれて [ラ云]

ワく ○ワク 所へ出ス。黒白善悪ノ差別ノ別ニ [神代紀] 上一天地未剖陰陽不分

ワをとこ 若男 [大和物語] 三 「ゆおきさもあ〳〵まぐワをとこちりのる時よるんをとめのをとこにて〳〵り

けり

ワく [ワげ立] 四 あこえ〳〵ワくくとくさうりけりっへうとにいふ羽 老の〳〵ぐ〳〵さいとくとありけめさバゆ
ささまにみあ〳〵くんくこえにくくれあぐぶ〳〵ある

ワくゝー [ダれ] 廿六いうでうまう〳〵んくらとてといへバあるワくく〳〵とうちワ〳〵ひまひて [橘の上下古
ひるぞあおよるくハ行まうでてんと竹えをくどきめぐるれ [万] 十九 そぶ〳〵さいるまうしおがろ
げよハさいをぐけつれ〳〵よんくえすらんに分めう〳〵くもの [あひ] 卅一うく心うりうりにとり
ワう〳〵死 ものおりひとーて [ダぎり] 六十 うぶ〳〵〳〵さやうよハいひさぶぐ〳〵も [後分] 下六十九 そぶ〳〵さいハ
んうさまれどむけに竹えさんをワく〳〵みんバ [玲念] ハ権中納言の此心のワく〳〵さをれぐくざりあれバ [まこ
れなどワくひのよ [あぢさき] 九三条の宮ハ親 そおりひ死るぐさにけ
十五 おくざまくおさうりさまさまいてこうひ〳〵しげおり祈ワ〳〵
ぐさ〳〵れ [夫] 廿八 百衆 [山姥のさらひまなびくろくひのろ

ワーみ 若髪 [ろ四] 十いまへさりとえ〳〵此ワ〳〵みり

ワよ 我世 [新古] 一百衆 「ろづくよけふハをぎめくいひてあ [枯] 雑上 仲文 「おり両
の月のひうをまろそに我あいさくふけにけうる [ろ私用] 「うのちのさうひがるねをろくて我
よつきめくれみまつるへよ [新後] 雑下 後光明峯る 「うくぐうる
山ざと

ワざち ○ワカバエヲイフカ [夫] 十六 久妻百首 親隆之 「れとてる
もさへちうめる [山家集] 下廿一 野まんあまるぬりけるをはすりへぞくきくみれバなつひものあうくとへ
けるに云く 「そハとや月をこひてえいとうむべつみをく〳〵ふぐのるぶち [枯] 七十一 桃の本若ざうて
ゆくえのぐうにさ〳〵出そるうるつくてをゝ〳〵のやゝれみえたるに

ワざうてま 我立松 ○ワガスメル山ニ [新古] 八 待教 「あのぐ〳〵ミみやくミぶざいのみ〳〵みうちりぶろ

そまに冥かあ〳〵せさうく 千載 雑中 恵四 おもひをくこと
みにおもひあまるよごろそまにをこそめ
れそで

わかれ 別 古 哀傷 忠岑 「せとせけばふちとちりてゆくみづのわかれをとゞめかねつる」 「わかれてはすゐろにこひぬるものをあふくにこゝろ
わりもてゆくものなれや」 万 十五丁 「あまの子のつゆかくのみとゞれやもみぢ
葉もやん 古 別 係のさねがへ〳〵山伏にてとられを〳〵みけるおそよめる 後拾 別 能因法師 いかのくに
まうでゝりけるにわれをゝみて あひうんこのうらにおりよ 松
「とゞれつるえをくにもゝきみのちうそすきまくおゝさよ

わかれぢ 別路 古 雑 貫之 「いくよゝるまあをくにとゞれぢの心都そくおかのうる 後拾 哀 一条院
皇后宮 そうそ 七 「そうくんもみぢをれぬにあいてゝこゝろぶそくもいそぎこゝろる

わかれのとこ 別の床 千載 哀三 二条院 「もゝくめやおつるなみだのあとゝゞにわかれのとこに消てこんとい
俊古 哀三 「うぐひすとはおもはれぬものをあつさのとこのわかれのくこのおきうゝゝん

わかれのそで 別の袖 新古 哀上 能宣 「いゝ〳〵おもひけめぐ〳〵さゞんのそでやさむけなるらん
清正 「さみがさめいうてゝ〳〵えわれのそでやさむけなるらん

わかれのくも 別の嶺 さうき 十 「此門出心うごもてとゞれのくもゝのうへ
御座ニテ 皆ニ入タル儘ヲトラセ玉ヒテ 歌玉ノ 題ニサシテ 京ノ方へ趣玉フナト 仰コトアリ

わかれのこゝろ 別の道 玉葉 哀二 元良親王 「あはねよいこひつゝねきあふさかのせきもるこゝろわかれぢのこゝろ
哀三 為定 「こゝろぢはかりかへるとゝ〳〵ぬわかれのこゝろのあふさかのせきもるこゝろ

わかるゝ 分 拾遺愚草 七 「まんぢゆいゝあとゝとゞめこゝにゝろりとゝゝずつゝまろ〳〵せこまん

わかれ 棺 本語 ワガ又ノ所ニ出ス

わかれ 若音 夫 春二 定家 「うぐひすのやとゝめそむるこれ竹さまぢみ
わかれ 若苗 夫 七 隆信 「おもみがこめにものさとゝ人ゝちもれてゝるわゝあつや若代のさめ
わかるゝへりろ 若苗色 ○若苗色ニ青キヲイフ やどりき 九十四 あでゝこゝおぶ
ゝり

わかる 若菜 万 八十八 「まにくえゝくのゆきれぶおくれあて春菜つむことをみるぐちゝさ 松 賀 伊勢 六帖 家集
「ゝるの雪のわゝるみゝねゝおゝがみゝとゝの子ゝまつまんとぞおもみ 新古 春上 忠見 「春日のゝまいみゝゝにあ
わかるゝ 上卅三 正月廿三日子日するに左大弁ひつきの七日のひわかなをうめゝみるに 八雲御抄 内裏 北大和物語
ゝりぬゝゝわかるゝゝりのをいをゝ 刑楚漢事記 可考

わかんぞうり 北史僕固列伝 王妻姓維稲後官有女六七百人名太子為利歌弥多非利トアリ或人ノ云古本ノ
北史ニハ利ヲ和文字ニカケリトイヘリ今ノ本ハ誤レルナルベシシカラバ王孫ラサシテイヘル「古ヘス
ヨリノコミトシテルル又考ルニ若皇子ドホリラ畧セルニテトホリハ筋トイヘル心ナルベキ歟 落葉 一ワ
んぞうりハろんどうり二人ハたゝの娘 赤つひ 三
ワんぞうりのを放氏太神をるが娘なり 卅四 女ぺゝ
ぞんとうりおどりて をゝめ 十五 ろんどうりゝゝりてあてをる鼠ハおそるまでのれど
わかむらさき 若紫 後 雑二 「むさゝのハそでひつぎうりひゝかとわれ
ようおひたちそめしそのゝとやわれむらさきのねをゝびやゝん
わかうど 若人 ○ワカビトナレド姑ク音便ニテ方セテコニ出ス 伊勢 四十段 昔のわゝ人ハさるものおもひ
ぎんぢゝる 七 ゝ 卅三 「おゝ〳〵おべゝぬとうゝんゝに 来つゝ 三 いろゝめ
わかぬかみ 我大君 拾 哀傷 「いろうやゝゝこのを川のたえんゝそ
ゝをかぬかみのみをとゝゝそれ

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

[万] 二卅三 あすか川 あすごにみんとおもひつゝきみのきをまつとなくいのれどもわがおもふみさゝひしられぬ [日] 三十三 [文] きのふけふとさにせう [万] 十八十三 とこよものこの橘のいやとほながくもわがおもふみいますみるごと

わかく 若ク ワヤノ示ニ出ス

わがくに 我國 [夫] 廿六 [後] 九条内大臣 あとせき山をつくりしるくもわがくにをおさめたまへる

わかくり 若栗 [夫] 廿九 [母家] このかハ秋よりおもひ若くりのいがのとげとげしくもあれかな

わかくさ 若草 [わ嚢] 十 わがひさゝんあり [日] 十六 わかくさをいでゝハうのはなをおくすおそきえんえをなん [伊物] 四十九段 うゝわみねよりこゆるわかくさをくれのひすがらをとこそおりみ。是ハ若キ人ニ比ノイヘルナリ [手鏡] 表四 座信 「人しれぬおもひをわかくさのつまにしかの [伊物] ヲ本ニヲニメカタニニシカノ

わかくさのつま 若草のつま [吉事記] 上 わかくさのつまのみと [伝賢記] 弱草吾夫 [万] 二廿 右の [わ] 「わかくさのつまのみとおもふるろ [神中抄] 四 日本紀云弱草吾夫珂塔 今者和加久佐乃阿加津万使也 言弱草者謂名者以殯 草喩夫婦故以弱草為夫又万葉九詠大橋娘子哥云 「若草之夫奈有良武」 おくるみうゝ [神中抄] 前後 「おもつま [桂] 上 五十九 かんのとの〳〵ゐぜんどのハわかくさのつまもあるをこそ [わ] 四 又のヨなかいとうしくわかくさのつまにはありとおもはねどおもはれてまさるこゝろのあきさ [文] 五 くちなれゝ [ど] 九 [ど] 十七 [ど] 廿四 わかくさのつまもあるをけふのひをあすもしらぬわれやなにせん [続] 廿四 わかくさのつまもあるをこそ

わかやぐ 弱ダ [わ] 十四 すのあられちるをかけてもをしとおもへるをみてわかやぐ代の心どもにハ [て] 廿一 さとなかるそらのしるしもなくてゝそれをこそわかやぐといへ [文] 廿一 ゝノわやぎてもてなしくるうハべそさそもありけれ云〳〵 [玉] 廿三 もをめ〳〵なりぬ人の手をとりてわやくときゝてよる

わかやぎだち [枕] 二八 安親の宰相ぬぎ [千時] 五 十七 わやぎ

わかやぎ 若蒸 [古] 哀九 よゝ〳〵ず 山〳〵のようぎれるこゝちもするかな

わかえ 若枝 [後拾] 賀 故式一親王のいろまぬ〳〵せけるよゝ右大臣 「ちゝせある二やのまくらのようみてをふぢのわかえをるびさうえめ [夫] 廿一 [好忠集] 春十首 「むさ〳〵こゝちわかえをはなのさとにふるる てつがわん [後拾] 頭仲 「紗の男がうてハやせる岡つゞわかえをはなのさとにふるる

わかざくら 若ざくら [竹川] 十二 うの花わかぎうのおひやらるゝまにぞれゆく [万] 十四 [嬢] 四十 そのゝこれわかざくらと見ゆるまでにさくあいあり [万代] 兼一 尚歯会 わこのひ [竹] 清輔 [万代] 兼一 尚歯会 わこのひ

わかさぎ 若櫻 [井] 大君のもさとる山のわかさぎてゝ [わ] 廿一 [清正] いつ〳〵こうゑてこそれゞとるぞてもくるものをねぐさる

わかさ 若サ ワカシノ示ニ出ス

わかき 若木 [塔] 雑春 廣庭 [万] ハ [朗詠] 「いす〳〵年ねこゞてこうゑゝわやぎのとろまの木ハなる [竹] 十 若木の木心のとまくゝつぶみて [万] 四十五 [真] 名をまろとにゝあゝどわがやぎの若木のわもいまこゝみめり

わかさ 若キ ワカシノ示ニ出ス

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』　請求記号 837-79

ガラス使用

ワかざみ　若君　〔うつほ〕六「ワかぎみハいづくれたくしますらん」〔夫木〕五十一「ワか君のかへでぞれ見え」

うなゐこ〔ワか紫〕廿二「このわかぎみをとさなきてちに」〔あふひ〕廿八「わかぎみを見奉らせ給はず」

ワかきんだち　若公達〔さか木〕六「殿上のワかきんだちあまた打つれてとぶらひ給ふワかきんだちなどもまゐる」

ワかきこ　若キ子〔飛分〕六「風のまるとも今ハかへりてワかきこのやうにおちまかれば」

ワかきみ　我君　○わが君ト同語ニテ下ザマノ人ニ向ヒテモ許トケテハ　ワが大事ノト思フ人ヨトイフ心〔かげろふ〕

十二「さりともと思へども一ふしにハ侍りきんやワかきみを人の後にはなくしまゐらしめのとや」

あがいとよげまつひてく〔をとめ〕卅四「さりともワが君やとなくなれ思ひあはせよ」

ワかゆ　五氏○ワカヤグ之〔万〕四卅九「ましかくてハ老世のくにしきみけくしむりしみしおりワかえまし」はけ

り〔同〕六四十「昔より人のいふくる老人のワかゆてふみぞたにおふてたきのせ」〔古〕廿二　忠岑「さくみなやちとせ

やワかえつらん」〔出雲国造神賀詞〕御若叡坐（ミワカエマシ）〔年中行事〕一番　藤中納言「としごとにあめのしたくまなくてらすワかえて

みんとききくめしくり〔六帖〕一上「去月の九日ですよりありくそのやそのいくさのワかゆさく」〔同〕日〔忠岑〕〔貫之〕

「さるさくの菊をみしりワか世ふかき袖ぞこそ老の身にされ」〔新勅〕賀　紫式部「きくの香ワかやがうれ

そでにふれてあるのよりだにおぼ代ハゆつらん〔忠見集〕三「万代すくへのひゆるおくのくにまかせをひろげてある

まつうる」〔赤染集〕四「ワかくまはにかへるきりにてとかくて香なワかゆるくちるそすれ

ワかめ〔万〕十四卅四「久しくそのワかそのひろめれさきみとえワかとさすつる　もきくもこえむを」〔夫〕廿二　長歌「ワかめ

刈きの入はりすくめてあまれにハつげよりねのうし風」〔同〕廿五〔六帖〕三よまへしす「ひろの上にひとめろ

あまワれをうて神うりふそのさそぎてするる

ワかみかど　○我朝ノ心之〔伊物〕八十二段　ワがみかと六十余国の中にしれゲきと思ひけるまで似たるとて

ろまへろひり

ワかきつ　若水〔新古〕賀　俊成「きよかくめみさむし川をなの水にむすぶやちよのそでめるらん

〔年中行事歌合〕大炊御門「そるとえそこなふそてまつるワか水はちとせのかげやまづうつらん」〔新古〕知家「いつし

かとうけの井のけさくまるとくればむすぶえるのちりいのり」〔夫木〕廿六　知家「わかきみのかるれみか水そなふとて

さがりとわにかひめるしつらん〔江次第〕一五十七　旧年封御生氣方人家井一用之後廢而不用自御厨子所付臺盤

所女房供之於朝餉上高坏上置折敷土器盛立春水君折敷供之

ワかみとり　浦〔後〕恋二　いせ「ワかみどりをのめしてふ……せめれば我そ家そのふしハらしむる」〔古〕恋二

小町「みるめあるきワかみどうしとおもひねりやくれなであまのあしたかくる」〔夏万〕「ワひワびるほどみのう

らとあれいやくひしさへのしきあみそろ」〔後〕恋二　ちりぬ「なかれて八ゆくらくのなしなみまり川ワかみの浦や

かぎりありらん

ワかみて〔万〕十三五「やさとみしくワか大君のさろてかすひのワかみてのさくしめすみけり国云へ」〔同〕二卅四「ま

ぎこのまくれかハ

ワかみとせるみ　我身こす恨〔古〕恋五「わかこのワかみとてあみやくろ顔のすむてかけしみつるかな

〔後〕恋二　定文「そはちとりくのむさとれとふこそむろけらけつる我をとすなく　○後べをもくにしけ

えりえるさるみのくるをとワそ」

ワかし　若　○ヲサナキ者ノ上ニモイヘリ〔ワか紫〕四十六「お納言がもとにねんとのゆふ声いとワかし」〔のわき〕

一風の音ぞ今ハかへりてワかきこのやうにおちまかれば〔柏木〕十五ワかき人ぐうるし死ぬまじ更に

あいりどて内ワかりを胡々にありひていとさうしく〔同〕廿五いとまうしうらしげにてせちにかくれ

うつど〔夕がほ〕廿五りのといとおそろしとおめひるさまワかうびくらし〔末つむ〕卅四　雪のひかりにいとど

きよらにワかうみえあのへを〔枕〕八六　天人あどころえいかまじけれどえうりおりくるにやとぞみゆるお

あどワかさあれどおしあげられてる人ハえまじらでうやましけれみあげられさるかおりし

ワかし　若　○才藝ノ未熟ナルヲイフ〔ワか紫〕上四十七　ひまけまいとワかく　とさるけなり〔をとめ〕四十二丁

ハきゞワらけれど打ひきたるみえてれつしげなる 〔一条のゞ〕 十九 うきありせまどワらぬれぞく拍子さがろび
上手めきたり 〔竹川〕 十三 竹川をれなじ声にあしてまたワらぬれどれかしううたふ 〔宿木〕 八 笛をとうしつゝ
まつれしまつれバかおの花にめしきおうくかさりゝつさしや 〔のりたひ〕 六 光ありていかそ又ワらうなことと世に
あるまじきをなれと 〔万〕 十七 廿三 「ワかせもワかさてかハたちうちにさワきなくかん

ワび 若び 〔多ぞ不〕 十六 ひとするまワびさるものから 〔同〕 十八 ものおそろしうとてあれとりてとりワびてやべバ 〔同〕 廿八 いとりさくワびさるへはてものはけどくれぬるなめり 〔ワ栄〕 卅六 はとしうのワびてなしひるへれバ 〔未つむ〕 十五 親のあつうひうしろなゆえのおあどころそワびぬかいとまうなれ 〔かさる〕 五 ひさごにワびさまあべきさまはあらび

ワかびと 若人 ○ 姑ク ワカウドノ不二出ス

ワがひと 我人 〔てならひ〕 廿一 ぞ侍従とかきとて尼君のワが人にしうりけるみちりをのみぞ云く

ワがもの 我物 〔拾玉〕 二 「よをそむく心の友となるみこそワがものゝにうれしくりけり 〔同〕 二 「うるすもえなの、しをとまひさとりてひがものとする夕ぐれの空 〔橋ノ上〕 上四十 まぢおしぐずきぬつにひらりのかやうなる夜のたちさちとけちらく今ハワがものと見なるらんとするハいらじきワかさいらひなる 〔後〕 春下 「うぐいすを子身をあひくべちるまでもワがものよしてくるハみてまし 〔夫〕 卅一 西行 「ワがものと秋のこすゑをこつるかなとぞれさとりは家居せしより 〔あげまきさ〕 六十六 いづれをもワがものにて見なるらんまとりむべき人もなし 〔うき舟〕 いるぞらこれをワがものはなきとべきとまうなくおぼしまずひぬ 〔拾〕 二四 にくきもの めのと此男こそてあれえぞあこ子をぞバそワがものまして乞そひりやうどてうしろみいさくる此なるすなさがりのとバ謗し 〔蔣くぼ〕 二 ワがものようらまくくをあいざやうなしとみる

ワがものがほ 我物顔 〔拾玉〕 二 「ちりのこる秋のもみちとけふハ又ワがものがほに雪のみるらん 〔九条良経家合〕 四番 女房 「ゝる人のワがものがほにおもふうるなるこそぬしハさぎめざりけれ

ワかせこ 〔万〕 十七 卅八 「我せこがうちへましなバ頼ありなん月ハうとかしくんなる 〔同〕 四十六 「さきらんワがせこれうところに 〔固〕 墨城 「ワがせこがくべきよひなりさゝがにの云く 〔新勅〕 哀四 「夕やみハたどたどし月まちてかへれとがせこそのまにまも見ん 〔新六〕 一 衣笠内大臣 「秋をワかやなうてはるれやワせこがかざしの萩もうつろひにけり

ワかす ○湯ヲワカス之 〔いせ集〕 廿 「人てなるなみぞハなくなるぞめくるをさえぬおもひのワかすなるべし 〔蔵本〕 中興田上にたりけるところ名のさとにいひけるかにやワかしてへのむかへけれバまかりけるに 〔丹後守為忠百首〕 盛忠 「おもふことありきのさとにいづるゆのさえるをなみぞきとワかするかな 〔好忠集〕 湯ワかしあさてもすらそ 〔業平のかぎ〕 大いかでかをそしおきんとたやうるれがあく進物に加まするどもとかくワかしてまふしやよく女房あされハ

ワかし 令分 ○其器ヲワケサスルヲイフベキニヤ 証文未見及 ワカセ主ラ 敬語ナガラ 例 令ト同シ二ホノワクノ所二出ス

ワかで 不分 ワクノ不二出ス

ワた 綿 〔和名抄〕 十二十五 緜 和名 和太 案也 〔催馬楽〕 「まなぞバワたあつくていさぎせざせとくすみひて着れあぐしのよ 〔大鏡〕 五下 「しのゝめひのつくしのワさハみまつれそまさをねぎまあさてくうこゝや 〔万〕 三 卅一 イ大ダハキテド 〔新大〕 一 衣笠内大臣 「ちらせやゆるまりまとにちらるこそのワたをし夜のしらぎく 〔夫〕 卅三 〔新六〕 五 知家 〔秋〕

ワたばな 綿花 ○男踏歌ノ夜綿ニテ花ヲツクリテカザス之 〔竹川〕 卅二 「何ひをなくみぐるしきワたはなもかざしをくへがらにぞワれて

ワたどの 渡殿 〔禁秘抄〕 渡殿 〔天徳歌合記〕 水おもあさくれるワたどのは御そくれてきみ 〔相づか〕 五 うちそしろきどのてくりこのみちにあやしきもさをしつ 〔そくさぎ〕 卅五 人てワたどのより出てる泉にのぞきた臥てさけのむ 〔続古事談〕 臣節 そのワたどのまてゆきまどりてさうぐきまいてかれて

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

わさち 輸送 夫十九 物六 信実初巻「小車のあの小坂松いやそのせわさちもみえぞ日ぐれぬ」

わさり ○俗語ノアタリ之遠ト同ジ 雅言集 五民 東の又条わさりにひとしのびていきわさり クダケ 一六条わさりのあしのびあるこのころ 万葉 廿一六条二条極わさりにて くさぐさ 廿四中川のわさりなる森なん 四廿内わさりのこびれま 四 八そのわさりにひいきしようめる人ハ くさぐさ 廿九そるのわさりをこめそめてわさり心よくなびくべくして 花の宴 七すゞのわさりのありさまの 万 四四十 仮穂度わさりへの上まなくとりの声なつかしおわりひつまのる

わさり 渡 神功紀 十五 路律 景行紀 十二 至難波渡拍俺之船神 神代紀 此云和多利 因 十九 風よきそて川をくさち 如引あるわさりまきまきまた泉のあひぬまに 夫廿六 永久四年 為昌「すみてるややはせのわさりするみひをひく さぶみつゝちとのそしる 拾 六 屏風よわさりしるみよ 四日出ぬる屏風よ詠のわさりくるゲイ 信明集「そびてゐるの世八今ん

茨川 三ツセ川ニイフ ○奥儀抄 三途川ヲ云ヘ 契丹奈河ノコトシ 十五逸 七 二七七人渡奈河 因 京筆「なくなみぢをてゐるん わさり川あまさるなバくりくるゲイ 信明集「そびてゐるの世八今ん まさり川のちのふちせをされよバまー 拾 六 わさりちそくくハさりーを 十歳 云二光行「こひしきさんなみぢのハてやわさり川みちせをされまこんとまーん 河雅 雑下 為家「こひしきにこゝろなやとさくおりえみわさり川にまあのせありやと

わさりぶね 渡舟 夫廿三 泉隆「わさり舟それとゝみえぞ教ゲノ

わさる 渡ル。敬語ニアラズタダ人ノ上ニモイフ。通ルニモ。向フヘユクニモ ○又ユキタヘ来ルニモ 拾 雑上 云ク月のあるさま夜ハのあをわさるそ云ヘいせ 雅 九十二 八ぢくさるあをわさるそ 奥儀のそゞまをわさりそれば 十七 此 卅七 此巻をわさるやそとそさめる 四ノ五十六

ぎんわさりめるとこへ仕る やとり本 廿九 狂いそーのひてわさりなん 狭 二下廿三 井ありてとおあすゝおへもわさりより 万業 四十六 宮へわさりのみべうなるを 同 四十七 心よくわさりのみべうなれバまーてなこえ ぐさるべくされバ タダケ 四十三日にわさりわひて 末十 十五 こあるこよわさりてもみるよいとらくげにてみあるる 同 五十 こあるこよわさりてもみるよいとらくげにてみ 相つぎ 廿五 まーてーげくわさりせのふ西方ハえそうあへありず 万 二廿七 長谷「わさる日れくれもくること 末帖 十二 小君のわさりありくにつけてま くる 十八十四「ぬバ玉のよるわさる月を いくるまとよみつゝまハれまわんぞ 同 九十二「さよ中とよいふりわさりてみあ 物六 一先後「天川 夜のよわさる月げのなだれてやくゝ

附 わさり 体ノ語 三わさり 廿八 ホわさりのまをそのひず の川にあるそのわさりゆまをそのひず

○そひわさる トイフモ行心 ホノ部ニ出ス

わさる ○鳥にいわり 夫十七 水鳥未寒仲西「おとみぢさあきさ 万 あみわり 夫日 枕盛「いづくもおるーぢわれを何とわこうわさる 1ナリ

わさる ○通ル心ヲ 因 九後京極「夜のよハ松をわさる蚊の声のとづらぢ 拾 ○唐ヘ渡ルヲ渡海ノーヲ 拾 別 笠の金をぐわさるこれ

わさる ○川ヲ渡ルヲ 神代紀 上廿九 作舟架之東渡 万 二十五「いまぢまでまーまのをさるまーまのをさる川をみぢみだれてながるるわさりをぐバりき中やちえをん 同 同 秋下「わさる川をみぢみだれてながるるわさりをぐバりき中やちえをん 続古 冬寂連「わさりへの行のおとをーーわれぐぬれぬーがの大わさり 後 五五「人ーぢ 風わぐーへ

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79

綿かぶりひさるる菊 [幻] 三十九月ま

つきひ ◦廿ワタリ七 [日本紀] 二活ノ字ヲヨメリ [大和物語] 四そこころつきひるごまいとそろく

なりて衣をこがれつふくなどやとくわるおにひさつ [夫] 卅三師光 [紙]のをがわのがつきひひな

みて歳つく車もきくるし [無盛] 廿二画ノ有 京の人の衣に手をこころりさかうる [を]るるかの

未の世とそ [カ] 九つきひハ市女もワれもうそごりけり [伊勢物] 廿三段 みなうつきひ けるくのさ

ぐや

つきひさ [朝恒] 卅九 つきひを [伊セノ地名] [玉くしげ]

なりうくり

つきひせ [著字] 一廿一氏客人ハ誰にてつきひせのひ

なりとこころてけり

つきのくま つきの原 [新後拾] [くさぐさ]なくおもひしをりも

つきのそこ つきの底 [六帖] 三海是則 [つきのそこうつさてもちんくれずれもみるろのみさくまく

[万] 七二十 [綿]の底おもこぐふねをへまもせん風もふかぬな

つきくー 私。公(オホヤケ)ナラヌ自分ノ人ノ上ヲイフ今イフ公用私用ノ私ク [枕] 四さるとは伝られるこは

うへつてまかーとまりのうーヤて私ノ用つきくーにいうてみてさーとおりひハべーさーん云くと

つきそ 皆えそやされバ [同] 十二九 行てあれバいとうれしくてくる方云く私はハまとものこちもるをあつきざれとこ

こひのそでもぬるやあり行くんもとてありつ ノ内行傍ナル人ノ私ニテ来レバ内行ノ口書終り私手前ガ申ストイフ口ヒ返書モ作言ノウケヲヌ私ニ前ノコヲイフナリ [枕つが] 十三 くれまぐふこころのやみもとへるさかさまにろく

だりに兄ここえまかりうけるを私ハ心のどうにもすごでき

私ノ上ニイフ [うた角] 六帖つきくーるまいるまのりくー

の山おくまくまりて其日にあるつバめぐられろ

まろこびいもんをどうくーして。是モ上ヨリ禄玉ハルノミナラズ手前カラモ礼ヲスルヲイフウ

つきくーのわれ 私ノ別。表ムキナラヌ別ヲ [六帖] 四 蒹葭集 一本 蒹葭集 [つきくーのそれ]

なりせバ秋のよを心づくしにやくるといきるー [さくき] ナ

つきくーのけさう [タくれ] 十四 つきくーのけさうもいとくーくーれさて。推先カ自今ノ好色ニモカヽヅラ

ヒヲルヲイフ

つきくーのこころざし 私ノ志。是モ心ハ同ジ但公事(オホヤケ)ハトアリトモカクアリトモ自分ノ志ハトイヘルシ

内(カ)くナド心近シ [狭] 二下五 心なりありのまゝおのづーあるまゝの心ざーハうつくーとなんれ

りつあるど

つきのう [羽花] 雑 法性寺 つきの未こざいでこれバろろ

まのこころくもうりがなみよ舟うみてうるるのあけぐれ

つきのこみ ◦此下ノ三ツハ下ノ私物ト心同ク乍前ノ大事ト思フ心ヒ [むぐら] 十一こぐなにうら

か私の君とおりひきーて [東や] 九こでつきくーの君のごとくおりハうーづきをうて [椎ノ本] 三まつそ古条

院の此方ざまハつぎくーのくもみなつきくーのきみに心よせつくまろく

つきくーのこころを 私ノ后 [巧秋] 下八十八 むーようやうるーまーバうくり約まぐでも私の后よ

なをちんうーおとくぐまりうく

つきくーのあるじ 私ノ主 [くくきぐ] 卅七伊与の奴ハかーづくやきみとおりみーんないぐい私の主だそ

つきくーごと 私事 [祝] 七三くーに出て左大弁にものいひそんとさあーひーていうれハ后ノ石カトテ

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79

ガラス使用

いとようくうるふしうてきこうり清汨あ〜と私事ーなり云〜
まねれうれバ云〜女ワさくーごとにてござ〜男をゑ〜 伊物三 大いどの孫宮に内の女使て
言のこゝみのワさくーごのやうにて申なるにつき白ち〜 せま 廿四内伝のうそのたりてる例の中納

ワさくーある 私ある 夫 廿六 二疋清下向後ねどゝみえぎりーふよめるとゝ云〜 源倉石大尽 ゑバ
をゆさ〜あ〜このやごもりねのくるワさくーあれやけきハいもぢこぬ

ワさくーざゆ 私ざき さえる 廿八 ワさくーざまの世にもとゝまるべき 五
のべ〜をどすのーさこえひかくーうるべ花を そとも 四十八 これハねワさくーざまの肉くのうまれバ

ワさくーめ 私物、大事ニ思フ物ニ 涙くぶ 一さて北ノ方ノ心ふまりぬとてお少ゑ〜んうりハ私ものこてセ
が不ふとゝまセちらん さぶの院 上う九 わくゝハこのきみをぞワさくーあこころう
ゆゑすのこれうす 後拾松浦 四廿二 大将の北方の尼姫君あうすロをーきなぐさめ口の心やと況私の
ありやとうれーうえて 相つぶ ワさくーものこおりひうーづうまーと 猿 かくさまことにめぐ
ワさくーものふおりひうーづうまーと 猿 かくさまことにめぐ
私物ふえーめすを云〜 栄初ふる 今上の一宮をバ帥宮とゝ
ま上八おられくーれめ私物ふおりひさこえさやさまひて 受
くーげにおれーまーけれバみうどよ ワざワさくー物すぞいふ
ひとおりてよ大いなるひうざきのくーとちづーとそめぐり百六十のくーありこれハ北方の
こワさくーものあやすーさをめまふ糸うりうどむねとひーくーつみこうりとさめぬるく
らうり

ワさぎぬ 綿衣 枕 九四八九月をうりふるまぎりてあ
汗の香なごうまをぞーしのひとくふりうさみてござうるふ

ワさー ワタスノ所へ

ワさーふね 渡舟 夫 廿六 祐子内親王家草紙合 ふみくーす
さびくワさすワうりあうろう

ワさーもり 渡守 古 秋こゝみくーす 冬ふの夫のうりうの
四十九 あきの川ワさーるまをありてーうさるぐづめるふハまりせど 元輔 二 ワさーる舟 ゑくれみる
れてれいるうるるのさーにまぐふべきうる 伊物 九段 ワさー
りふみワさせとこぐまるのうさーねハ月 稚のおとせず 和名抄 二十 渡子 和名和太之毛利一云 和太
利毛利

ワさせ 渡瀬 堀太 季 隆源 川ぎりにワさせみえぬを近のみなにぶなるみバうさーて 同
「まりさちてワさせみくぬさわ川のーるべハふのちぐりうりうり 夫 廿一 登蓮法師 「まろうぐて
さぐのりーやけうくちバワさせるーとてさーとへよや 同 廿四 弘安百首 トキハ井八月大政大尽 「さうくへの
まこせのみみもうさこえてほのうりうのさうされのうろ

ワさん 渡。異国ヨリワガ国ヘワタス ニワガ国ヨリ アナタヘワタスモ同ジ 海川舟橋谷雪同ニ 夫 九
ゑてーと 兼昌 拾後 「おかつなうーうぐでーとさこまでにられうワさーてうゑバーめくん さーげ
りろうーへワさされぬ

ワさん 渡。橋ヲカクルニ 万 十卅 「ふさのふさきちゆさてあまの川うちハーワさすれみぐ
らんさめ 新古 冬春時 「うさーぎめワさせるもーにれくーものふさきちゆさてあまの川うちハーワさすれみぐ
来方 「いうよせんくめぢのさーけなうぐーまワさーやうさぬさやや成なん

ワさん 。渡度ノ度ノ字ニ 海舟ヲカヲテヨメリ 元輔 「世さワさうさひーりとさくや 拾後
ヒタチ 「人ワさと三世の仏のおとうさけバひうーのつみやとやや 夫 卅四 俊成 「ちうひゆるらの

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

我あり　我ありく　我ハ　我ハガ　ノ類ニ、詞トイフニモアラズ　ナド、ノ詞ニテ別ニ出セルガ見

ヤスキタクトテ各別ニ出ス

ワレ　我ハ　ワレヲ　ワレニ　ワレガ　ワレノ　ワレト　ワレヨリ　ワレカラ　ワレマデ　ワレバ　ワレモ　ワレナド

ワレラ　我ラ　ワレラヲ　ワレラニ　ワレラガ　ワレラノ　ワレラト　ワレラヨリ　ワレラカラ　ワレラマデ　ワレラバ　ワレラモ　ワレラナド

ワガ　我ガ　ワガヲ　ワガニ　ワガガ　ワガノ　ワガト　ワガヨリ　ワガカラ　ワガマデ　ワガバ　ワガモ　ワガナド

ワガラ　我ガラ　ワガラヲ　ワガラニ　ワガラガ　ワガラノ　ワガラト　ワガラヨリ　ワガラカラ　ワガラマデ　ワガラバ　ワガラモ　ワガラナド

ワガヤウ　我ガヤウ　ワガヤウヲ　ワガヤウニ　ワガヤウガ　ワガヤウノ　ワガヤウト　ワガヤウヨリ　ワガヤウカラ　ワガヤウマデ　ワガヤウバ　ワガヤウモ　ワガヤウナド

ワガヤ　我ガヤ　ワガヤヲ　ワガヤニ　ワガヤガ　ワガヤノ　ワガヤト　ワガヤヨリ　ワガヤカラ　ワガヤマデ　ワガヤバ　ワガヤモ　ワガヤナド

ワガミ　我ガミ　ワガミヲ　ワガミニ　ワガミガ　ワガミノ　ワガミト　ワガミヨリ　ワガミカラ　ワガミマデ　ワガミバ　ワガミモ　ワガミナド

ワガハ　我ガハ　ワガハヲ　ワガハニ　ワガハガ　ワガハノ　ワガハト　ワガハヨリ　ワガハカラ　ワガハマデ　ワガハバ　ワガハモ　ワガハナド

ワガハラ　我ガハラ　ワガハラヲ　ワガハラニ　ワガハラガ　ワガハラノ　ワガハラト　ワガハラヨリ　ワガハラカラ　ワガハラマデ　ワガハラバ　ワガハラモ　ワガハラナド

ワガヤウニ　我ガヤウニ　ワガヤウニヲ　ワガヤウニニ　ワガヤウニガ　ワガヤウニノ　ワガヤウニト　ワガヤウニヨリ　ワガヤウニカラ　ワガヤウニマデ　ワガヤウニバ　ワガヤウニモ　ワガヤウニナド

ワガヤウニヤ　我ガヤウニヤ　ワガヤウニヤヲ　ワガヤウニヤニ　ワガヤウニヤガ　ワガヤウニヤノ　ワガヤウニヤト　ワガヤウニヤヨリ　ワガヤウニヤカラ　ワガヤウニヤマデ　ワガヤウニヤバ　ワガヤウニヤモ　ワガヤウニヤナド

ワガヤウニヤラ　我ガヤウニヤラ　ワガヤウニヤラヲ　ワガヤウニヤラニ　ワガヤウニヤラガ　ワガヤウニヤラノ　ワガヤウニヤラト　ワガヤウニヤラヨリ　ワガヤウニヤラカラ　ワガヤウニヤラマデ　ワガヤウニヤラバ　ワガヤウニヤラモ　ワガヤウニヤラナド

ワガヤウニヤラン　我ガヤウニヤラン　ワガヤウニヤランヲ　ワガヤウニヤランニ　ワガヤウニヤランガ　ワガヤウニヤランノ　ワガヤウニヤラントヨリ　ワガヤウニヤランカラ　ワガヤウニヤランマデ　ワガヤウニヤランバ　ワガヤウニヤランモ　ワガヤウニヤランナド

ワガヤウニヤラント　我ガヤウニヤラント　ワガヤウニヤラントヲ　ワガヤウニヤラントニ　ワガヤウニヤラントガ　ワガヤウニヤラントノ　ワガヤウニヤラントヨリ　ワガヤウニヤラントカラ　ワガヤウニヤラントマデ　ワガヤウニヤラントバ　ワガヤウニヤラントモ　ワガヤウニヤラントナド

ワガヤウニヤラント　我ガヤウニヤラント　ワガヤウニヤラントヲ　ワガヤウニヤラントニ　ワガヤウニヤラントガ　ワガヤウニヤラントノ　ワガヤウニヤラントヨリ　ワガヤウニヤラントカラ　ワガヤウニヤラントマデ　ワガヤウニヤラントバ　ワガヤウニヤラントモ　ワガヤウニヤラントナド

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』　請求記号 837-79

ていそーう くひーろめ ささまをと 打まりつく [とて] [上三] それなくてわひしくる

われなる [やとう本] 廿六げよ我そろうとおもふ人女をもとめ〳〵まーがば去し

われまろうて ○ワレニテモノ心カ 我身ノ上ニカツテ来ニセ 心ニ [画合] 三それにもうて心うごく できふみとおもーつけあまに

われよりあとび ○心が心ナラヌシ [後] 去一 「人ふるそろバろハそれもぐ〳〵それにもでかてまわりくるころものくもづうをするずもーす云 糸るもいとぞくるーさ [玉ぐ〳〵] セさぐ糸の如さちをそれぐ云 てわれなるあ〳〵でとーとをぐもて [さら本] 五十三いぐハいく〳〵 [国ものづり] 上四十三めれとハ分もひえそ〳〵われまあ〳〵でおもひつをく〳〵みわれぐもいく〳〵ひそれバわれなかく〳〵でとーとをサシ異ナル カ 但心ナラスト訳スレバヨンサレドツカニサテ異ナリ [字治拾] 十四十二さぐまぐとこひ

附 **あれよりあとで** [吹上] 下十六その中に [孫] 孫宰相の中将ーきのあれなるあ〳〵てきーみ〳〵うし をみるく〳〵にこそ云、○狩アノ歌可参考ー

われまあるなだ [古] [宗干] 「人をなみ こころハそれにあ〳〵ねバやまあ〳〵でとーとをぐもて [さら本] 五十三いぐハいく〳〵 [枕] 四六いとうざもだ ○ぐ〳〵さ人のこころをぐもてわれまハあ〳〵ねぐやあ〳〵わるぐ〳〵さちうぐひて いろことあるころあれバ云〳〵

われをあるぬ ○夕貞ノ工ノ死イリタルサニライフ [タぐれ] 廿 それなあるぬさまなれバ

われがめ [枕ぐえ] 去 みづ〳〵一ろひくべーけーさぐ

やとわれぶめをーのふ [枕] 七八殿のおにくく〳〵とおもうりけるに行成信ノコラさうやうひそれバ いとうく 清がいひさることをんのおハセーと人のこうーこれそそみぐるーさされぶめぐゆうりー [とうぐえ]

一廿女八后よりてもいかよらせんさ人よ用ひちおんのこころそめでこかるできるをれらーこくおもひよ うにそうとわれがめをやいひちーーみのくる

われ〳 我と [夫] 廿六 [現六] 他カ心を 日空工人 「こそもーれわれと いつる月ぐげ ○オノレガ心カラ〳〵

われとせぬ [夫] 廿 み来 「われとせぬりの谷川やうある石ふそわくる山のいか

われとへぬ ○サテモノハワガ身ノ上トイウテモ人時ニハ サシナゲキノ心ヲ含ノリ 班イヘバ コトニイヘバノ仁 ハニテアヤニクナル心ヲフクメリ [捨] 雑春 去歌 「それといへばいろの〳〵ぐろーを いのーぐろーを [夫] 廿九 永集 信捕 「われといへどもろて物のおもてく〳〵ひそのうちをぴすぐれて 回廿七 永集 如覚法師 「われといへばさもあーぬ云ををくねと [散木] 中六十四 「くるしにあひつの関もれといてやく〳〵あーるめ 回 日 大十七 斎馬毛衣 「われ といへばうれてぞこそあるそろ物のくろハ人につきげなれぐ [回] 下廿五 「それといへをあさめの山におそろ するもぐ〳〵の枝のおさひ身の世や

われう ○夷の名ーとふ [伊物] 五十七段 [彩勅] 去二 「こひひやあまのやるにやとるてみられーみ をやぐれてつるる [古] 去五 「延喜のかろもにすもーのワれ〳〵とれをとそなめ世をバ〳〵〳〵 ど [彩勅] 雑式子内親王 「あ〳〵その面めのとにかられてわれ〳〵そぞめ〳〵つるる [捨] 去五 [雑上] れるもふすもーのおハさけぐ〳〵れ〳〵のつーきありろ [タぐれ] 廿五 あまのみなれバ〳〵そさぎぶに うちとめぬさま云〳〵これもわれ〳〵なりとそみろハ〳〵ひくーーさま

われのりーき ○次ノ 我カ人カト身ヲタドルトイフ二心同ク 我ニモアラズトイフ意ニ [和つぐ] 七われ

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』　請求記号 837-79
ガラス使用

川のわれてゆまであそんとぞおりゐ　拾玉　一　みく月
みちちゐん　西行集　月蝕を題にて　いむとのひてやげ
やゝん
われかー　我悪　あげまき　四十九　わのがどーハろめくん
われさうー　植う木　廿三　われさうーうわひーづめうよハあーねど
われた　わレ木　夫　二十　新六為家　三尾山や松のわれ
れごと
われひ　わレ廻　内家マ千首　四十七　ひわさす竹のわれひまる水のさえぐにぎまよ人のるを
われちく　我もく　あのひ　八げまつひろゆきのみちくのへる車どものわれめくこのうこぶれる
るかまとぶれのもとさまどめ　栄雅の後　八　秋院よハ市
われかう　久安六年百首　季通　「のべでよくんゆるさのぶれろうこやいまやうのむさのこころさ
われさまど　うさき舟　五十六　人わろくいろろー心の内ハおがもとれさまでくおかひあうせ
わつる　月清集　上　「ろのよハ花をわさうの李ろのろづうまだまやいうそねーれね　模ぶえ　ろび
うまあゆみみどーのみろぐうう　桂　五六つやうちるる瓜琵琶にほぞの油をうちうらてうーくさせのろる
ろ〜そばう此額のわぐ〜ろく〜けぎヤうにてわづうまよみえさせめくろハさとみべさうさなくめでう
ろ〜そばう此額のわぐ〜ろく〜けぎヤうにてわづうまよみえさせめくろハさとみべさうさなくめでう
同　六一此うーろとまづるまと知こもれバその柱と屏風
うろくーさ君ぞ云ろ〜　同　九一いとつめさ知ろうれバ
みーう白ひうろれ私なハうぎうなくめでうーしきみめうとと此本丁のわころびさろわづうまえいれうり
みハーめて　夫　廿八　新六為家　「わのうーにいそのまのうそそれぶろうまかりうあまのさびーさ

わつーハー　。イヤノ心　イヤナフ　。ムヅカシイ　心ヅカヒナ　気アンカヒ　気ガスカレル　スベテイヤナル心より
後拾　ハイカイ実方　「みろのうみのもひかきそびわづハーきまけバぎのよ母子つむこ　ろうきこ　十れりくろこ
ろうの声にてあれバさそこ花ぶろくーくーふまづハーきまべくおぞられてのまひわれバわづハーけれぎやろ
ろり　ろうきこ　廿三　奏ーうとびんろくおぶーめ子ひりてやそうろうこまろうてまうぐうを。わる　下廿
ハありろり　さろき　二十　服ぎろなれろさへのそこおくすろ　同　同　琴ろん松ろぐハーくまうれ此ろ先のま
ろぐハー　わる　卅　松ぐろくーくさまてをろ美とんのひてあうすろ者とのてとハ也のハバ
ろくーもやてまふぎさのろん修もうれわづハーくおぶろて　作元　まやろさめむくまう
でまて子くこやづくーまりまぎりめまくまうこのあーんとりくろぐハーをみてけれバろく　わる　上四十三　や
まうぬこのあーんとりくろぐハーをみてけれバろく　わる　上四十三　や
うろーひまびうぐのりひろ　さう木　四　黒木の鳥居ぢやハさまぐにかうぐーくみえ
てわづそーれくさなよ　同　廿九　いろくーやろ　松うえ　四十一　人くの中をおーもひ
ろも世のろぐハろのそ〜おそろ〜うえそのみ　松うえ　四十一　人くの中をおーもひ
て出ろうまるこてやこハなぞくひさいもれぐいろ
くてれ〜ろ先こそのまひ出んとつれう子れ　わる　下七十四　人もさぶろ〜氏中のむつまの
ぶりにたそーかろ出ろくろーるをいひ出さろ〜
えんさる　えろぐ　廿七　あそれもひーれぐにいわづハーげれわひまろをみ〜もえまし
かぐ　相つれ　五　そろさまめわづ〜そのみときまれぶろ　よろの宴　六　わづろハーうえまく

なげずハ行ふつきまじん 【ワかな】上八十九 あやしとうちうなずきつゝくるさまなれバ見づハしくて 【うつほ】
十六 人くるがハしうるなり [redacted] それがおにハたのもしくみるをハワづらハしくろくし人さま
にくうん

ワづらふ 【狭】四上四 常磐とすまでおれもんごろすうしひおるべき兄のとがらぞすうけしすなえ
わくしとゆうひ給ふんとて 【同】四中卅六月比ワづらふおる給りつる人の此五六日ハいとくるしうり
給れど 【栂ノ木】下 それまでことかまハワづらひてまえでなんとしのまさ 【夕がほ】一 いとふしワづらひて 【同】卅五
おもくワづらひ給りしを 【同】四十七 かくワづらひときあやまをきくて 【まぼろし】一 我いとうとぶくとくバ

ワづらひ 卅ノ一 別ニ出ス

ワづらふ ○係ヘテイフ詞 ユヲ心之又難ルトイフ心ノモアリ 【栂ノ木】九 車より落ぬべうしまどひ
あへバさハおもひつかしき人くあてワづらひ給や 【あづま】十三 并又まうをつかしひ給えたみえワづら
ひ給ひて 【さかき】五 ことちワづらはせ給やはいふりうなどあつうひ給やれバ 【万】五卅八 かなうくにお
もひワづらひねのみしなく 【あかし】五十九 よをやへむんとおもしワづらはるれバ 【狭】三中十三 行方
れおぼつかしまり云くなしがるハげないくのワづらはす目とどまりて 【柏木】のそまりの林
にあぶて見ぐ承わしさるとちきくざりうん 【蔵人】一卅九 ゆえワづらひてあくまをおくとろく
【画合】四 人くぞのうしワづらひ給ゆるけりひと柏木の下風すずしく吹入れさせれバ云くおくあひて
云く 【ワ栄】初 くでのまつ世におうりて人くまどあひワづらひしを 【大かがみ】大住やすむいくとせ
あて云くなげしをおりワづらはせあひて 【ふるとみ】七十五 よにありワづらひつきくるみ人よりハみな
りし

ワづらひ ○世ノ煩ヒ之 【ワかな】下十五 いまじく一とぢをそむきて世のワづらひあるましくとハ
らせしくまくバ

な

ワな 罠 【和名抄】十五 五 周易云蹄者所以得兎也故得兎忘蹄 【万】十四 五 あしがらのをてもこのもにさ
すワなのかなるましづみころあれひもとく 【古事記】中五 長冊 【神武紀】二 宇陀能多加紀尓志藝
和那波留菟田の高城に鴫罠張るとり 【同】中卅 於和那美之水門河猿捕取其鳥而云々故号其水門謂和那美
之水門 垂仁

ワなゝく 【遊仙窟】卅 頬声戦ワナゝク 声ニモ手足ニモフルフヲイフ 【古事記】中下 手足和那々岐弖
不得殺 【狭】三下卅一 かくありのみげにみやゆるに袖も見えさせなうども仏のさうじ口は入てひと
とてきせぬひおもはずのくワなゝかれてもみまずるそられぬ 【夕がほ】廿七 此女君いみじくワなゝ
きまどひて 【あかし】 并ワなゝきこえてあやめずおもふすべくもあり 【末つむ】卅五 さへづる春ハとからくも
てワなゝかしうまゝり 【やどりき】十二 声いとワなゝかしうきさるを○是ハオヅゝノ心ニテフル〈声ノ
力ナキ之 【枕】四六 いとさむげにワなゝきつゝみなどもしれにハあしねげや所いりあくさち
ぶひていふことなるところなれバ云々○是ハ髪ノチヾレタル之

ワなゝく 【花のえん】五 ワなゝくゝ〈に人のとのもへ〈ど○是ハフルヘル之 【枕】五八 うちみぐらもるに
おのゝ弓にとあらしひさうなありてやむしまる矢のまてもおれてすくみさへあさきる○是ハ
事限リタル事 故オヅゝフルフニ 【同】六四 下ノ句ツヾケトイフ所ニ げにおもくきくあらんハとり所なくなれバさバれ
とていとあらしくきこえていたみあふれとれもまびし○是ハオヅゝ之 【大鏡】三 おぼれ
おぼえけれどまゐりていとあらしくのまとかけれど

ワなゝきたりて ○フルヘタル書ザマヲイフ 【をぐるま】四 例の硯之バ紙おきて出しきりひれさるを
みれバあやしうワなゝきくるにて文句云々

ワなゝきごゑ ○フルフ声之 【まぼろし】卅三 兄ぎみ云くそてかしく并しのびあへず死ワなゝ
きし声にて

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

わらべ　平家物語 五十五 ちんやくわらべどもそれバ

わらは　童 和名抄 二七 礼記注云童和名和良波未冠之称也 伊勢物 八十五段 わらはともだちのこころもまだえず 枕 七廿八 小岡に草かるわらはどもの 夕 三 きるわらはどもの ○是ハ名仕ノ童ライフ 夕 三 きるわらはどもの ○これハ女ノワラハシ 同 土さみしひわらはへ ○是ハ源ノ名ツレモノ殿上ワラハシ 枕一さみしひわらはへ ○大将ノ名ツカヒモノ童シ 狛 名一大将きの此襖に物えかけるおれいわらはどもを 又のヨツクリツル 男ノワラハ 女ノワラハ ○タバノニモツカヒ 同シナベテノヲ廿ナキ者ヲモ又我子ヲモイフ 東中 十 寺門ノ稚ノヨウニ わらハ 同シナベテノヲ廿ナキ者ヲモ又我子ヲモイフ 夕 廿 十七 ○ものごと世にあるさまざまのわらハべのこと 和文選事京賦注 俳子説後ノ世デモイヘル類シ 万 十六廿一 小兒等をハなにもやそとをわらハべ ○ツカヒ人ノ ○是モ男女ニカヨフ ワラハ 四十九 いよいよわらハべみにつくらんちひさきわらハ 枕 きわらび 初 僧ノツカフ兒ノコカ アザリ女ノ子ノコカ ○ものくさきわらハなりけれバ 又ナベテノ子ノコカ

わらもち　○俗ニイフヲサナ友ダチシ 狛 雑上 わらもちさしあひさる

わらはやみ　童症 多武峯少将物語 ありつるのこりをみとそびにおこせたるわらはやみ

わらはおもし　童生 枕 四十五 悲儀のようにおしこさにくきものハわらはおもしとぞいふめる

ドヽ云〳〵仲忠ゥわらハそれひのあやしさをせちに侍らるゝぞ 同 十七 早苗トル女ノ郭公 コウタ不ニいくらゥ一人のわらハをそゝとひいらんなりとぞいへど 同 十七 早苗トル女ノ郭公 後生えぐ〳〵あやまれるものゝ

わらはやみ　瘧 ○オコリノコト 和名抄 三 説文云瘧俗云衣夜美一寒熱並作二日一発之病也 続日本後紀 十十瘧是小不能病巨人故曰壮子不病瘧盖人曰君子不病瘧蓋人以疾瘧為奴婢瘧 ワラハ 和泉式ノ続集 わらはやみとそいへるよ ○ワラハメクシ 枕 あさぐろき廿 ちいさきハわらハびてうろ〳〵もぐみ〳〵とそみゆるあるわらハべやとてわらふ 栄つぼみ 十九 ものすれバわらハべあそびの

わらハべ　上四十三 牧わらハ心のうちもあらハしてあるまゝにそれがされけるを 栄つぼみ 十五 ○みなわらハべ心をおもひやる 枕 わらハべ 四十五 わらハべちよのとおでさくらの 枕 わらハべ 四十二 物六五 信実 みすのまゝより笛のわらハべ 枕 わらハべんとやう 童殿上 ○まろうと

わらはあそび　わらハ遊 風俗 六 ○もゝしきやこのわらハあそびにひるがほといふ名ごりとゞめて 枕 九 この渚ちえにしのちぐう昔のわらハあそびの名ごりとゞめて 枕 夫 廿七 家集 西行 さがなきをけるにたゝれうさんよみけるに 竹馬を枝にかりよハたのむるわらハとをりいでゝ 和泉式ノ続集 そさのわらハあそびをしつるなるべし

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』　請求記号 837-79
ガラス使用

をみやへのみちゝん

わらはしく　笑ゝく　盛衰　十卅四　をとまちうと笑ゝくぞおもはれける　同　廿五十一あゝく
笑てこゝを抜ぐてにくみひとうひとうのけしきひとつをとしく
わらはすがた　童姿　拇つか　廿六代君のみちゝくまうくおびやぐ十二ばて元服ゝく
まみ

わらはともだち　童相撲　三代実録　七廿六　天皇御南殿観童相撲
わらはそばづかへ　童随身　そとうつ　廿三
わらひ　○今按ルニ細流ニニコヤカニ〉トアルヲヨキエミガキナルヘシ　狭　一傍注和ノ字〉　弘ノ字〉
わらふ　上卅七　これハいとわらくなのぞるねのまつりくあいぎやうづくと　拇ぎやう　五　女ハいとわらくなにぎやかしくもてなしひむすめれ　同　卅四　大勢のおとゝやうなるわらくなるけはひなさくみれどもまうあいのおく　えされてねんどくまうと　わらふ　三人ぎまのわらくにけらうなあいぎやうづきみのゝとあまちわらくなあいぎやうづきみえざりける　狭　三上　十六　此ゐ方ハこゝろくもとらまほしくまいてつぎとおねす　へどもおもひとりみうらくに　同　三中　卅　若き女のゐけざうさにハおとりてるゝみのゝこわらくにてらくびやるハこゝろ　同　一廿八人ぐうハいとでとわらくなふくらぬこゝろれさてなるべし　大ぐみ　ハわらくなをゝハまもくせのくりしぶをんめり

わらくうど　守治拾　二九　ひくあぎふくしされみるわらくうど
わらぐつ　鞾　和名抄　十二廿三　鞾和名和良久豆　草履也　守治拾　九五　おさいわらくつと三人だらもある

鯉なゝして　同　十五ニげんの物宗務をさゝまもりてうらぐ
わらは　菓屋　彩古　雑下　蝉丸　世中八ゝそやかくそや　同　わらはとうたちのあそびをみてわらふ
同雅　我下　定家　駒のかるまさものまい我ゝけてわらはやそげしをうありてとるあひだゝなるとゝやもうそぎやさのわらはのすきハかくもあ　我のしらべをねまのこそ　同　廿一　土佐門院　あま坂の
我の形のこゝろすされこれやあぐこのおもてなるべん
わらふ　笑　拇　十三　そうげどのゝゆゝのひてゐぐうとゝひとゝ
らされのひとんう　同　十六　ゐてこゝもちわらひて　まつ丸　十五
まするこゝ心ぐゝれ　拇　十　ゝくとわらふ　狭　下十　ぎやくとゝこさうゝやそうと
のうつゝもそぶきにゝいるもあり　拇　一五　右近内侍めしてそくるをを　同　十二三わらひのしりて　同　四四　ゝるわらひまぐひて　ゝる
脇ゝんあくれおよゝもうてまゝの物すれバ又ゝゝひさゝらぐ　同　十五　ゝるわらふ人三人とゝてつ
ひ合ゝゝそゝる　狭下ニ　五　ゝくとわらふをゝてくゝや脇のくゝ
さゝへて

附　わらひぐさ　三内記　廿一　近江のさゝみやるゝそゝろぐすぎさ
ど

わらみ　圓座　和名抄　十卅五　圓座和名和良布太　圓草褥也　夕ぐら　十廿六　みるこゝりゝのそのゝ
ゝるわらみぐゝおそくゝりのぞえにくゝ　拇　六二　せをさゝ
ぐゝひさゝらゝれゝり　大納言殿ハゝゝ　ゐゝ　ゐゝ　ゐゝ
ゐ分ゝんゝそゝゝそぐゝゝのひぬ　同　八十　わらみぐさゝ出

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

字治拾 一八 ろ〳〵みづとりのぞめ〳〵のがせければ 伊物 八十七段 さる所のうみなかにとれるわらびとをぢけそ
〳〵てさし〳〵ゐさる石あり 拾四 雪山ノ水

わらび何 わらびはさ 共ニ ワラノ呼ニ出ス

わらび 言葉大 古 物名 ませんは師 「なつくさもろもろもみえぬまでにわらびとをぢけそ
めにけん

わらび 蔵 和名抄 十七廿 薇蕨和名和良比 初生無葉而可食之 倭訓 春上 志貴皇子 「石ばしるたるみの水のうつのさわらびのもえいづる
をでさるとよみり但保氏のさわらびの巻にわらびとつひといへり
北こそのぐよさりやまびなるトわらびるる 文明六 「なつの山のうすをけさみれバわらびのも
ゆるけろありそり 方丈記 東よまそてわらびのすぐろとしるをそ衣の原く
もて 落毛 雑季 「むしろさのもろうらうらひるのうなかさる日わらびのものうびにて 新六三 壹
内大臣 「さらびはるくさのやのつきわらび外山さみそてゆえわらるる 夫二仲四 「雑くさ〳〵ろりもと
めそ〳〵さらわらびさる八大殿よりえのでにけり 同 日後九条内大臣 「ゆくさのもろもろもやすくる
まで折のうびゆもし山のさわらびのさわらび

わらび 蕨すべ 字治拾 十五 あるけるあずまに掛〳〵れたるものをみれバわらびなどいふりのたぐ
一ほどら掛〳〵れり

わらび 王 竹とう 「さる人ぞかさうぞくのさまよ〳〵ゐるものの
〳〵ほしき人ぞ

わらび 椀飯 夜仁記 上廿 恒例ゐれバ正月朝日の椀飯をバ時の管領畠山左衛門督政長いろ
中勝て被勤ゑ 同 月廿一正月もとや中の五日に成ぬれバ今日十五日八山名の家の椀飯ゐれバ恒例

ゐ〳〵被勤 やくり本 八十 わらうとんちゐ〳〵ハようのつひのやうにて
ゐてこれをすむ 落くぼみ 七

[redacted]

◦今モ田舎ニテハイフ詞ニ。ワワハシ

振舞トイフモ是カ

わらにおうご 王女御 ◦コハ王孫ヲイヘレド皇女ヲモシカイヘリ 宝 〳〵ハ王孫ヲイヘリ 宝 十四丁ウ
さこそ〳〵ゐ〳〵ゐ原おいありてまわりをりおるじ〳〵王女ゐにほてさ〳〵ひのみを
てろろづのわ〳〵くろんの人ハ屋よめ〳〵こがちろうれバ

わらげづき 王げづき 柏木 三十 女ゐのこやうちなくちみ〳〵ぬ
ざくうくそれハ〳〵まそ〳〵 狭 二上四十七

わらくや 二六

わらび 往生 拾王 七 「わろるる心るれどやわりのもとハ往生浄土隊終正念 観経本 廿二 我當
往生不樂留浮提備忘世也

わらハやく 往弱 ◦俗ニイフ柔弱 柔弱者又天性ノヒヨワイ病身ニモイヘリ 続紀 五七詔曰凡衛士
者非常之設不慮之備必須勇健應堪為兵而悉皆往弱未不習武藝 同 六四氣力往弱筋骨裏耗 三代実録 四十六
大天資往弱病累稍仍 延喜式 廿八 兵部省 十一凡軍数其身往弱不堪武藝者国司解任具状申官 同 刑部省ニ
凡犯罪之人或往或弱云〳〵 小野宮年中行事 相撲白丁云〳〵迫期日而貢往弱之者 盛衰 四十五 頼政ヲ
じやくの塾にてそれ〳〵ゐ〳〵ハ衆徒ゐる名ゐまで 同 十八 これ〳〵にてろ
いろづちハ龍神ゐハいひなが〳〵往弱のやつが〳〵ありあれハ大龍王の辺ほもつつず皆をろもそ
ゐるさ小竜め〳〵ゐり 同 諸国の人民百姓がりくに職士定使をて往弱の奴が〳〵の家園になり
まされバ怖恐れて相ろまてひがことをせ〳〵理を失ハじとて 同 廿二十 妻にさ〳〵をけるハ今日武

以ㇾ為ひとろ安堵しあざとくて任弱の商人に烏帽子こあれどの人の荒量ひ給いつる百町
うるとつぶやきけれバ 著聞 五五十五 退出の時任弱の尼一人出まり右大将に向てみところ文
書を一枚取出して云和泉国に相伝の本領のいをんにれーとられていをたこーいへる身の
任弱にてまうず 同 十六十七 治承のさうーひうまの名馬そやいひける老うる者香の
ひとこれのーをれさるを見て任弱の体にてものくひてゐ
わく 簸箕 後拾 雑四 定頼 「くるくまをおれく山のこのの
物六 五 知家 「それくくてわくてのいとのいくめぐりのちぎくと
収録者也 忠見集 「みるそこのわくバりにやる らんるる人もるをさなのーらいと
わく 湯 六帖 四 いせ集 「うさこのかくとく時ハをみざ川めのまんにこそ蒔まりをれ 夫木
二いとあさまーくるのーわくさこれにおぶ男に 枕 下七十五 難見の声るぞよろづるあハれあり
ーふることをわくぐにおぶ(イナシ)えてせちにものーあハれにるるーー
領にあうるくのけーをこそうれーげおれ云ー女房うちつ
さいづる 山家集 下 「せきさもてさハとそるず澄つせよわ
わそ 令傷 前二出ス
わく ○差別スルン そこのーるくやいるいづれを
六一くさるどういさこうのとがをつきあうて そこぢ 六中のー
ーそこるおやむさもみえてわるぐさるぐおかかぐ
えわれず 千載 春上 主房 「にるひもてわうでそわくあのをるそれよみえのるのよれつき
ゐなし 六いづれもわうを親がりるど まつむ 八 「さーわぬぐ
いづれとわうねどや 拾ぐえ 六 これわうせぬくれわうみせんと笑えのひてゐひとうぐめーて心

みさせるく 同 十八 わぐとくのれぐーるわうせるひて 夫 廿六 春集 主房 「うづおれバさこうる旬も
わうさやさこーるぐわぐこひのあふこのるを 拾 雑下 「さる秋よおるひみされてわさこうねつこを
つりつーうつる心に 新六 五 光俊 「をこと山非さくさこそちらふなれわくこるにこーむん
新後 秋末 「まの夜ーぐのあみぐのをまるまでわぬ月のひとうるうこ
わくる 狭一四下廿八 おぐとうとる心をくて手ーぬりの世るおをぐーもちすてくのこい
いちさーせるひて 玄玖 六 うとくーくおぐーわくる心を花やうーみん 夫 十六 宣秋門院丹後 「天のそこーおるぐそ
ざこーえこるにらぐみバわくる心を花やうーみん 夫 十六 宣秋門院丹後 「天のそこーおるぐそ
ららうふるるさにひうりををこの冬のの月 続後拾 秋下 行家 「山
みのさまぐにわうるやくのこるるるーん 雑上 後守多院 「せきこうるなハーろ
わくる まつ山 十三 今ハあさぢわくるくるあとこえたるに そこぢ 廿九 かーびつぐろる
れどのをおさされバみぐうがそーを中をとけいうるひて 同 四十八 ろづの赤をめあり知そ
わぐどのにとけ入て 枕 五六 ろうおくるけみて答すれバ 東や 五十六 まろこそふうがくくる
けくれ 枕 十四 わーますれにわけまるるぐにを出させる 同 五十 「ねハみぢどあそ
れとぞおのみむさーのつゆるけわぐるきのやうと 玄架 雑負 「ちぐうあふおのーーつぐく
こやまだハわけゆくそでもすぐーうけり 同 冬 負時 「
りわぐるけそむるみのーら書 新千 旅雅家 「そちーぬ
にもあるーそでる 拾 愚草 上 「わるさハーぐるうのみ
々り

わかれ 〇夕二廿カニシ 万 五卅 「わくバに人とあるを人るみをあれとつるを 同 九 「人と
なることバこをを和久良婆にをれるわぐ多ハをるやいきやきみがまにておもひつ 古 雑下 行平

ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』　請求記号 837-79

ゆゝしきさまにてぞわびあへりける 〔こきん〕十二 このきみなひかれてよろづにけしきばかりにわびあり
くる

わびし **わびしら** **わびしと** **わびごと** ノ類別ニ出ス

わぶ ○添ヘテイフ ワヅラフト類語ニテ ユテルコトニ兼ルコトモ聞ユ 〔大和物語〕六 八はたさしくあり
しかにもそゝもしありてあればいとあはれになんなきわぶなる 〔万〕十 廿五「さしくろみなひはびに
ありまたうちみなをびさらび美にみえこそ 〔うつほ〕 人まろくわかれしわびて 〔わか紫〕
四十二 かくていひつゝもとぐしありんとなぐさめわびてめのとゝもありけり

わざせ 我れ弟 〔平家物語〕 一 十七 わざせの中納言によりてこそおくされてあはれに

わざ ○添ヘテイフ詞 事トイフニ同ジケレド サシツカヒザマ異ナルカ ● シヤウ モヤウ ■ シカタ
● シワザ ▲ワザ 其余ハ事(コト)ト同ジケレド因縁(インエン)チヤトイフ心ヲ含メリ ● 〔伊物〕 六段 まづしけれバをそ
るわざもなかりけり 〔わかる〕四 かく心うきはたゞしきみぬわざもがなと ■ 〔夕がお〕二 いとゝあびんなる
わざありや 〔桐つぼ〕十九 いとこいぐしたるわざありと人のみるまでひき出さしめさるげ
ありけり ● 〔万〕四 四十九「あしひきの山にしをれがみやびなみわがするわざをとがめたまふな 〔わか紫〕九 例
の心なしのかゝるわざをして ▲〔古〕哀一「こひしねとするわざなりしぬバ玉のよるはすがらに夢
にみえつゝ ○ 〔桐つぼ〕十三 またこまくけ月日にそへていとしのびがたきはわりなきわざになん 〔同〕廿五
こまかくおぼしなぐさむやうなるまあはれなるわざなりけり 〔すきうじ〕六 わろびたることぞや
出くるわざなめれバ 〔桐つぼ〕八 よろしきすにだにかゝるわかれのかなしからぬはなきわざなるを 〔玉かづら〕
卅 さいそひのあるくるかをへぶてあるべきわざなると見給ふやうなる 〔万〕九 廿三「人づまにこれすら
よもん わがつまに人もことくへみの山をうしはく神のむかしよりいさめぬわざぞ 〔天徳哥合記〕 左大臣
しておのうちまけのほざせさせやすなる 〔古〕序 世のなかにある人ことわざしげきものなれバ ○事(コト)

ト業(ワザ)トニツニ事ハ政事人事ノ外天然ノ事ヲモイフ 業(ワザ)ハ職業シワザ之

わざ ○子生ミシコトヲイフ 〔栄花〕上 十六 宮ハ此琴なとさしやしつれバさばかりのおくつる
ゆかろやかにわざとしつるにもわかされずくるしきなんもあくておきさるなめり

わざ ○法事ヲイフ 〔古〕哀二 ものゝつみ寺に人のわざしける日さいせんはしのびてしにて云く
〔顕輔集〕 わざのすゞもいそく人まへ出あれど我身ハ花衣そしとおもひてあるに 〔散木〕中 十四 帥大
納言つくしにてうくれおはしにゝければ云く 見云く 見云く わざのすりてくるしけるよし云く 〔伊物〕七十七段
それからせるまひて安祥寺にてみわざしけり云々 けふのそのわざを感くて春のくらへにふなる
まはしくせさまへ 〔あつひ〕廿八 もろあくとおけバ此わざのいそぎなどせさせたまふ 〔こぎつくし〕卅四 此
ざなどのつすゞよりわきてせさせすへバ 〔さかき〕上 四 のちにかゝるわざなどけしく つくりまうのく
さまさまゆ 〔柏木〕卅三 此わざのおかしぶくはさらにぞく

わざはひ 禍 六月晦大祓昆蟲乃災高津神乃災高津鳥災 〔神代紀〕下 十九 自當(アタル)火難(ノワザハヒ)無所二抄損 〔古語拾遺〕
十 妖氣(ワザハヒ)既晴

わさほ 早穂 〔万〕八 五十二「わさぼなかわさひつくれる秋の田の早穂(ワサホ)の蘰(カツラ)これどあらぬか 〔夫〕九 初六
二 衣笠内大臣「いまはや秋ちかゝらし山田のわさほのすゝ未なびくそ 〔続拾〕秋下 前内大臣「夕日さす
門田の秋のいなむしろわさほかりしきいまやほすらん 〔新千〕秋下 為広「秋さむくつゆくしてよ
りさ山田のわさほのくろいろ付にけり

わざと ○ワザくミモトメテノ心 又別段取ワケテノ心モアル故 次ニ出セルヤウニ轉ジタリ 業(ワザ)
トニテ語ノ意ハ役(ヤク)トニ通ヘルカ 〔山家集〕上「よのすぐしをげなくふくあらしるわざとは鳴息の
そむるめみむらと 〔すきうじ〕十 うゐん人はわざとこくちまとぐんやは 〔同〕卅一 わざとなひまるたゞ
ら 〔まつひ〕卅 されどつれはの此ようとひとてわざと待るめるをハしくあらハこえゝへし給ふ 〔桐つぼ〕

世ワざとの此学文ハさうもあらで琴笛のねにや [夕ぐれ] 廿八 ひぐらしの声うてぬ会仏ぞする

ワざと ○是ハ役トノ心ニテ 其事ニ打カリ居ルコニヤ 上ノワザトノ二心同ジ [万] 八ニ十二 つきもせずつくれる秋の田れきあのうへのみわざ [まつむし] 九 中楼のきみわざく琵琶ハ ひけど頭の君心ありきをすてゝきゝれてこぶさまさらあるゆくをれをつゐ妃をおえそむさ ゆえぬよ

ワざと ○雅言ノコトニノ心ニテ 別段ニ ベシテ 取リワケテ ソノヨニ [うつせみ] 三 秋あぢきなきこゝろひとつ人なびくこゝろのわざとこそ [あふひ] 十五 ものゝけとてやわざとふうさはぬ [源やふーと] 此わざとまきらぬこゝろのわざとこそ [松] 九一 はおちくハれいのすびつの 火こちくれこゝてそれにハきとくもあめど [同] 四五十七 ハぐうにやあーんちひさこゝハあゝ ねどわざとおこるなどハみえぬが [同] 六八 手きの仏経をいとあゝ〳〵こるく打いぐさこゝ るにわざこゝろ〳〵あず [狭] 一上十三 うやこのうちつけさこゝろなどハわざ [同] 四 十五 肉よハわざと良今なども衣のつれぐれわぶさこゝにハ [同] 三上十六 をさおくこゝろ ヨリカリノヲカキ いづれのさこゝろわハこゝ [今雅君] みぐこゝやこゝろ ハなさ中わさこゝの此方ハ 夜のあゝハー 少えあひつれバ女房あゝみえなゝぬ ざてなりあゝこゝよ [同] 一上十二 五中ニテ分ち 今わざこゝあゝーせんといさやさまし て。是ハ別段ニトモ ワザくトモ [ぐり史] 四 くわざこゝ

ワざとハなくて ○モトメテドナク 此下ノ詞ドモ皆 ワザノ〳〵心ニ [松] 九二 わざこゝハなくそひ けつきまみやびくよ [守治拾] 七六 其日にうりてわざこゝハまくそそこゝりわこゝろ れバ [拾遺 負外] 上 風のうへにうのひこゝろさえぬあゝれをぞさ

ワざとがまし さまざま呼び 十一 そのうぐのなさまでわざこゝろ えゐくれハ [まつむし] 十三 えうるさついでよさくへそこゝろ うのくまひわされど [画合] 二 ゐてうやおぶしまこゝろ

ワざとごろ [松] 十二七 後朝ノコヨヲかきこゝろ つきぐくさを卑ちくよびよせて折さめさて

ワざとなくび [狭] 二上八 わざこゝろぐこゝのびやこゝろ [あつもり] 六 けくさめこゝろ

ワざとめく [まつむし] へわざこゝろさこゝあゝ火をぬ [旬くや] 十一 ぐこゝめきて香にめづるおやひとゝうんこゝて

ワざとも 俳優 [狭代紀] 上廿八 巧作俳優 此句中世の文にて

ワざくー [うづみ] 中四 なよハわざくーくかまく [大ぐみ] 序 入夜夜のこゝろえとやさんとおりふりぬよけくのとがなーこゝろゆゆしれぐ

ワざさ 早田 [万] 七廿四 わそのくみのわさびまひてびゝまーめぐにハへよりつこゝん [神楽] 俗角 あびまさを [後] 恵一 折うくーおぞこひくさやまこゝちみるのわさ 田のおもひ出つ [散本] 中四十一 秋まア うこゝうのわさびのなこゝぶら [初め] え衣笠内大臣 わくこゝみまろ [夫] 廿三 永隆 みち川のあやさられて山こゝなるみるのわさびハさるへこゝるなり

ワさつの わさ角 [夫] 七廿三毛 衣笠内大臣 わさつのとこゝろ

わさうり

わさなへ わさ苗 好忠 三月終 夫 「わさなへをやどのうゑにまちせおきてわれハ花みるいそがし

わさび 山葵 和名抄 十六 山葵和佐比 補益食也

わき 分 ワキヤスシ 俗ノ所ニ附ス 万 四 四十八 「するひとのこころわきもちず妻こふる心ハけぶり

わき 腋 和名抄 三七 腋和名和岐肘腋也股腋下也

わき 腋ノ角カニイフ 江次第 八廿二 最手不決腋亦希ニ決ス 同 出 右ニ右最手若助手

わき 側 弁色立 廿二 盤戸側

わきかくす 守伯格 二十九 袂をもてわきかくしみつゝなみだをながすをいふ

わきかゝむ 守伯格 二十三 男が屁 血あせばうり必けまくといへバ

児のなくころ 孟子 ろ〳〵

わきさくく ○今うでをさすとらん〳〵類也 新古 五 行来 「ねこげなる猫があさてのむざすれ

これにむらひてわきをろく〳〵ん 守伯格 二十三 なにめ〳〵しき男が屁 血あせばうり必けまくといへバ

さいく〳〵相撲とをとりてわれがけてんにいろにけいろ〳〵ものと救済(ガウザイ)してこそいうめ

今昔 十二 君亦ワキテ裸なる服をとりてとをれうりて 続古今 後 五 春隆けいをろうそくをとりてていさまうくひざまづきさう

わきかへる 十訓抄 九十九 男の臭をこれバ服のいとうてい

わきかへる 湧ク 続後拾 哀一 後朱 「そらせ川いさりくさずわく水のわきかへるまへに沿ひをくるむろのやしまに 同

そでぐるみ 夫 十三 後朱 「川ぎりのけぶりとみえてそらまでもわきかへるるいそまつ〳〵ろる 新拾 哀一 氏経

廿六 衆集 同 「わきかへる波ぢさえくさえわたりてやれさえてりぬ

「すゝするよ本のそにうづむ谷水のそこの心ハわきかへるとも 同 空也 「谷ぢやいさまをせゞみ打

あのわきかへるまでぞなき

わきくそ 和名抄 三十七 胡臭和岐久曽人腋下臭如蔥鼓之氣又謂之狐臭 万 十六 廿二 「ワキノ草

ハなうそやをさてをわきのわきの腋草とうれ

わきまくでろ わきの下 これハさるわきまくぢやをさく行〳〵ぬりのみれどもその中なれ

れづゝさま〳〵いひ行〳〵んなどゆえて あげまき 十三 中〳〵るるわきまくに心ひかんとて

わきまき 大ミづら 六 打〳〵みづ〳〵とわきまくさゞめあ〳〵そぐ 拾玉 十九 さゞれ時のおがくづさえおるじ玉衣ぢやこれ

はりて伝るまえわきまくに打〳〵 とこ 五 ふるそれ時のおがくづさえおるじ玉衣ぢやこれ

バ伝るまわきまくられぬよ

わきそ ○アルガ中ニトリワケ〳〵 後 秋中 雅正 「いつとてもひのめづ〳〵しきうる 同 雑一 「我のこゝちやうつ〳〵ぬあつうきにてわきそでおつゆうそ

続紀 廿七十六 大御形毛圓満天(ワキテ)別好久大未之末(世俗)○此下ノモ心同ジ 差別ラシテ 重之 八 「うぐひすのこゑ

ありにこれもすひものを声とわきそてぞくハ〳〵ひける 夫 十五 宗永 「うつの山うつゝとうのこゑもめ

いろハわきそてしぐれやおそめんん 夫 同 トキハ入るあ太政大臣 「このさとをわきそてしぐれやそめつらん

いまるのふ秋の秋のゆみちで ○分明ニコレガカウト 竹とり 六 らくや姫のかもこをみていとくうハ

しきはゞそおもりわきそてまことの皮あ〳〵んとやまとごゝろ

わきてや ○いつも已ニ出ス さ〳〵わきてや さノ部 後 雑一 右衛門 「これのこハ五ゆくゝめ

あつきにわきてやれけるこその春うる 発心集 中廿一 人の国ゆ最愛のめるこるなゐこゝろし

うとりこゝろるさいまるくんのさまへれバいまゝめやゆるりわきてまことの皮あ〳〵んとやまとごゝろ

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』　請求記号 837-79

ガラス使用

ぎりつぐくれバえわめ〜れぞありめや 同 中十七 いくさはづ〜ホのさ〜〜なりくり

わこてをかハ〜けとぞひろ矢ひろてけるぞ〜

わこをあぐる 佛腸 [神代紀] 下廿 畫者如(ヰ)五月蝿而佛(ワキアガル)騰

わこをあけのそろや 蜀杉 [和名抄] 十二十七 蜀杉和岐阿介乃古路毛本朝式云鉄掖

わぎもこ 万 一廿八 「吾妹子とともに寝ねば肝(きも)やつぶれぬ 雄略紀 一願謂皇后曰吾妹稱妻為妹蓋古之俗乎 [仁徳紀] 「そこぶるのさぶしけくにハあ〜ずわぎもこがやど〜のそらを見つゝぞをる 古帖 五下 こうもとぞ(ミイ)あふ〜をみするぐもるうるをしさ [頭書] 「うゝのあく〜 やともむ〜ろうも 古帖 五下 こうもとぞ(ミイ)あふ〜をみするぐもるうるをしさ [頭書] 「うゝのあく〜

されね 夫卅五 万 十一 「わぎもこがねくたれぐしとさる沢の池のへ〜まもりつゝ

大和物語 「わぎもこがねくたれぐしとさる沢の池のへ〜まもりつゝ

今ハひとうぞわぎもこがあひみてあめんをゝのほや 同 「わぎもこにいうてあ〜せんそまもれ

本の校ゐゝそ〜〜のへゝれバ

わ〜 鷲 万 九廿三 「鷲のすむ尾ぬ彼の山 同 十五十 「つくばよにかゝるく〜ゐ〜のねのこゝろなきてわ〜くんあゝとなゐ〜に 和名抄 十八三 唐韻云鶖大鵰也和名於保和之鷲古和之

わ〜のこゝろね 鷲の高根 令集 雑下 師時 「なぞ〜ゐ〜のこゝろにてもむいぐ有ける

山家集 下 「さ〜うえ〜心の月のゐ〜ハれてわ〜のこゝろにもむいぐ有ける

わ〜のやま 鷲山 翻譯名義集 三十七 耆闍崛大論云孝闍(ママ)名鷲崛(ママ)名頭是山頂似鷲墟(ママ)佛告諸比丘此山久遠同名靈鷲云〻西域記云宮城東北行三四里有〻此云鷲峯亦云耆闍崛山訛也既棲鷲鳥又類高臺 後拾 雑六 尺教 康資王母 「わ〜のやまべつるるやふ〜らんつゐにすむとる月をみぬうな

令集 雑下 静念 「吹ゝとゝ〜の山風おろセバえのうゝ〜のみ〜やまのかりにあゝ子ハ 月清集 上 「ゝて〜も

為くむをゝさゝるよゐるをわ〜のこやまのかりにあゝ子ハ

わ〜のみね 鷲峯 [万] 上 八十三 わ〜のこゝろをバこゝろ世のまぐひハふらりけるを [彩後] 敦教 太上天皇 「ゝ〜のみねにハとゞろにハとゞめ

わび [古事記] 上 故其日子遅神和備(わび)豆 [万] 四卅四 「さよ中にわびつゝをるに

あるさてりとな [ワビテ] [ワビニテ] [ワビフ] [ワビアハル] ノ類ハ ワビノ所ニ附ス

わびうた [行元] 一 ふくをうさてやれぶらうこゝろ (わびうた)

わびごと ○言カ [為バうま] 十七 何とまけれどさまぐ〜あるくんこゝろのわびごと [散木] 下廿六 「あやしこやくんこゝろ〜ん

〜れぶまさるびこゝろをとゝさ行つめゐるにあこゝをわびこゝろ〜ゝてぬさにしてをる多とおりくバ

わびざれ ○ウチワビナガラザレタルヲ云ナルベシ [うびうろ] 二女房よりけるのこひられバさゝべさおやゐ忍よえそざりくんわびざれに青な紙を柳の枝にひすびつけらるを

わびし [古] 我上うゝ〜ず [大] 「そのの秋ぐるかゝよわびしきそる寿生田の山の鳴(山鳥)の声 [後] 「その中にわびしきそる寿生田の山の鳴(山鳥)の声

[古帖] 「ねハあひてのちのあハめもうゝゝ [同] [古帖] 「為(ひ)ようれ(思ぐ)とゐみて(う)つゝ(ね)てもびしきうち

ハ秋まさりなん [同] [同] 「秋風のやまさしみバ(山因)鹿をさむみわびしさ声にわれもぞおく(う)

あぐバらゝ〜けれぐつゝさゆうりにこそ〜〜のゐふを出君いとるびしくんうゝ〜

もるわびしくあるまぐきるとおりへバ [同] 廿八 くさ〜〜ゝ〜ゝんとゐみゐ [古] 「わびしくんうゝ〜

世八いよわびしくんとみゐ [古] 「わびしくんうゝ〜

ん [同] 「今ゝうハ梓てぐにみぐをるすさおにいつる秋ハるびしくんうゝ [後] 秋上 「秋風の

打ふさそむるそぐれハそ〳〵れんぞ わびしらひの
てねざめのそひぞわびしうひる 【うつせミ】 われも世
さで 【おらび】 あかむともなくとうくつくろひられど
くてやとるこのふ 【古】 旅 舟にのりてわらんとするに
ゆかずして 【貫之集】 六 「わびつるもわがみをおもひじくハ
ふしがうきねの草にはるん

わびしらに 実方 【芝万】 「秋のむし〳〵何わびしらよ
十九 【朗詠】 廿五 「わびしらよまちらあかさそ更行の山
ふるこくまもみぬすゞ虫ハ秋わびしらにそなくなる 【猪】 七 物名 「秋のこにそなるよ声のするこのみ〳〵げにあやうり初
おつれバまびしらよこそむしのねをも 【猪】 玉 冬 「やどもあ〳〵けさわびしらこそきらるあ
らちやまの雪のタぐれ 【古】 「今とてあるこのむしのわびしらよりもまさるへしや
わびゝと 俺人 【万】 九 廿三 「惑人ハねやもあさつくらうつさ 【古】 秋下 「さびしさのわびゝと
本のすゝきのむらぎりくらうつ 【後】 哀 「わびゝと人のうらとてきみがうつせバ袖のそみこそ
いろりみえまし 【戯本】 上 卅五 「わがつるいつるそうさきさびゝと人のおりみこらんさみだれのそら〳〵 【同】 中 十六
「舟よそハとにとまれとわびくのなぐく心ハとぞさめるうものを 【俊名】 上廿 「さびしさハ八月日のタぐれて
きてれけるあけくれひとりこえをなげめて

わせ 早稲 【天】 十 あき 「わせのこのそろひのそろうわりの非のやしろまつるそろ 【万】 十 廿六
「とゝめ〳〵にもきゝなひのわせと刈時にありにそ〳〵と 【萩】 名早稲 和歌

わせんやう ワノ下ニ出ス

わせもり 許ニ同ジ

わそと 和ト ○万葉ニ和シケル寸其ノ許ノ返哥ノ如シ同ジ心ヲヨメルトハ異ン詩ニモシカイヘリ
本あとゝして詠返ス〳〵 【拾】 哀二 万葉集和〳〵ゆりのに順ス〳〵
ゞよめるゆゑ〳〵これを和〳〵ゆりけるゆゑ〳〵 【同】 中 六ウ
せられよう〳〵ゝとゝのつゝとれにくり

わすら 忘 【古事記】 下三 れ和須礼米夜 【万】 一廿七 「家なるいもをわつれて
「うちみてそいまハゆきなれこれをくハわつれ〳〵時もあ〳〵 【万】 十 十六 【六帖】 五 「おもひつれるんものとハゝとおもひけるみ
るくんのするものぞこれハ〳〵ゝつゝをまそ〳〵わすれ 【六帖】 五上 「わつれるんものとハゝとおもひけるみ
れうゝぞまさ〳〵ろうける 【新古】 旅 来蓬 「あさゝにきゝ
の中山 【六帖】 五 「ゆく〳〵これぬんぞ今ハうゝめ〳〵ゝ 【後】 哀五 海琴又 「うろ
せゝのむら〳〵ゝなるまでもわつれんとわりのわれ
れもさゝぎらわつれなのそそ折ハそつとゝ 【六帖】 五 「わ
いつゝのあくうわびゝ 【同】 日 「うゝ哀ささえねこうろ
【同】 日 「うちうゝ〳〵わびいづれバいそのうみありよ〳〵ひい
わのあゝ〳〵もそ〳〵ぬをわつれやゝぬるふかゝよの月 【新拾】 秋上 公雄 「くもの上にるれゝ〳〵るのおりう
げもわつれやすると月にとゝぶや 【新続古】 哀三 雅後 「とゝひこゝてうさゝをゝうゝ〳〵とふべきれわつ
れてとくる中のちひや 【続千】 哀五 負源 「ちぎりゝハさて山のかのわつれあわつれのちハみるみ
ゐ〳〵 【拾】 哀四 右近 【大和物語】 「わとうゝ〳〵ゐをバおからぶそちひてゝ〳〵人のいのちのをゝくもいうる 【六帖】
五 「秋のよハ春日わとゝくものおれやうすみなきりやちくまさるゝん 【新古】 哀二 俊円三司母 「とゝれじのゆ
くままでハうゝわれハゝ〳〵をうぶりのいのちとゝぶみ 【玉葉】 雑五 二品親王九助 「そのゆ 又むゝ〳〵ぶりにおう

ぬしよわすれやはせんそのまゝで 後拾 雑四 和泉式ア
やすらはん 哀のまぎれに 山家集 「のちの世をとくとちぎりおきてしを
なをこゝろ 玉葉 春下 俊成 「さくらちるのぞれりめのちひ
つゝくさゝ我わすれめや秋山になくしかのこゑ 拾玉 二 「なくしかになをかさらみねのく
ずとりのわれさえよその一本メ 玉クダ 「ひとりねしのゝ
ぐさみめのゝぶ人のかずさゝれバわすれやらん 続古 哀五 今上 「おのしいで又こゝまで
ハるくゝるわすれしをといでもあらせん 拾 哀五 いせ 「さやこゝろ
だにいみへのみさ クダ下 廿五 「うろづのなげきもすれて 文選 廿五 心にハもとれだにあるゝ
世にわすれんぞ 伊勢 廿三段 「さえにる中おやわすれざりけん 羽つが 廿三 氏息ふのたすをれがしー
わすれ〳〵ねる 「このひ 廿二 秋 拾遺 哀五 「よそにてもこゝろハ
ハるくゝれがさみぢ 新古 春下 良平 「ちる

わすれがさみぢ

○本妻ライフ 文選 ○がさこゝハ難サニトイフ河ニ又残オク形見ノコトナイフ ○河ニハ皆ニ様 カヲテイヘリ
古 哀四 「ふるさとのちぐさ 当ニ未トケヌヲヲラバアカヌヲヲニ ワセヤラ ナゲサメ ラニラク
後 哀三 「こひてつんとわりみんのつちおさハ〳〵にてもこれよりつとれず
いろ〳〵人心わすれがさみぢ おやゝしのゞ 狭 三 「のぶがさみぢ
みぢかる 夫 八十五百番顕昭 「今〳〵ていなばの山おれ〳〵ぞすつとそれがさみぢ
るどわすれがさみぢをゞにゞめもゞちにんと 細流 我娘ニ子ナドモナカリシコニ 狭 二上 廿二 こハいか
にもでさゝられがさみぢゞくれ〳〵あてさせめつるそでのしづくことろにのみぢとるまのほれかり

「さゝなみやおうのみるさといくえうつとれがさみぢ
さるみのつとれがさみぢのこゝねのくるををゞにのこせさくるの山ゞぜ 今撰集 上 「つゞくでくるをぶにのこせ
物のさゝなあうでちゝあるわすれがさみに 新続古 雑上 顕昭 「今〳〵ていなばの山の外〳〵さすつとれ
がさこゝの一本よりがみ 夫 四 知衆 「さゝなみのゝの外れぜきのさゝなみのこぞする

わすれがひ

忘貝 万 一廿七 「大伴のみつのもまなるわすれがひわれハわすれじ
六帖 三 万 十二 「きのくまのあらゝの浜のますれがひわれハわすれじ 万 十二廿八 「あまをを
とめうづ花とるとゝわすれ貝仕ゆゝわすれ〳〵ゆゞすゞゝを 夫 廿七 「ゝとまあゝバ
ひろひにゆん伊左のまゝにるてふ忘草すれ貝 同 四 えま 家集 「忘貝ひろひたゞりにをみ
うのらゝみてわるわどハへにそう 同 日 「わすれがひよせりやすゝともゝゝのちゝうつみを
をうゞへつるる 同 日 同 十二 「わのゝゝにてさくひちてい
に 後拾 羇 定頼 「松山の松のう〳〵凡きさよせバひろひてしの
「ゝみのゝゝうの〳〵すれ貝人わとるとゆわれわとれ
てふすれ貝わとれにゝゝゝみゆきまさバ 続後 哀五 「いぜのあう蜜のうる
わとれ貝とバひろハざりそう 土左 「するなみこちもまぜちん わづこふるん わすれ貝おりそ
ひろりん

わとれぐさ

忘草 詩衛風 雪得綾草言樹之背 文選 六 西陵遇風詩 無萱将如何註諠草忘憂也萱諠
通 和名抄 廿二 萱草一名忘憂和須礼久佐 万 三卅 「わとれぐさ我ひやにつくかく山のみうにゝとそ
をわとれぬがさめ 同 四五十 「わとれぐさ吾下紐につけれど思(シタ)のゝとぞこゝにゝありけり 同十二
「ヨゞヤゞのせこのゝとぐさわすれぐさこれぞいもゞおもひぞ 夫 廿八 貧え 「うちゝゝの
びいさゝこの松の忘草わすれ人のまゝやつまぬと 同 日 兼輔 「門ぜのみそなぐさもんむり

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』　請求記号 837-79
ガラス使用

水我のみこひつゝめ、こゝらこゝろすれ

つゝれゝの

こゝのたび　新六　四　知家「つゝれゝのちぎりゆえこゝろのまれねをけふにいひしひとのこゝろのたび　新古　哀三　儀同三司母「つゝれゝれやくまもぞ人をかぎりのいのちとぞたのむる

ようられへつゝまとらふ　古　雑上　忠岑「きみこふるなみだのかずをかぞへつゝぞ　同　哀五　ふるさとのあれはつゝすれぎぎをだにさくやおひしげるらん　後　哀六「つゝれゝのあふのあをやぎいかにそめてみし　玉葉　廿六　やうゝ〳〵つゝれぐさおひやそふらん　伊勢物　卅一段「つゝみのにおみなへしおほくさけるをのへにおひつゝれぐさのごとくにおひたるを　生左　まみのにおみなへしおほくさけるをのへにおひつゝれぐさのごとくにおひたるを　後　哀三　長谷雄「我こめハみるひやるゝ〳〵つゝれぐさつゝるバくるせぬ人にさそはれぐさにさゝてつゝりけるいせの大輔「あれにけるやどのつゝきだのつゝれぐさうらゝ〳〵げれとふちさゝ〳〵ざりゝを　古　哀五　そせい「つすれぐさなにさうたひとおひひゝはれなれ人の心ちりゝり　同　日「つゝれぐさたもとゝまをあふこのいくくさ秋のゝもりせさし　伊勢物　廿一段「今ゝそつゝさゝくさの狩さゞに人のゝまもるせぶとうぐな　和泉式ア集　下　ひさうおゝせぬくよつすれぐさゝのぐさとつゝみてやゝそ「ものおもひぐさこれとぞおもふくみそそう

つゝれゝのふ

忘水　新六　五　知家「まろびのそのにふりしつゝれ水さえまくさをなげくころうる　後拾　哀三　大和物語「伯吉の浅沢とのゝ忘れみづさえ〳〵あふりぐる　新古　哀三　是則「きりふきし秋の野中のつゝれみづこゝろ〳〵あるころうる　拾玉　四廿三「夕まぐれしぐゝろ放のつゝれみづおりひいづくよ神ぞめれなん　夫　五　仲正「苗代のこゝひをすてゝつゝれみづゆくゝさゝ小山田　同　廿三　兼昌「つゝれみるあゝさのつゝれみづゆくゝさゝ白太夫「あづまのゝうやづよゆくゝさゝつゝれみひせぶるみづや狩みづさゝゝん　頼政集　下廿三「さゝむとまをゝてさゝゝ〳〵「人かみるむすぶなれどゝ忘れ

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

837
13
79

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』　請求記号 837-79

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用